
（毎月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可）
明治三十五年十月廿日發行
女鑑
第貳百六拾參號


三井呉服店
東京日本橋駿河町
大阪高麗橋三丁目
東京電話本局 特五二五、一二一七 一八六〇、二二二二
大阪電話 特四七三 一六五〇 東二四八六
新柄流行の反物品々階上階下にのこらず陳列し尚休息室をも取設け候間ゆる〳〵御遊覧奉願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送可仕候尚注文案内書も有之候

# 女鑑第貳百六拾參號

## 目録


**口繪**

近衛公爵夫人及下田歌子刀自の眞蹟
吉田比佐子、小畑いく子兩刀自の肖像
華族女學校職員
茶臼山、錦帶橋、三國峠の景

**社說**

孝と愛（女學生に就いて）……一

**論說**

道德の眞意義……村上文學士……五
婚姻哲學……前田長太……八
日本婦人の將來に就て……磯部武者五郎……一二

**史談**

西比利亞の孝女……宮舘さだ子……一六
慈門尼……小林文學士……一九
明德馬皇后……濱田文學士……二二

**學藝**

國文學講義……井上頼文……二四
通俗土佐日記（第一）……兒玉彌三郎……二五
地質學の話……早苗生……三〇

**家庭**

慈母と愛兒……津田元德……三五
家庭俳句……內田旌文……三八

挿花の話……小畑いく子……四一
和歌通信講義……山崎彩峨……三四
四季家庭料理……大西よし子……四五
裁縫實修……野口紫吉……四七

**漫錄**

婚姻論……天野文學士……四九
女子服飾の沿革……上地信成……五一
繪畫……宮崎文學士……五四
山家の日記……笠木しづ子……五八
結婚に對するトルストイ翁の意見……佐藤天風……六三
白粉の話……MM生……六六

**小說**

垣間見……井上雲嶺……七〇
おあさ……天聲……七六

**文林**

短歌……東久世伯外……七九
薔薇の花……小西甚之助……八一
野寺の暮……橘村……八一

**敎の庭**

友……永井さい子外……八三
月下讀書……八尾いへ子外……八八

**雜錄**

數十件


### 社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は（一錢、三錢）一割增の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納稅の來書は一切受取り申さゞる事


**定價**

一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

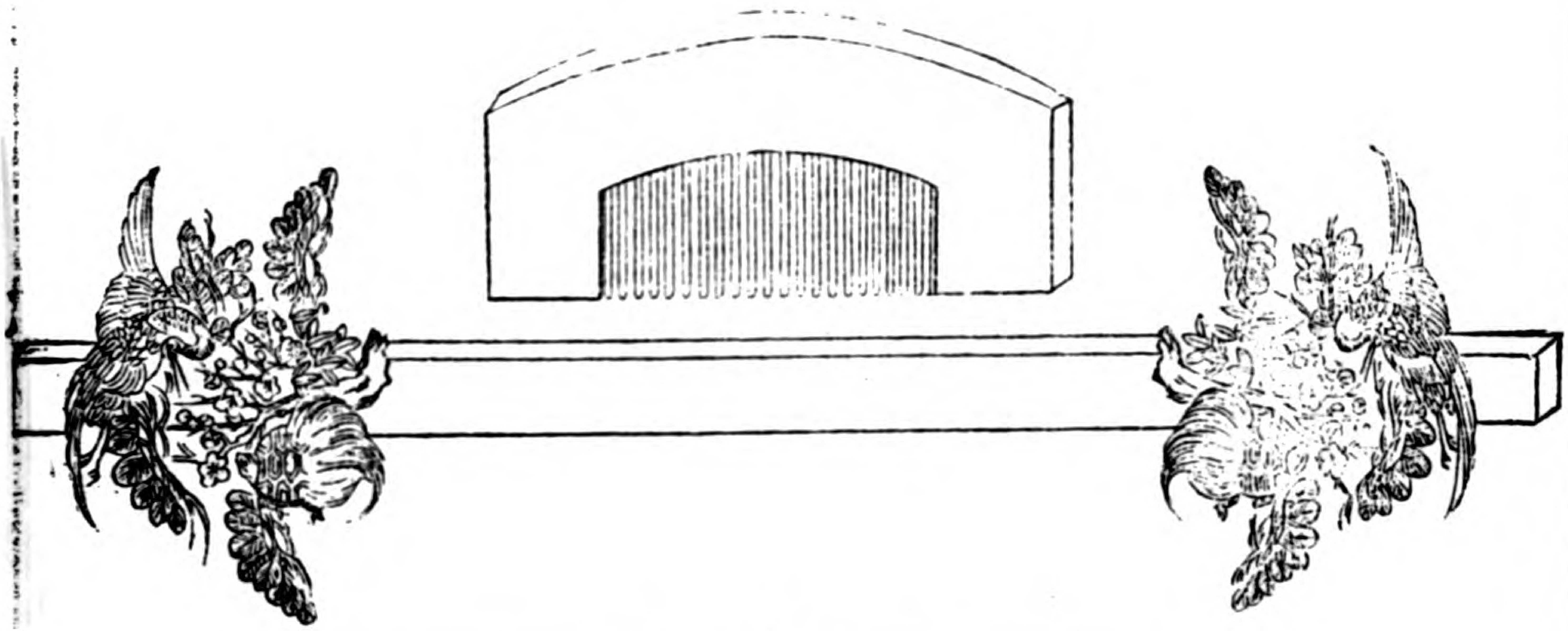
**廣告料**

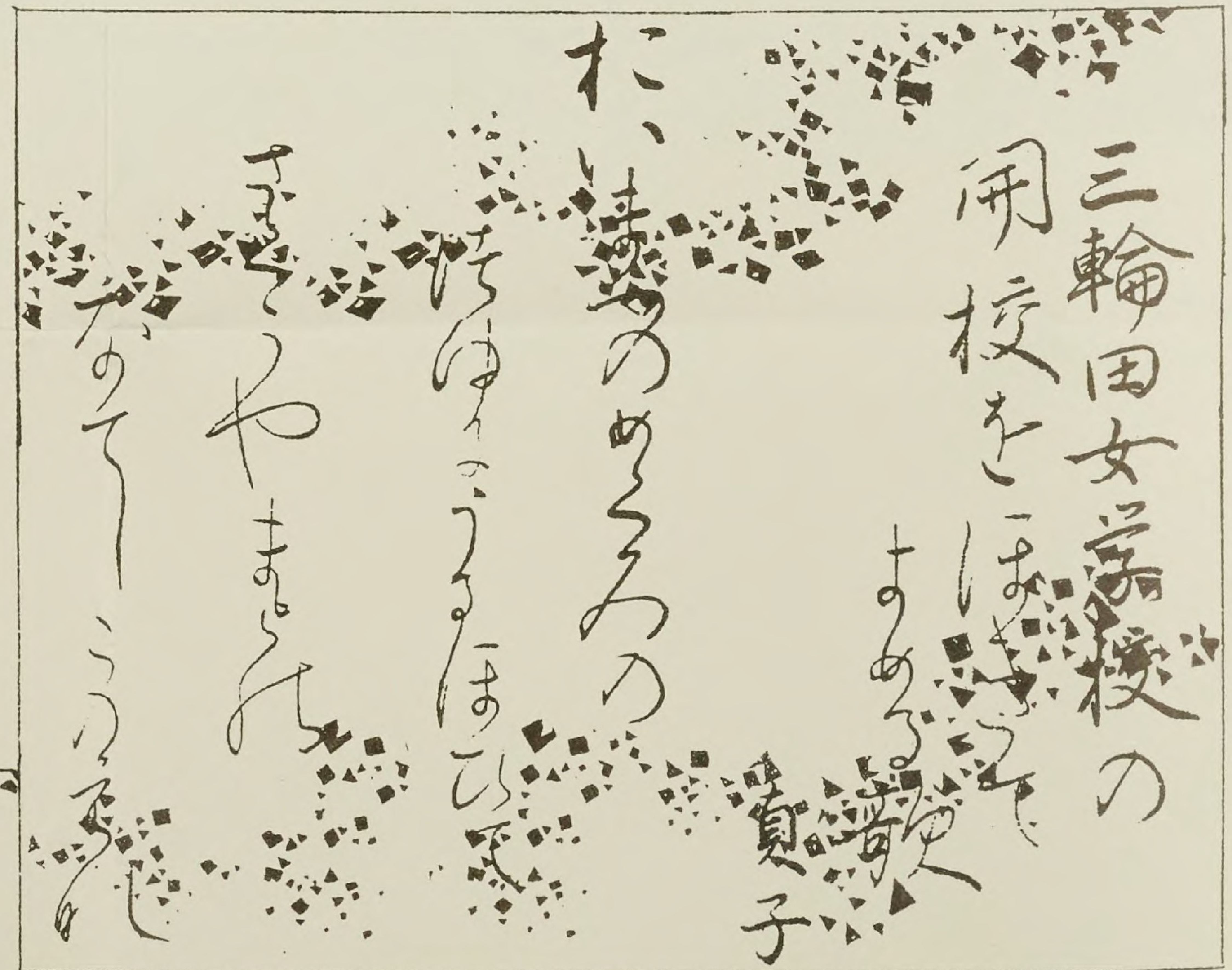
五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
（色刷は特に御相談に應ず）

明治三十五年十月十九日印刷
明治三十五年十月二十日發行

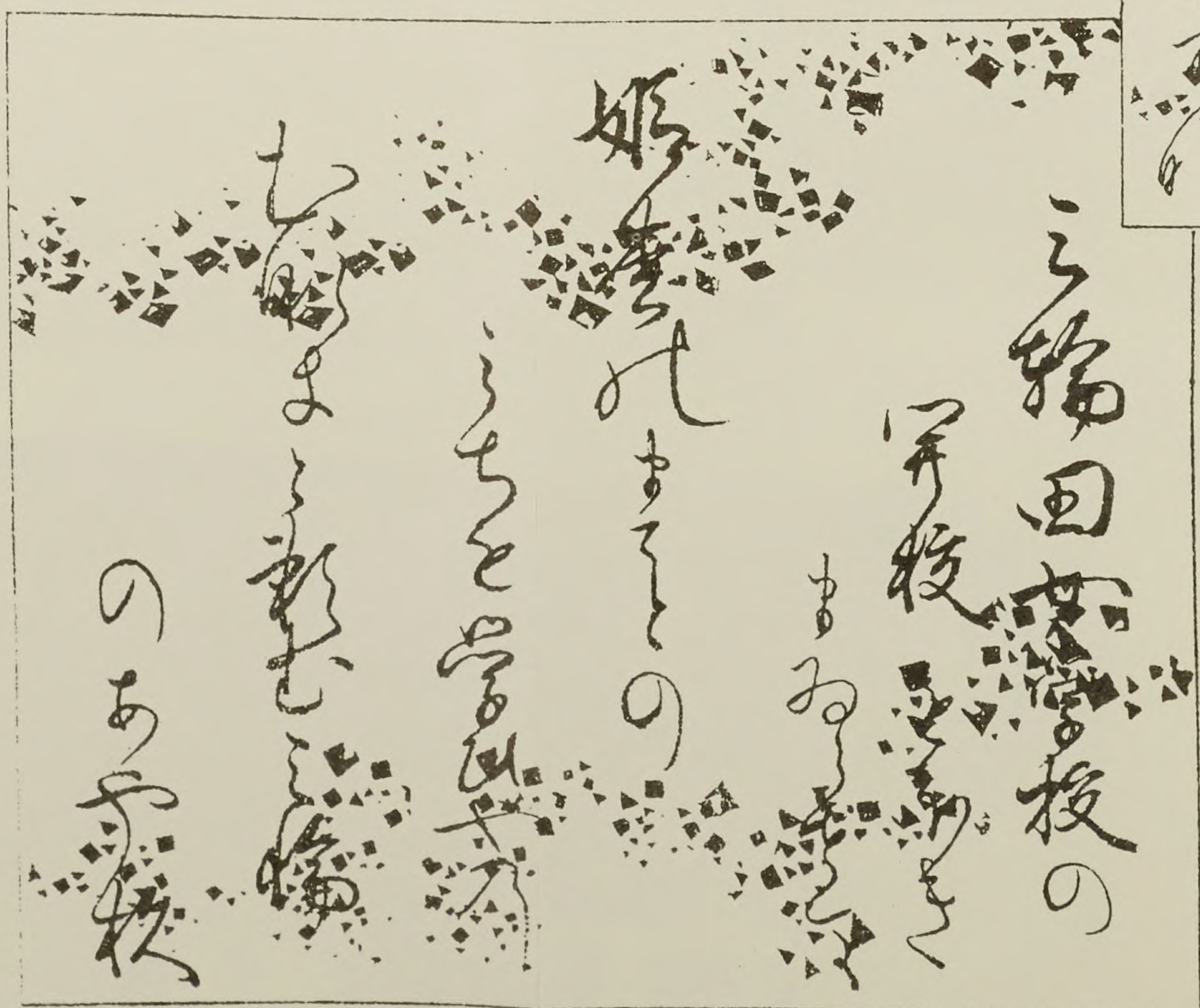
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊素一
東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地
印刷人 並木貞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元 株式會社國光社出版部
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候





近衛公爵夫人貞子眞蹟



下田歌子刀自眞蹟



吉田比左子刀自



小畑いく子刀自

●吉田比左子刀自　現時東京に於ける生田流箏曲の泰斗と仰がれ、嘗て貴きあたりの御聞きに達せしこと數回ありき。一條家を始めとし諸家の令孃に斯道を指南すること十年一日の如く、琴、三絃、胡弓等達せざるはなしといふ。

●小畑郁子刀自　慶應元年大阪に生れ、一たび府立師範學校に入りしも、故ありて中ごろ退學し、其後東京に出で、專ら國語、和歌、漢文、裁縫等を修め、目下牛込上宮比町に女學院といふを設けて、諸學を教授し居れり。刀自又た筆蹟に巧みに文章にも妙を得たり。現にわが女紙に挿花の講義を掲げ且つ其他の寄稿をせられつゝあり。



華族女學校職員

小野綱之助
武田太郎吉
土屋奉次郎
小宮山權六
宇佐美仲次郎
酒井もと子
根津安尾

---

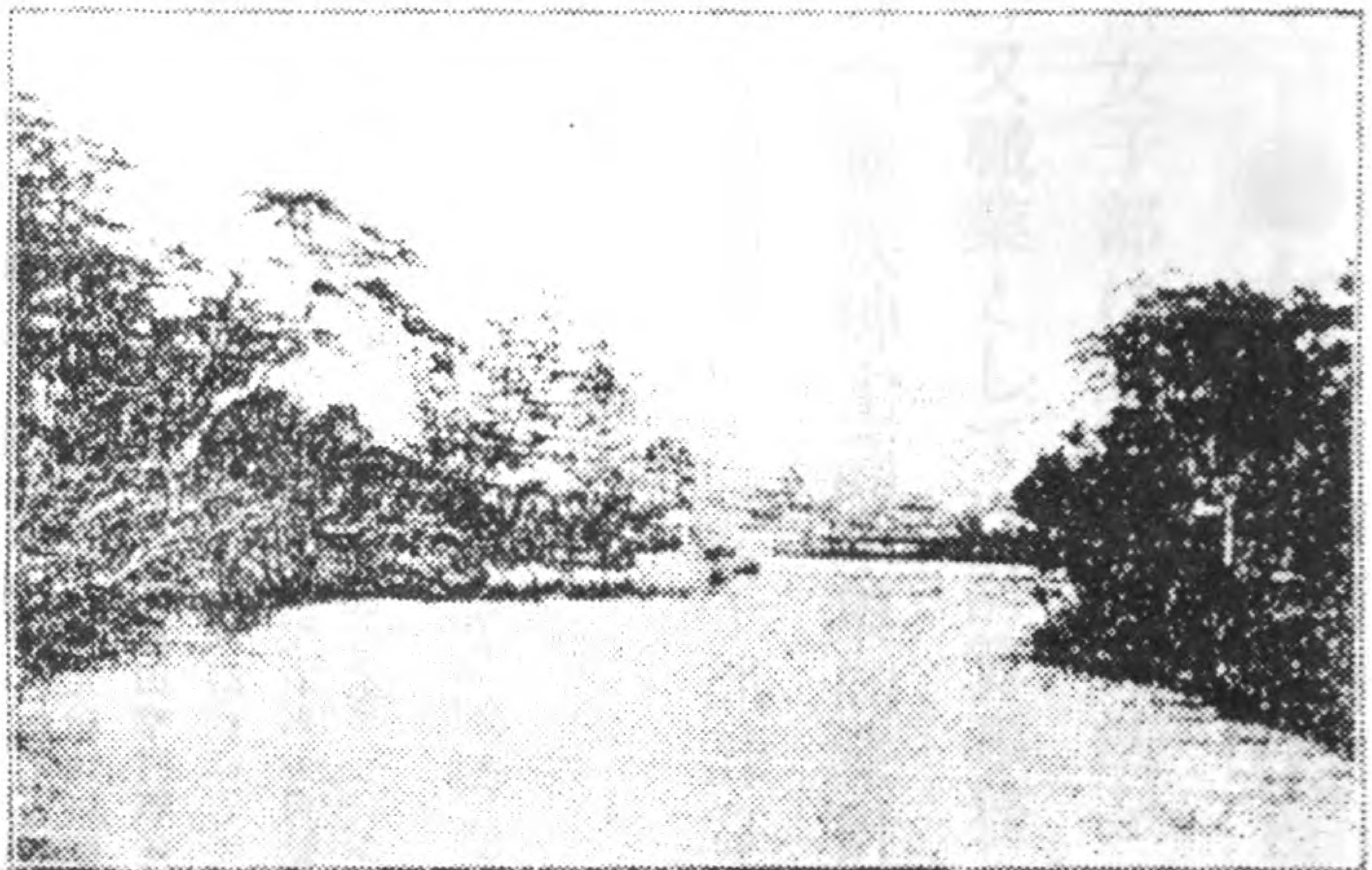
岩間芳松
志村直護
小野泉太郎
岡本清勝
小笠原清務
秀島成績
門屋恒之
荒木鐸
大宮兵馬
平岩扶佐吉
清水一貫

---

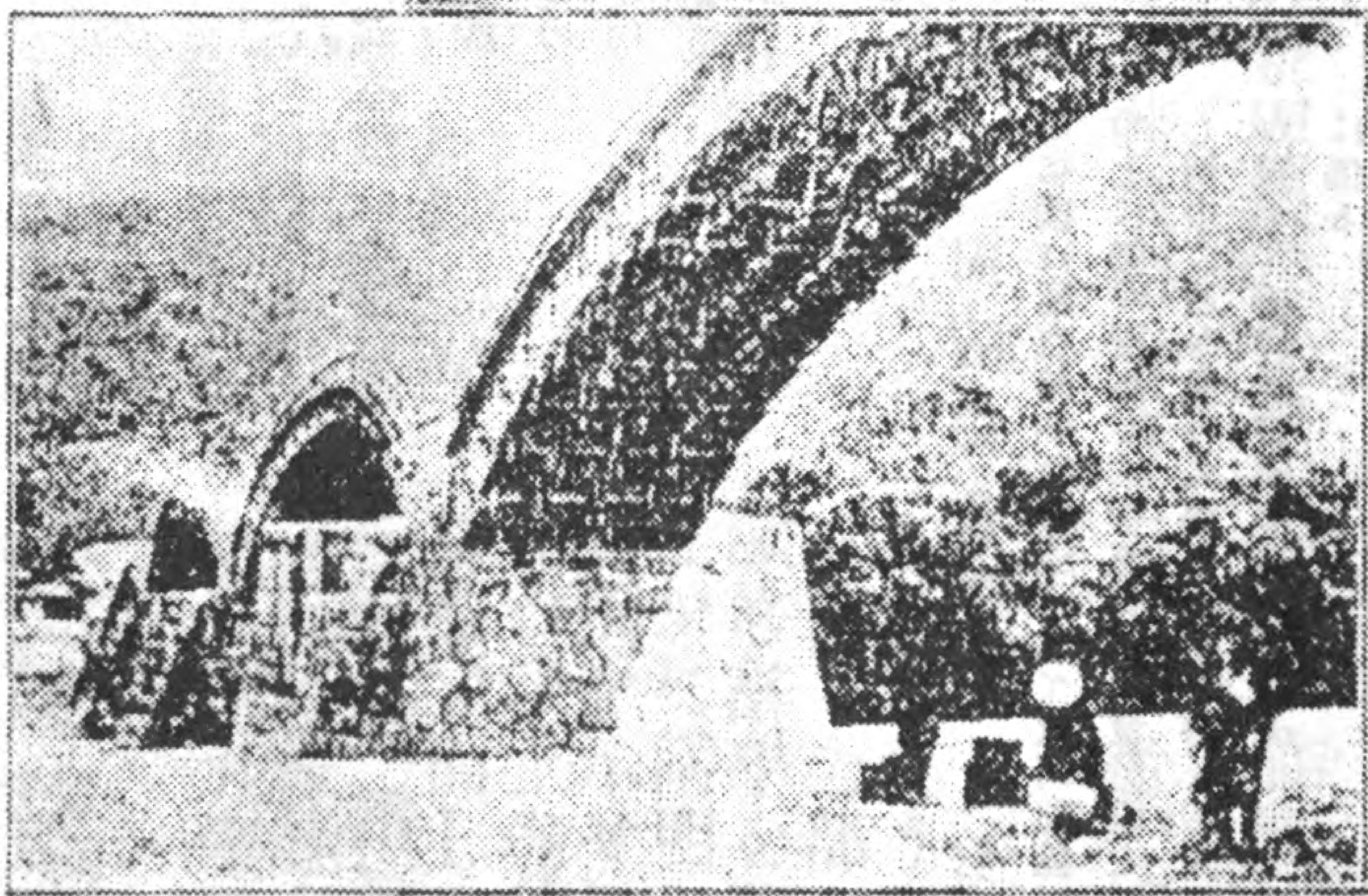
田中阿歌麿
坂正臣
島山啓
土屋弘
佐野安
細川潤次郎
淺岡一
秋山四郎
井上頼圀
愛原信充
野矢丈夫
原田稔甫
高知好子

---

坂井乙名子
藤波愛子
永田とう子
遠山甲子子
松野久亘々子
ウエストン
下田歌子
木村貞子
塚原律子
塙濱子
本多高子
渡邊政子
柴田貞子
迎てる子



攝州茶臼山



周防錦帶橋



越後三國峠

（一）

## 攝州茶臼山

茶臼山は天王寺の西南にあり元和元年德川家康激戰の古戰場にして又眞田幸村戰死の地なり山の東南に邦福寺あり禪刹にして俗に雲水と稱し精進料理を以て有名なり庭園頗る幽雅を極め四時の觀賞に適すといふ

（二）

## 周防錦帶橋

錦帶橋は延寶元年の創建にして玖珂郡錦川の上に架す橋長百二十五間一に算盤橋と稱し河中に石を疊みて築き構造の奇なる人目を驚かす橋畔錦帶橋の碑は明治九年の所建に係る

（三）

## 越後三國峠

三國峠は信濃越後上野の國境に跨り武州秩父の山脈に連亘し街道第一の險所と雖も山中溪壑の奇景に富み且躑躅花に名ある所なり

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

# 黄金世界

啞夢道人編

寫眞版挿入

世に人物評多し而して讀むもの人物の人物の眞相を究むる能はず、雲霧を隔てゝ花月を見るの憾あり、本書の黃金世界に一大勢力の原動力となり或は恐るべき潜勢力の伏魔殿たる富豪を拉し來りて、彼が今日の成効を致したる所以と其平生に於ける擧動とを細大漏らさず讀者の面前に羅列し直に渠の眞面目を發展す要する本書は選等の金光赫耀たる外面を描くに非ずして如何にして其金光を發するかを究めんとする者也其人物は千葉勝守田實丹及び女流に在りては後藤陸奥兩伯夫人以下數名の傑物に筆を着けたる者なり。

實價金參拾錢郵稅四錢

# 小説 紺暖簾

山岸荷葉著

鏑木清方畫

町内に老舗として名代の津久水屋には、才色並び備へて評判の女房あり、戀か、戀にあらす、嫉妬か、嫉妬にもあらす、死を想ふまでに煩ひしは、紫陽花の池の畔に物想ふ娘あるを聽き、花柳のあたり名の如く清き愛らしき藍子が胸のほどを窺へるにあれど憂き秋も過て初雪面白く、遂に樂しかるべき春を待つめり。

實價金四十郵稅金四錢錢

# 日の出島 朝日 上下

村井弦齋著

清方輝方畫

蓬萊、鶴龜、高砂、住の江、富士、新高、老松、白鬚、東雲、曙上下の卷を重ねたる弦齋居士が大作日の出島は今朝日の卷上下を發行す。其結構は敢て玆に贅せずとも、數卷讀みつゝきの讀者は略ぼ豫想せらるゝ處なるべし、

上下實價各四拾錢郵稅四錢

# 小説 三湖樓

田村松魚新著

年方畫

湖畔清風徐ろに吹く所、三湖樓上何等の消息をか傳ふる、松蔭涼しき後庭の朝、高閣欄に立つ山寺の夕風、日に遊ばんと欲する人却て戀情を惹き、屢々玆に大事を起し來つて葛藤結んで解けず、遂に湖上風雨の一夜、更に大活劇を演じて大局を結ぶに至る。這般編中個々の人物躍動し來り、思はず讀者をして快哉を呼ばしむるものあらん。

（近刊）

發行所 東京日本橋通四丁目角（電話本局五十一番） 春陽堂

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

**二八水**は
肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひゞ●すべて肌のあれおしい下に用ゐて尤もよし

又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり（中瓶一本十五錢）

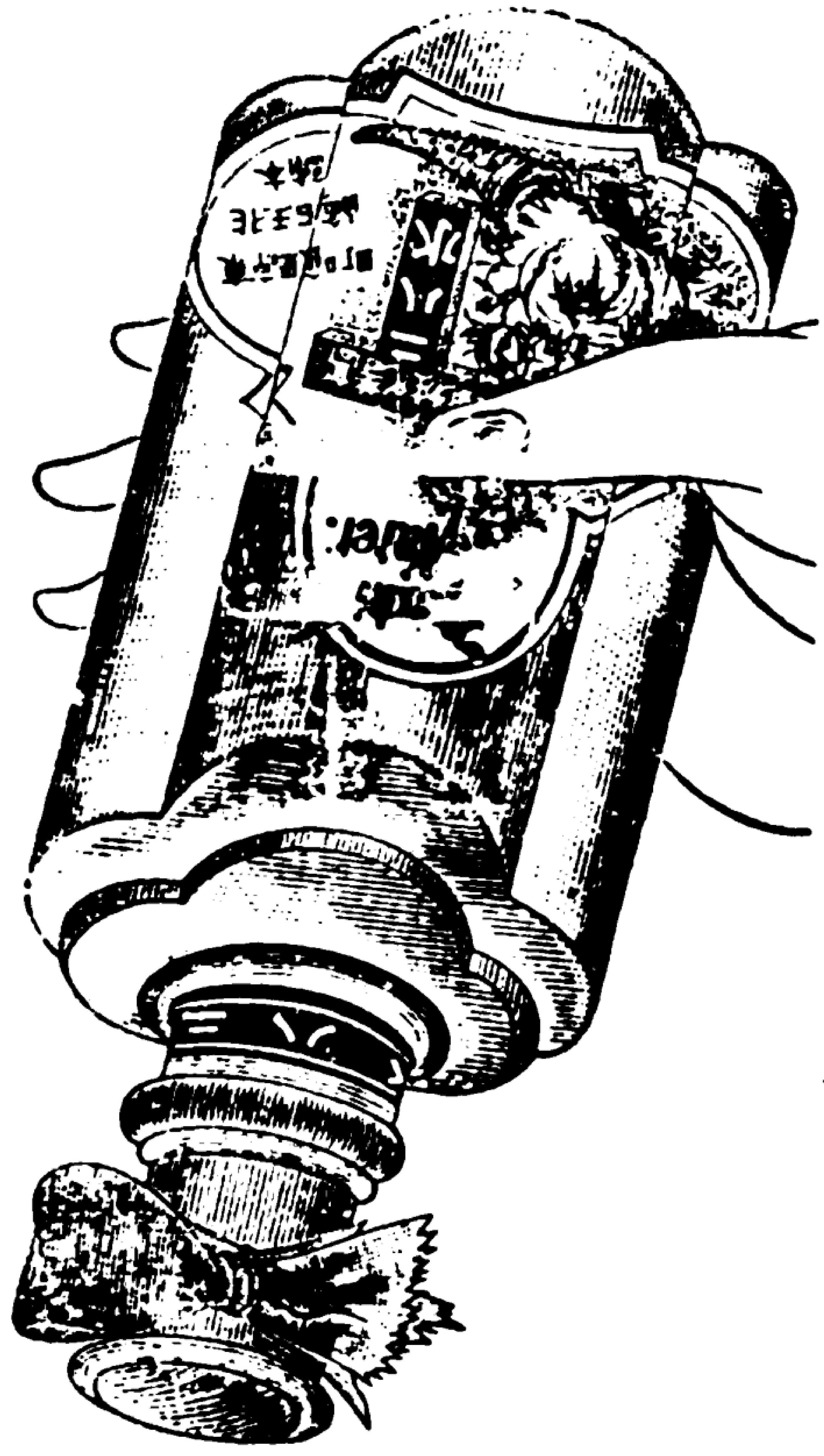
登錄商標

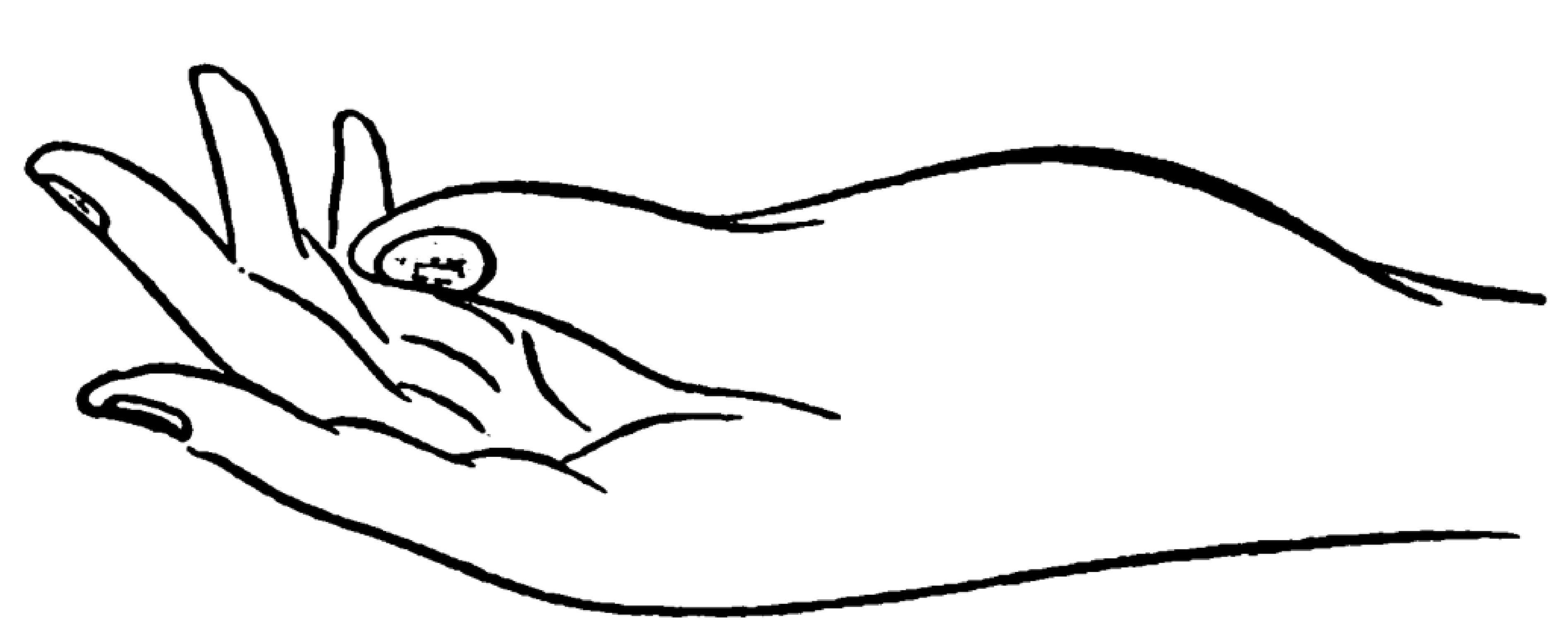



本品縮圖

# 花王石鹸

●品質ノ善良ト衛生ニ經濟ヲ旨トシテ製煉シ洽ク好評ヲ博シタル佳品ナリ





發賣本舗

東京日本橋區馬喰町二丁目

**長瀬富郎**

（電話特浪花九二二）

女鑑　第貳百六拾柒號

# 孝と愛（女學生に就いて）

涼夜秋燈に對して、靜に書を讀む時、端なく故山一片の音信に接しなば、その悅びや、美味珍羞にも優りて、心の愉快、言ふべからざるものあらん。殊に性來涙に脆き女子にありては、又一段の感懷に打たれざるを得ざるべし。

夏期休業の日も夢の間に過ぎて、父母の膝下を離れ、懷かしき故郷を出でゝ、書笈遙に帝都に上り、今は再び學窓螢雪の功を積まんとする諸孃子の心の裡には、將た何物か常に往來して已まざるべきぞ。言ふまでもなく其心は故郷に在るなり　父母に在るなり、兄妹にあるなり。如何に故郷の山光水色の美はしきか、如何に父母の愛の溫かなるか、如何に兄妹の情の濃なるかを懷ひ奇ば、縱ひ學若し成らずんば如何なることありとも、返らじとの氣健なる決心を有する孃子にても、形影相顧みて、爭でか寂寥たるを覺へざらんや。

蓋し此心や、洵に人生本然の性質より流れ出づる潔き心情にして、その源を尋ぬれば、則ち孝の心なり、愛の心なり。孝の心と愛の心とは、人類處世の要義にして、日常居措の間、須臾も離るべからざる

ものなれば、女學生が學窓勉學の暇、又は闌夜將に寢に就かんとするの時に於て、故鄕、父母、兄妹といふが如き、淸き感念を湧起するは、寔に理なりと云はざる可からず。

されど此心と情とを以て、啻に其家を憶ひ、親を懷ひ、友を思ふのみに止まらしめば、是れたゞ僅に孝の心の一端といふべきのみ、愛の情の一隅といはんのみ、端と隅とは全體を距ること遠し、豈直に以て孝あり、愛ありといふを得んや。乃ち知る、此心を擴張し、此情を伸達して、完全なる孝と愛とに爲さゞる可からざるを。

然らば則ち女學生が、その學窓の下に於て、故山の父母に對し、朝夕の奉侍に換ゆべき孝の道なる者は何ぞや。雪山幾百里を距てたる家國の兄妹と握手談笑の歡に代ゆべき愛の道なる者は何ぞや。曰く元より之れ有る也、蓋し父母の心を以て、我が心となし、以て之を其身に行ふは大なる孝ならずや。兄妹の吾れに望むところのものを爲し遂げて、その意を滿足せしむるは大ある愛にあらずや。是を以て之を言へば、天涯遠く離れ、雲山遙に隔たりて、朝夕の奉侍を欠き、談笑の歡に接する能はざるも、猶は父母に對して孝を盡し、兄妹に對して愛を致すの道はあるなり。

父母が其の最愛の子女を。膝下より放して、遠く遊學せしむるは、學を修めしめんが爲なり。德を研かしめんが爲なり。品格を高ふせしめんが爲めなり。是れ實に父母の心なり、父母の心此に在りとせ

ば、之を其躬に行ふは、子たるものゝ本務なり、故に學を修め、德を硏き品格を高ふするは則ち父母の心を奉じて孝を完ふするの道ならずや。言ひ換ゆれば、學德兼ね備はりて、品格高き婦人となるべき道を履み行ふは、女學生が父母に對する孝の道なり。試に思へ、遊學三年五年の後、目出度業を卒へて錦を家山に飾らん時、親たる人の心の歡喜は如何なるべきぞ。その子女の手を握り、在學中の苦を勞り慰めて、嬉し涙に人生行路の憂苦をも忘れんには、無上の歡と樂とは、父母の心に生ずるなり。この歡と樂みを生せしむるの孝たるを思はゞ、女學生が在學中の孝道なる者の如上記せるものゝ他に存せざるを知り得べきなり。將た又た可愛の兄妹が、その妹たり、姉たる人の遊學に就きて、愛の眞情より心中に祈願して措かざるところのものも、亦た唯だ學德を修めて、品格の高からんことを望むにあるは勿論なれば、女學生が遠隔せる故鄉の兄妹に對する愛の情も、亦全く此に在りて存ずるは、更めて言ふまでもなかるべし。

されば此心を以て心とし、之をその身に行はゞ、孝の道、愛の道も自ら完ふすることを得て、女學生として、婦人として更に申分とてはなかるべし、何ぞ復た海老茶式部、女ハイカラ抔の批評あるを容れんや、願ふに數多き女學生の中に、操行堅確ならずして、往々厭ふべき惡評あるものを見るは、唯た孝と愛とを忘れたるが故ならんのみ。

社說　四

今は秋色都門に満ちて、讀書勉學の時節に際す、望郷の情自から切ならざるを得ざるべし。燈火豆の如く、四顧寂寥を感ぜん時、幸に吾輩の言を三省せば、諸娘子が孝と愛との道、及び勉學の道に於て、乃ち餘師あらんなり。

知足　中江藤樹

ながれゆく水にひとしき心あらば
はづべきことのなき身とぞなる

自心不二

風になびき露にむすびて女郞花
身をこゝろともせぬすがたかな






# 道徳の眞意義

東京帝國大學講師
東京外國語學校講師 文學士 村上辰午郎 述

道徳と申しまするを、兎角人は、四角四面な極窮屈なことのやうに考へられるので、それゆへ、時によりますと道徳などは、とても、私共の守れたものではありませぬ、などゝ申す人があります、ところが、この樣な人は、道徳の眞の意義を了解せない人であります、『道は近きにあり、然るにこれを遠きに求む』といふ語は、このやうな人のことをいふたのでありませう、道徳家と申しまするど、孔子樣か孟子樣か、それとも、印度のお釋迦樣か、又は、希臘のソクラテス氏、或は我國の近江聖人中江藤樹のやうな人でなくてはならぬやうに考へる人が多いやうでありますが、それ程迄でなくとも、道徳家となることはできます、私は皆樣方と、互に助けたり、助けられたりして、共に道徳家となりたいものと存じます、なりたいと存ずるではない、是非とも、道徳家とならねばならぬのであります、皆樣は後日人の母となり、從て、子女の最初の敎育家となるべき方々でありますから、殊更、道徳家となる必要があります、なれども、皆樣方ばかりでなく、商人であらうとも工人であらうとも、農民であらうとも、皆道徳家でなくてはならぬのであります、商で身を立てやうが、農で世を渡らうが、若くは、敎育家となりて人を導くとも、それらは、各々得意な方面へ赴

くがよいが、然かし、道徳といふ方面へ赴くことは、何人も皆然りでなくてはなりませぬ。

然らば、如何なることが道徳で、従て、道徳家とは如何なる人をいふのであるかと、斯の様に申しますれば、日々のことに、道徳といふことゝ、不道徳といふことがあるのであります、通常人が考へるやうな、四角四面なことばかりが道徳ではありませぬ、元より、それらも道徳に相違はありませぬが、然かし、そればかりが道徳ではないのでそれは道徳の内の一部分といふべきものであります、お互は、日常僅かなことにさへ注意してゆくならば、四角四面な道徳も、自然と、何の苦もなく行ふことができます、中江藤樹先生の教にも、

人皆悪名を悪みて令名を好めり、小善を積み積らざれは令名顯れず、小人は人の目に立つべき善あらば爲んと思ひて小善は目にもかけず、君子は日々に爲すべき小善を一つをも捨ず、大善も應ずれば是れを行ふ、求めてなすに非らず、夫れ大善は稀にして、小善は、日々に多し（云々）大善は人爭ひて爲さんとす、名を好むが故なり、名によりて爲す時は大も小となる、

といふことがありますが、實に尤も至極なる教であると思ひます、今日常のことに就て、二三の例を擧げて見ませうならば、朝起きたならば、顔を洗ひ、髪も結びてみださず、衣服も人の前へ出でゝ赤面することのないやうに正しく着して居るのがこれ即ち道徳であります、顔も碌々に洗らはずして、人の前へ出るとか臭氣を放つ程でも髪を洗らはないなどは、これ即ち不道徳であります、女では、一寸むつかしいことであるかはしれませぬが男子であるならば、夏頃でもあつて寢汗で身體が

不潔であると思ふたならば、井戸端へでもゆきて、能く身體を洗ふのが、これ即ち道徳であつて、不潔と知り、衛生上よくないといふことを承知して居りながら、面倒であるからとて、身體を洗ふこともなく、汗のまゝで、校服校帽をつけて、學校へゆくなどは、これ即ち不道徳であります、又、男女に係らず、毎朝奇麗に齒を磨き置くのが道徳で齒に不潔物が附着しても、清めず、他人に對して物いふときに、一種の臭氣を放つやうでも、頓着せないのは、これ即ち不道徳であります、それから、家のことに就て申しますれば、障子の破れたところでもあるならば、その所だけ張りかへて置くのが道徳であつて、一方の破れ口から、次第次第に破れてきて、見苦しくなつてゐても、そのまゝで顧みないなどのことは、大によくないことであります、私は親族の或る女の子に向ふて、お前は、おとつさんやおつかさんに孝を盡さねばならぬといふことは知つて居るであらう、それならば、若しも、障子の紙が破れてゐたならば、おとつさん、おつかさんから命ぜられない前に、自分でそれを張りかへて置かねばならぬ、それを御覽なさるおとつさんおつかさんのお心では、どれだけ悦ばしいかしれぬ、こゝらが、親に孝といふものであると、斯の樣に諭したことがあります。

人から見られて、家の内が不潔であると思はれるやうでは宜しくありませぬ。彼の家の妻君は怠惰であるとか、家の掃除が行き届かないなどのことは、能く人のいふことでありますが、このやうな非難を受けるやうではなりませぬ、又、家の周圍に草が生へたならば、それを取り除くのが道徳であつて、草茫々でも、そのまゝにして置くのは不道德であります。

かく述べてまいりますれば、決して、道徳といふとても、四角四面なものばかりではなく、極容易なことである、又、これらの容易なことを怠らぬ人が、これ即ち道徳家であるといふことが、御了解になつたでありませう、これらの例に就て述べますれば、數限りもないことでありますが、皆様は一を聞いて十を知ることのできる、お方と思ひますから、これで止めませう。

# 婚姻哲學（承前）

前田長太

（二）婚姻は必ずしも婦人の目的にあらず

世間の親達は其娘が婚姻を嫌ふて居るやうな擧動を顯さぬときは、必ず其心に之を希望して居るものと斷定し、娘の爲に好偶を撰擇するを以て一種の義務の如くに思ふて居る、然し茲には餘程注意しなければ、度々誤る事がある、余は先づ第一健康の良否を考へずして結婚させるのは、思はざるの甚しき事なるを叫ばなければならぬ。

結婚が身の藥になることもあれば、身の害になることもある、結婚して健康に觸るとか、生命に差支ると云ふときは、無理に之を強ゐるのは、頗る殘酷の擧と謂はねばならぬ、妙齢の女子にして資性纖弱、健康常にすぐれず、蒲柳の身重き事に堪へずと云ふやうなときには、家庭の花として永く老父母の慰となつて居るには宜いけれど、早く之を結婚させて、母の重荷を背負せ、家事の心配を掛けるのは、何如にも可哀相である、此の如き女子は未だ母とならぬ内に早く既に枯れて了うことがある、宛も朝に開き夕に萎む花の、菓實を

結ばぬ内に枯死すると一般である、時としては兒を舉ぐる時出產するの力までもなき爲め、母子諸共に世を謝して墓所の土に消えて了ふこともあるまさか？

特に此の如き女子が結婚の爲に遠く故鄕の天を離れ、親兄弟に別れ、昔育ちし家庭の和樂を棄て、山海萬里の地に行くときは、設令舅姑の厄介なしとするも、又設令琴瑟善く調ふて夫婦仲が睦まじいと云ふても、日夕望鄕の念に苦められて居れば、溫きホームも溫を感ぜず、これが爲に可惜嬋娟たる花が乍ち散つて了ふこともある、夫等此等を想ひ合はすれば、少くも此の如き不幸兒の爲には結婚させぬ方が尙可ではないかと思はれる、然し生命を犧牲に供してまでも、結婚の快味を嘗めたければ、それは自由である、吾人は決して非婚論者ではない、但結婚は必ずしも婦人の目的でないと云ふ持論を主張するが爲め、不健康なる女子に就て一言する迄の事である。

時としては又不具片輪、不縹緻の女子があつて男子の愛眷を惹くよりも、其の厭惡の情を起さしむる樣の者がある、是は洵に可哀相である、御當人が結婚を望んでも、世間に買主がない、其時親子諸共に手を換へ品を替へて、種々樣々の方法を取り、粉黛裝飾到らざる所なく、或は其の衣裳を美にし、或は其の嫁資を大にし、務めて不具者の輿入を盛にせんとするけれども、天の成せる美質とは違つて、人の爲せる、裝飾だから、餘り幸運の結婚は出來ぬものである、其譯は此の如き者に引かるゝ配偶者と云ふものは、畢竟金の爲に買はれたも同樣であるから、成程金のある間はマア〳〵我慢して忍ぶかも知れぬが、金が無くなるや否や直に消せて了ふ者である、是に於て乎不幸者重ね

て不幸に陥るので、寧ろ初めから金を澤山所持して、安樂な獨身生活を爲して居つた方が尙宜かつたかも知れね、

若夫れ不標緻者を粉黛で胡麻化して、男を抱込むやうなことがあれば、一夜で化の皮が顯れて、翌朝直に破鏡の話になることがある、此の如くんば初めより、そんな演劇をしない方がましである所が廣い世間にはこんな藝を演ずるものもあれば、こんな針に引つかゝる奴輩もある、世は種々である。

以上は物質的理由とでも云ふべきものであるが他に又道德的理由とでも云ふべきものもある、是亦妙齡なる子女の結婚するに當りてよく〳〵考へて見なければならぬ所である。

婦人は結婚する以上は男子の權下に生息しなければならぬのが、我邦古來の習慣である、夫に反抗しなければ、自由にすることが出來ぬものゝやうに思はれて居る、又我意を全く打棄てゝ夫の意の儘に從ふのが、聽從と云ふやうに言做して、女子の淑德は全然玆に在るかのやうに思はれて來たものである、所がである、幸か不幸か分らぬが、女子にして斯う云ふやうな性質に欠けて居る者が隨分世に多く認められるのである、斯う云ふやうな性質に欠けて居る者と謂はんよりは、寧ろ之に反對の性質の者と云つて然るべきであらう、即ち彼の短氣な婦人、高慢な婦人、頑固な婦人、偏窟な婦人、一言すれば、夫の困り者と云はれるやうな、婦人が世間には隨分澤山ある、かゝる婦人は天性獨身で暮す可き者である、强て之を結婚せしめても決して成効はしない、幸福なる家庭は決して、築かれるものでない、矢張獨身で措け、困り者と云ふのが眞理である。

人或は云はん、斯の如き婦人結婚を強ゆるのは、天性に戻ると云ふけれども、婦人を獨身で置くと云ふ事も、天性に背く事である、且可哀相でもあるし、又危險にもあると、如何にも論者の云ふが如く其憂なきにしもあらずであるが、然し其の所謂危險なるものは無理に結婚させて、夫婦の義務をも滿足に盡して往く事出來ぬのに比して如何であらう、何にしても不都合ありとして論じても困る、妻となつて夫に厄介をかけんよりは、初めより妻にならぬ方が優ではなからうか、夫婦となつて甘く往かぬ女はどうしても獨身で置く方が良しいやうに思はれる。

　其外當節流行のお轉婆娘だの、外出のすきな婦人だの、將來夫を尻に置くやうな憂のある婦人だの、媧天下を築きさうな顏をして居る婦人に就きても、矢張獨身生活を執らしたいのもであるけれども、中々吾々の宿論の通りには往くまい、然し吾々の宿論の眞理は必ず證明されるものである、何せなれば、如斯婦人が結婚した後は、必ず夫婦喧嘩だの、離縁沙汰だの、嫉妬騷ぎだのと云ふやうな種々の不祥不吉なる現象が續々顯はれ出でゝ、成程結婚せぬ方が宜かつたと云ふ事を眼前に見えるやうに證據するからである。

　吾人は此等の理由によりて、世の結婚斷行論者に反對したく思ふのである、靑春妙齡なる女子の望に反對するのは、如何にも氣の毒な次第であるが、然し吾人の精神は之を困らせるが爲ではない其爲を思ふての議論である、又斷々乎として如何なる婦人にも結婚を嚴禁すると云ふやうな壓制的の言論を吐くのではない、凡ての女子の目的は、必ずしも結婚に在りと謂ふ可からずと云ふ迄の事である、凡てのと云ふことゝ必ずしもと云ふ、又

字に注意して貰ひたい、物質的には肺病婦人だの不具婦人、道義的には困り女とお轉婆娘、到底完滿なる結婚と幸福なる家庭を見得べき者でない事は、喋々の辯を費やさずして明瞭である。（未完）

## 日本婦人の將來に就て

磯部　武者五郎

近來女子に關する諸種の問題甚だ多く、新聞に雜誌に演說に日として、其聲を聞かざるはなし、誠に喜ばしき現象と云ふべし、今婦人將來の心得を述ぶるに當りて、過去に於ける日本婦人の有樣を略說して、比較の便に供せんとす。

偖て現時男女の關係地位如何と問はゞ、一口に西洋は女尊男卑たり、東洋は男尊女卑なりと答ふるもの多かるべし、然れども實は是れ皮相の觀察にして、取りとめもなき語と云はざるべからず。若し深く其實相を詮すれば、西洋必しも女尊男卑たらず。東洋必しも男尊女卑たらざるのみならず。日本婦人の如きは、却りて男女同等の地位を保ち、西洋婦人も猶及ばざる程の幸福を保ちたりしことは、事實の上に歷々たればなり。彼の文學者としての紫式部、清少納言の如き、神功皇后の三韓征服に於けるが如き、武人の妻女が武藝の嗜みありしこと、又場合によりては、生命を賭して節を守りたる烈婦の如きは、一般の婦人に關する例としては或は不適當たるを免れざるべし。因りて單純にして普通なる日本古來男女兒の祝ひ事に就きて、其例を見るべし。男兒の幟と女兒の雛飾りとは、果して待遇上尊卑の差ありしか、又婚姻の調度に於ても亦然り、寧ろ女子の方却りて男兒より優遇せらるゝの實あるにあらずや。是れ

日本が男尊女卑たらざりし一例證として見るべきなり。

男尊女卑——其風をなすも、女尊男卑——其俗をなすも、原因を探れば、由來女子は男子の玩弄物となり易きより起るものにて、世界各國皆この弊を免れざりしなり。夫の單に武勇をのみ尊びし時代の餘弊は、女卑となり、平和の時代は女子は交際場裏の立物となるを以て、女尊の有樣となる男女の尊卑は、畢竟兩者の平均を得ざるに基因せるものなり、西洋の女尊男卑の觀あるは、蓋し此偏僻の時代より馴致したるものなり。然るに日本婦人のみは、獨り男子の玩弄物とならざりし所あるを見る。是れ余が日本婦人の幸福なりしと云ふ所以なり。更に亦反對に外國婦人の不幸を擧げんに、彼の支那の婦人を見られよ、天然の足を縮少して、遂に歩行の自由を失ひ、他人の肩に倚りて、稍々其歩を移す有樣なり。これ何によりて然るか、男子が婦人の天然の容貌、身体に滿足せずして、人工的に裝飾せんとするに出でたるなり。苟も生を人間に享けたるもの、其天然の形躰を發達せしむること當然ならめ、然るに却りて之を毀損せしめらるゝ支那婦人の如きは、誠に慘酷なる待遇を受くるものと、云はざるべからず。西洋婦人がコーセットを以て腹部を狹小にし、腰部より下へかけ裳を擴げたる姿勢を作るも、男子の意を迎へ、其滿足を求むるに汲々たるも、亦齊しく之に異ならず、斯く天然の形體を毀損して迄も、男子の滿足を求むるの習慣あるを見れば、女尊なる評語、決して適當と云ふべからず。又印度、亞拉比亞、埃及邊の婦人も、種々の人工的作用を顏に加へ、南洋の女子も耳に環を穿つ等の細工をなす抔は何れも身體を毀損して男子の意向を迎へ

其玩弄物となれり、然るに日本婦人は、過去に於て身體を毀損したる點もなく、兎に角天然の形体を其儘に發達せしめ來れり。素より種々の原因により、身體の發達を充分ならしむること能はざりしものあるべけれども、西洋の如く、支那の如く天然の體形を毀損するに比すれば、最も喜ぶべき幸にして、我國婦人の大幸福なりと云ふべし。茲に最も憂ふべきは、漸次世が驕奢淫靡に赴くの風あり、若し此の風潮に伴ひて、日本婦人も或は身體を毀損して、裝飾を加ふるの弊に浸潤せざるとも計り難ければ、婦人たるもの、須らく過去の歷史に鑑みて、啻に男子の玩弄物たらざるのみならず、常に男子を助け勵まし、共に與に國家を維持するに勉められんことを希望して止まざるなり今日本婦人の風俗に就て改良すべきものの二三を擧げて、此論を終らん。

女子の服裝　日本婦人の衣服の改良を必要とするは、何人も之を認むる所あり。然しながら如何に之を改良すべきかは、亦共に迷ふ所なり。故に余は改良の第一着手として、袴を穿つこと丶同時に袖を成る可く狹小にすることを勸告するものなり、女子の衣袖の長きは、近時の流行にして、文化、文政頃は至て小さかりしなり。長袖の習風を改良するは、敢て難事とは思はざるなり。之等の改良に至りては、女教員卒先して實行せられんことを望む。

頭髮　日本婦人の頭髮は、結び方は隨分手數を要するなり。故に頭髮の亂れも、一般の風習として、深く意に介せざるが如し。之れ至りて些事に似たれども、國民の品位に關することは大なり。臺灣婦人も、アイヌ人も、內地婦人の頭髮を亂すの風を見て、常に輕侮の念を懷き、新領懷柔の上に

甚しき障礙を與へたりと聞けり。以て婦人の頭髮を梳ることの習慣を養成すべき必要なるを知るべし。

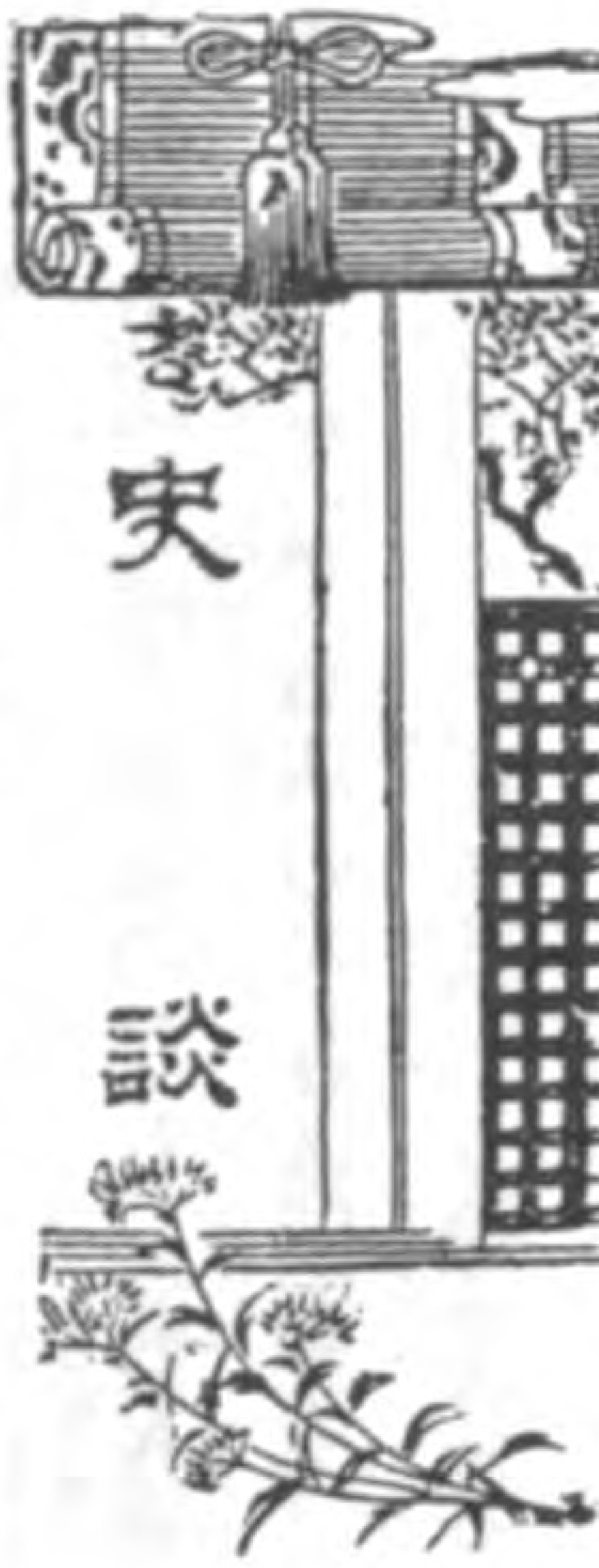
女子の體育　健全なる國民は、健全なる母により て生育せらる、故に女子の體育に關しては、刻下の須要問題となれり。學校にありては不完全ながらも、遊戯體操等の設けあれども、家庭に於ては絕て其等の方法を講ずるものなし、甚だ遺憾とすれども、只適當の體育法のなきに困めり。野外運動、羽子、ロンデンス抔は差當り適當なる運動法と思へり。尙家庭によりて薙刀抔も可なるものと認む。女子體育を奬勵すると同時に、服裝の改良は、尤も必要なるを覺ふ。

尙女子の將來に於ける心得中にて、尤も重大なる問題に就きて述べんとす。我國四千萬人の中二千萬人は女子なり。此國民半數の女子にして、國家の爲に盡すの精神なからしめば、安んぞ國の富强を希圖すべけんや。女子が國家の爲めに盡すと云ふも、彼の「ナイチンゲル」「ジャンダーク」の如き、事業を爲すべしと云ふに非ず。由來國家衰弱の原因は、國民の遊惰、奢侈に基因すること、古今東西其軌を一にす。日本現時の風潮は如何なるか、遊惰は或は一般とは云ひ得べからざるも、奢侈の風は滔々として、全國に渡れり。而して遊惰奢侈の源泉は、皆女子より始まると云ふも不可なきなり。即ち女子は常に新奇を逐ひ、流行に着眼して、奢侈の風に染みやすければなり。試に見よ、兒女の裝飾も、男子の服裝も、皆其家庭婦人の嗜好に基くを、世の風潮と云ふも、流行と云ふも、半ば婦人の心得如何にあるものなれば、婦人たるものは、常に勤儉貯蓄の美風を養ひ、遊惰奢侈の弊を矯めんことに心掛けらるべきなり。是れ

婦人の國家に盡すの一大義務なり。

○正誤　本欄内に連載したる母親の心得寄稿者棚橋絢子刀自を愛敬女學校長とせしは誤なり刀自は今年三月以來同校と全く關係を斷ち居られし由なれば此に是正して其誤を謝す

善良なる婦人は容貌勝らずと雖も愛すべきも久しくして衰へす（すまいろす）




# 『西比利亞の孝女』（承前）

宮館さだ子

やがて、『ネヴア』河の氷、全く融け。冬期中。取り除かれし浮橋を。再び、架設することゝなりしかば、彼は直に對岸なる『エル』夫人の許を訪ねたるに、豫て、『ミレン』夫人よりも、懇篤なる依賴狀の、到達しありしことゝて、歡待到らざる所なく且又、夫人の親戚にして、時の帝室とは、淺からぬ關係ある一貴紳は。父の赦免を闕下に哀願するに付き、及ぶ限りの援助を、彼に與ふべき旨を、約束してけり。

一方、『チー』公爵夫人に於ても、孝女『プラスコヴィー』の、露都に到着したることを傳聞し、彼を其邸に迎へて、寄寓せしめたる上、其斡旋に依りて、皇太后に謁見するの榮を荷ひき。

刑餘の一族として。西比利亞の配處に落魄し、邊陬の地、尚四時の序を失はずして、年々歲々、春信違ふことなく、雪に埋もれし、草木さへ、花をかざすことの、常なるに、あはれ、優曇華の花咲く春に遇ふべしとは、夢想はざりし身の、思ひ懸けなくも、至尊の面前に、咫尺することを得るに

至りしは、孝女の至誠、神に通じたるにやあらめ此時に於ける彼は、歡天喜地、只夢に夢みる心地せしことの、げにも、理あることにてありけれ。いよ〳〵、拜謁の日として、定められたる時は到來しぬ、彼は宮女に導かれて、玉座近く進みける折、父か至尊に咫尺することの、甚麼に困難なるかを、常に語り聞かしたることなど想ひ起し。若し、父をして、此狀を見せしめなば、其喜の如何ばかりなるかを、心窃かに思ひにき。

皇太后は、眞摯にして修飾なき彼の言行を、いと興あることに思召し、一身上の經歷、幷に、其尊むべき計畫に付き、親しく下問せられ玉ひき。此謁見の際に於ても、彼は父の寃罪を確信するが故に、敢て其赦免を哀願せず、唯更にあらためて裁判せられんことを、懇請したるのみなりき、皇太后はいたく彼の孝心を賞でさせ玉ひて、時の皇帝に執奏するの勞を取るべき旨を約し、同時に、現在の必要に應ずるが爲に、三百『ルーブル』の金員を、下賜せられ玉ひき。

後幾くもあくして、皇太后は、更に彼に對して、終身年金を下賜せられ、且皇帝及び皇后にも、都合よく、執り成されたる結果、時の內務大臣は、詔を啣みて、『ロポーロフ』の再審に、着手することゝはなりぬ。

果然、『ロポーロフ』赦免の恩詔は發布せられ、特使は赦免狀と、『ロポーロフ』の露國內地に歸來するが爲め、皇帝の思召を以て、特に下賜せられたる、路銀とを齎らして、西比利亞の配處に派遣せられぬ、內務大臣が此吉報を『プラスコヴイー』に通告するに方り、彼れ自身の所望あらば、何にてもあれ、申述ぶべきよう、いと優渥なる、皇帝の恩命をも併せ傳へき、此恩命に對して、彼は自身

の榮利を度外視し、前きに西比利亞の配處を出發して、冒險の長途に上りたる折、眞情を傾けて、彼の行を送りたる、二人の流刑者に對して、特赦の恩詔あらんことを哀願せり。此哀願も、亦た直に聞屆けられき。

さても西比利亞の配處に在る、『ロボーロフ』夫妻は、最愛の一女『プラスコヴイー』が、其膝下を離れて、遠く冒險の途に上りたる以來、到底亡きものと諦らめ、折に觸れては、唯涙にくるゝのみありしが、『プラスコヴイー』の出發後殆んど、二十ケ月を經過したる或日のこと、計らざりき、赦免狀を齎らし來りたる皇帝の特使は、彼の詫住居に訪ひにき。されど『ロボーロフ』夫妻は、自個の運命に付きては、深く絕望の淵に陷り、西比利亞の僻土に、其殘骸を埋むるの外なしと、覺悟を定め居りたることなれば、唯夢かとばかり、疑ひ惑ふのみにて、甚麼にしても、其事實なることを、信用する能はざりき。

やがて『ロボーロフ』夫妻は、多年淪落したる、开が配處を後にし。『ニジニ』に於て、最愛の一女『プラスコヴイー』に會見し、淚片手に、是迄の辛勞を謝したる時には、あはれ、此偉大なる孝女は天祐の擁護により、首尾よく、父母の窮厄を救ふことを得たる、天恩の厚きに、酬ゆるが爲め身を尼寺に投じて、緇衣を纏ふの人とはなりき。『ロボーロフ』夫妻の、尼寺に滯在すること、八日間にして、つきぬ名殘を惜み。『ヴラジミル』に向つて父子袂を別ちたるは、いとも、あはれなることにてありける。

孝女『プラスコヴイー』は、千八百九年十二月八日、倘、うら若き身を以て、『ニジニ』の尼寺に歿りぬ。

（完）

# 慈門尼

文學士　小林雨塔

往にし寶暦明和の頃、近江彦根城の東里根の里に草の庵を結びて住める尼ありき、其の名は慈門とぞ呼びける、五塵濁世のけはしきを厭ひて、上求菩薩の志深く、住居を繞ぐれる竹の林に澄める眞如の月影をあかで眺めし淸き高き心はさることながら、余は今の皇上の御惠深かく文明の光洽き御世に生れし人達に向て、尼が厭世の悲觀に同せよと、努さら〳〵推奬するにはあらじ、さはれ尼が十八の花の盛を捨てゝ身を桑門に投せし高大ある心情と、其後世を終ふるまでの日夕の言行と殊には稀有の天才と認むべき詠歌の世に勝れたるは、われ人共に遠く及ばじと思ふゝしなりかし。」

慈門尼は彦根城主井伊氏の臣武居正景の女なり家は中籔の里にありき、母は八木濵の中村某の女なりしが慈門猶稚きころとく世を去りぬ、これ慈門のをさなき胸の中に世を厭ふ悲の種を蒔きしなるべし、まして父は後添の妻を迎へて一男一女を生ましめぬ、後の母を慈門いかに見けんかは世に傳はらねども、尼十二三の比より、ものゝ書など見る毎に亡母の懐しき面影思ひ出でられて、我にもあらず悲涙に咽びしとかや、亡母を慕ふにてやがて現在の母との中らひのやゝうとましかりしにあらずやと思ふも、强ちすぢなき想像にはあらじかし、父正景は慈門の書讀みては涙にくるゝを見て、こはふみのよろしからぬなめりと思ふからに、古より書を見て世を厭ふ心を起せし人多し、よからぬ事なりとて尼を誡めし事もありしとなむ、さはれ尼はいかに幸なき過世なりけん、この慈深き父は尼の十五の年江戸にて隔世の人とな

り了りぬ、慈門早く母を失ひて今又父に別かる、若き乙女の心にいかばかり浮世を果敢なみけんか思い遣るべし、この悲のあまり世を遁れんの心を起しぬ、此の後八木濱なる母方の祖母の許に住めり、後に人の傳ふるには、尼をさる人にとつがしめむとせし人ありしが故に、家を遁れ出しなりとぞ、父を失いし新愁未だ去らず、などて嫁娶の慶事を擧るに忍びん、八木濱は近江の湖の浦邊なれば、をりふしのあはれも深く、四方の景色面白かりしかど、尼が悲滿てる胸には、漁村のすぎわひの業をみるにつけて、いとゞいけはしき世の厭はしさを思ひ知りしとあむ、四年ばかりありて又彦根の家に歸り住みぬ、幾年の後なりけむ、尼老後に再び八木濱に行きて、若かりし比己を慈しみ呉れにし人の孫なる人にあひて詠める歌あり、

立かへり又こそはみめむらさきの
ゆかりなつかし藤あみのはな



慈門彦根に歸りし後も偏らに頭をろさむとの望切なりければ、初めはあらかひ止にし人々も、果ては尼の心に打ち任すやうになりぬ、父は宗安寺の壇越なりしかども、里根なる廣慈庵に一枝禪師となむ呼べる黄檗の聖の住みしを法の師と憑みしが、禪師は乙女が志の切なるにめでゝとくゆるしき、されど花の顔をうち飾る漆より、黒き髪は師もさすがにあはれとや見給ひけん、しばしの間は頭おろさずともあらなんと止められしかど、慈門は樣々に請ひ求めて遂に十八歲の妙齡にして、容を變へたりき、されど此の年若くて山林に隱れ入らんはおそかるまじとて許されず、仙波某の許に住まひぬ、慈門早くより歌詠むわざを好みしかども、師の禪師の法の道の障碍ともなるともやとて禁められしが、さる人の御佛に仕ふる身にし

て歌の道に入りしは其例多き事なり、何の妨かあらんと云ひしにより、固より好める業なれば、喜びて諷詠したりき、されど別に歌道の師と頼む人もなく、只三代集其他世々の歌集を披き見て、自から會得し、何時しかと詠みならひしなりとかやげに慈門は歌道に於ては優に天才の人なりき、想に清新幽玄の趣あり、調に平淡暢和の味あり、千田澳魚は尼の歌につきて「古への業平小町貫之躬恒忠岑これらの人をばおきて、それより後世々に其名聞えし人々のしらべになぞらふとも、をさをさおとるべからず」と云へるは適評なるべし、歌につきては尚後に云ふべし。

慈門は世に稀れなる美女なりしとかや、开が未見の畏友に名にし負ふ澤村琴所あり、名は維明と云ふ、此の人又類少なき瀟洒の好丈夫なりき、慈門は琴所を歌の師と仰ぎ、其筆加へたる、歌も五十首許ありといへども、又尼の歌集に現はるゝ所によりて伺ふも兩人が交誼は一方ならざりしが如く見ゆれども、世の傳ふる所にては、互にさがなき人のしりうごとさかん事の厭はしさに、寧ろ慈門は琴所の清き名を累はさじと思ふて、終生相見へず、未知未見の友として淸き交を續け行きしとぞ、所謂瓜田に履を入れざるものぞかし、しかも慈門琴所の沒後其弔祭に當りて、其家に詠みて、遣はしける歌に

としをへて思ひぞ出る松寺の
まつの緑のふかきめぐみを

とあり、之を見れば慈門は心に琴所を師とも友とも仰ぎ思ひしごとし。

かくて慈門は佛門に入りてより八年を過ぐして後多賀のむかひ山に柴の庵の住みすてしものありしを、人に讓られてこゝに移り住みぬ、慈門今はい

よゝ山林避遯の身となりしからに、其佛に對する信仰のいかに篤く誠なりしかは

　入とせきく法のむしろの言の葉は
　　夢のうちなる夢をこそとけ

と法華經を詠めるにて知るべし。（未完）

## 明德馬皇后

文學士　濱田廉

明德馬皇后は、後漢の元勳伏波將軍馬援の少女なり、惜むらくは其諱を逸せり、髫年の比、既に父馬援を喪ひ、兄客卿亦早く夭せしかば、母いたく悲傷して遂に疾を發し、久しく病牀に呻吟せり、后時に年甫めて十歲、母に代りて親ら家事を幹理し、奴婢僮僕を管督し、内外の諸稟一も遺失あることなく、事全く成人に異らず、年十三歲にして、世祖光武皇帝の太子劉陽の後宮に仕へて、專ら皇后陰氏に奉承し、傍ら同列の宮女に應接す、禮容能く備はりて、擧止法に稱ひければ、上下の嘆美することなゝめならず、太子甚だこれを喜び、寵幸殊に渥かりき。この後太子位に即く、即ち顯宗孝明皇帝これなり顯宗后を以て貴人となし、永平三年遂に冊立して皇后となす、后既に六五の大位に登ると雖も、愈々謙肅溫良を守り、坤德の譽日に隆にして、後宮數百の官女爲めに薫化せらる、寔に國母の器と謂つべし、后身長七尺二寸（日本の現今の尺度とは差ありと知れ）、方口美髮、能く易を諳誦し、好んで春秋楚辭（楚屈原作）を講讀し、時に周官（周代制度の書）董仲舒の書（前漢の大學者）に耽ることもありき、居常儉素を旨として、大練の衣を纏ひ、その裙には緣を加へず、顯貴に在りて、奢侈に淫せず、心性の修養深く且つ厚きもの

にあらずば、爲し難き所なり、都下幾萬の娘子、以て鑒となすべきにあらずや。

若し夫れ顯宗廟堂に臨んで、諸將の奏上建白、公卿の疏議提案、複雜にして理平し難きものある毎に、數々以て后に試みけるが、后輙ち分解趣理して、各其情を得、未だ嘗て澁晦するものあらざりき、毎に侍執の際に於て、言政治の事に及べば、悉く中心を披攄して、毘補する所頗る多し、謂ふを休めよ、牝雞晨を告ぐと、國君の一國を治むるは、猶ほ家長の一家を齊ふが如し、國母の國君を扶助するは、恰も主婦の家長を内助するに似たり、后の淑德恭謙にして、國君を淩いで國事に關與するが如きは、萬々これ有るまじきを信す、后は斯くの如く國家の樞機にまで與かりしと雖ども、徒に親戚類族を援いて、不公なる私恩を與るが如きは、未だ嘗てこれあらざりき、誠に淸廉潔白の人にあらずや、是故に顯宗の寵愛日々に隆にして衰ふることなし、臣僚の尊敬益々厚かりき、昊天情なく、顯宗崩去ありて、后の紅涙靑衫を濕しぬ、やがて太子炟大位を嗣ぐ、是れ肅宗孝章皇帝なり、肅宗は賈貴人の生る所にして、后の腹にあらずと雖も、后の之れを視ると所生の如く肅宗も亦心を盡して孝養の誠を致し、后を尊んで、皇太后と曰ふ。

太后貌姑射の山に在りて、ますます節儉を力めしかば、内外その薰化に從うて、被服一に定まりぬ臣僚の諸家仰ぎみて恐惶すること永平の時よりも甚しく、華美の風習は地を掃ふに至れり、太后また織室を設け、機杼を具へて、以て布帛を織るとを奬め、屢往いてこれを、觀視し、織女を慰戒するを以て娛樂となす、閑暇ある毎に、必ず肅宗を訪うて日夜の勞を慰め、政治の事に及べば、諄

く々として信ずる所を陳べ、暑の已に傾くを忘る、又諸王を敎授し、經書を論議し終日務を廢せずして、しかも體ゆたかに、春光常に室家に充てり。健初四年病に寢ぬ、太后心の鏡あきらかにして、義理を辨ずるが故に、決して迷信に惑はず、巫祝小醫の徒、咸く却けて近かしめず、屢勅を下して祈禱祭祀の類を止む、上古の人迷信せざるもの尠し、太后の如きは千百人に一人を求むべくして實に雞群の孤鶴と云はざるを得ず、明治の昭代、學問の道大に啓けて、村落の童子も已に天理敎や稻荷樣に靈驗なきを知れり、市井の匹夫匹婦はおいて問はず、蝦茶袴の影、往々にして藥師や大師の前にほの見ゆるとあるは、怪しむべき極みと云ふべし、二千年前の故人、地下に嗤笑せんかな。かくて太后、病蓐に臥してより、粛宗の療養等閑ならざりしかど、上帝速りにこの女丈夫を招きてやまず、卒にその年六月を以て昇遐せり、壽僅に四十有餘、實に我、紀元七百三十九年にして、恰も仁德天皇の御宇に當れり。




## 國文學講義（前のつゞき）

井上頼文

譯解

御帳の東面なる二間ばかりの所に、容貌美麗なるより拔きの女房たちが、今日を、はれと、着かざりて、三十餘人、ズラリト居ならびたりし人々のやうすこそ、實に見物にてありけるよ。御五夜を祝ふ威儀の御膳は、釆女ども仕へ奉る

まづ、その次第は、入口の戸口の方に御湯殿の陽の御屏風に、また、御屏風を立てそへ、また別の御屏風を、南向に立てゝ、白き擬ひをしたる御厨子一雙に、威儀の御膳をとゝのへて据へたり。

夜のダン／＼更るに從ひて、月かげ、ます／＼冴えわたりて、暗き方も無きに、采女、水司御くしわげ、殿司、掃司の女官など、つねは顔も見知らぬ者までつどひ居たるが、月の光にハッキリ見えわたれり。

## 通俗土佐日記（第二）

廣島商業學校教諭　兒玉彌三郎

土佐日記の註釋本は種々ありますが、就中一番善いと思はるゝのは、富士谷御杖氏の土佐日記燈です、元來此の「燈」は、他の諸書を對照參考して、其の粹を拔き、且つ精細な斷案を下したものですから、今は專ら同書に依つて其の要旨を撮取し、併せて卑見をも加へました、ところで、明治以前の日本に、御殿用向きの行燈を見た樣な土佐日記燈の必要があつたとすれば、明治現代以後の日本、豈に土佐日記の電燈少なくとも洋燈なかるべけんやです、さりとて今頃坊間にころがつて居る澤山のカンテラ的豆洋燈的の註釋本は、餘り其の光りが薄過ぎるので、罷り違へば眼病を惹き起しはすまいかとも案じらるるのです、是が著者の本書を世に紹介せうと思つた動機でした、ところが、電燈などゝは、著者の痩腕の思ひも寄らぬことですから、本書は土佐日記の洋燈を以て自ら居る積りです、洋燈而かも平民向きの洋燈の必要の方が今日の急務

學書

だと信じましたから、通俗といふ名を冠らせ、内容も其れに相應する樣にした譯なんです、若し、貴族向きの洋燈乃至電燈は、世自ら其の製作者があるでせう、併し、若し、讀者諸君の中に、本書をして精好な洋燈たらしめんとの好意ある方々は、どうぞ、御心附きの個處々々を、假借容赦なく指示して頂きたいものです、著者は、好意ある諸君の示教を歡迎して、漸次本書の缺點を補つて、明治昭代文學界の一部を照らす洋燈の責任を全くせうと思つて居ます、ですから、巨細となく高見を發表して下すつて、充分の批評を賜はらんことを切望して置きます、

## 大意

此の日記、卷首に女の所爲なることを述べ、且つ卷末に「兎まれ角まれ疾く破りてん」と記るせる



に注意すべし、抑も日記は實事を記るし置きて、後日の思ひ出にするが通常なり、然るを斯く記るせるは、一應は謙辭とも見らるれど、若し是れをして記者の本心ならしめば、初めより記るさゞるの勝れるに若かじ、思ふに土佐國は、必ずしも配流の國と定まれるにはあらざれども、古來此の國に配流せられたる例多き國なり、然るに紀貫之、夙に和漢の學に長じ、殊に和歌に巧みにして、比日官途に精勵し、功勞頗る多かりしを以て、大國若しくは上國の守にも任ぜらるべきに、案に違ひて、正六位下相當なる中國土佐守に任ぜられたるを、深く歎息せるに因りしなるべしと察せらる、記中處々に其の意言外に溢れ、且つ女の所爲とし年紀をも土佐といふことをも明記せず、殊に、亡兒の歎きを屢繰り返し、海路海賊の恐れなどを態と事々しく書き立てなどして、如何にも女の愚痴

に陷りたるが如く書き爲したる筆路、必ず故あくんばある可らざるとなり、然も、其の意聊かたりとも表面に顯はるゝ時は、廟堂に對して憚りあるを以て、幾度か自ら抑制して、其不平を漏らさゞらんと力めたるも、終に忍び兼ねて記述したるものなるべし。

紀氏が古今集を撰びたる延喜五年より、此の日記を作りたる承平五年迄は、其間三十年を經たり、又大井河行幸の時の和歌も序も、昌泰元年なれば承平五年を去ること三十七年前なり、凡常の人にても、三十餘年間の修養を積まば、其の効大に見るべきものあるを、況して紀氏の才に於てをや。故に、古今集及び大井河行幸の和歌も序も、未だ以て紀氏の眞面目を窺ふに足らず、此の日記こそ紀氏の紀氏たる所以を知るべき唯一の好材料たるべけれ、是れ予が淺學を顧みずして、諸媛に紹介せる所以なり、

男もすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。

○此の一段此の日記全篇に冠らせたる詞にて、此の日記を書かんと企だてたる起因あり、日記といふもの男のするものなるに、女は爲し得ずといふことあらじと思へば試みにするなりと、女の負けじ魂より書きたるものに裝へるなり、然かも唯故なしに女の仕業としては、いかにも假裝ひせる如く見ゆべければ、斯く負けじ魂より起れる如く書きたるあり。

某の年師走の二十一日の日の戌の時に首途す、其の由、聊か、物に書き付く、

○此の段に某の年といひ又次ぎの段に或る人縣の云々と書きたるは、皆、年紀、人物、任國共に表はさゞらんとせるなり。

學藝

○戌の時　古の時刻を今の時に換算せんには、十二支の子は夜の十二時、午は晝の十二時なるが故に、是れより起算して順次二時間毎に次ぎの時刻の名なりと知るべし。故に戌は今の午後八時なり、斯く夜に入りて出發せしは別れを惜む人々の爲めに自然遲くなりたるものとはいへ、入京の時も態と夜に入りて歸着せると同じく、白晝公然と出で立つ事を耻ぢたるなり。任中廉潔にて、他の受領等の如く富を貪らずして貧しければ、政事見苦るしきを耻づる體に裝ひて、其の實土佐に任せられたることの不平なるより、然かせることをほのめかせるなり。

○物に書き付く　とは固より紙に書くなり、然るを、事々しく紙を用意したるにはあらぬ樣に思はせんとて、殊更に物とばかり書きて、いかにも女の謙遜らしく見せたるなり。

或る人、縣の四五歲果てゝ、例の事共皆仕終へて、解由など取りて、住む館より出でゝ、舟に乘るべき處へ渡る、彼れ、此れ、知る、知らぬ、送りぬ、年頃善く見えつる人々なむ別れ難く思ひて、頻りに兎角しつゝ罵る中に、夜更けぬ。

○或る人　とは其の誰たるを知られざらんが爲めなり。

○縣　とは廣く諸國をいふ名なり、班田の意なるべしといふ說あれど服し難し。

○四五歲云々　とは任の年限果てたるをいふ、國司の年限は時代に依り又任國に依りて、四年五年又は六年等の差あり、思ふに紀氏の土佐に任せられし延長八年の頃は、普通に四年の定めなりしなるべし、然るを、今は殊更に四五歲と漠然たることに書けるなり、然れども紀氏の家

集に「延長八年下向、承平五年上京」と書せるを見れば、此の出發の年は承平四年にて前後五箇年なるが、如何にして斯く一箇年多く任國に居たるかといふに、或は前任者の任終とて、事情に因りては四箇年の外に一箇年間、新任者と共に國に在ることとありしを以て、紀氏は前任者の任終一年と自己の當任四年とを合せて五年に爲りしか、又は宇治拾遺物語に見ゆる如く、任終の年、七八歳の愛兒を失ひて悲哀の餘り延滯せるにや明かならず。

○例の事共云々　とは國司交替の際言ひ繼ぎ引き渡す事其の他總ての作法を束ねていへるなるべし、是は次ぎの解由など取りてといふ詞の本をいふなり。

○解由など云々　解由とは國司交替の際、物件雜務等の引繼ぎを結了したる時、新任者より前任者に與ふる狀にして、此の解由の與否に依りて受領の功過を定むるなり。勘解由使といふも、其の解由を與へざる時、事實を勘ふる爲めに派遣せらるゝものなり、當時多くの國司等、在任中不正の事を爲し勝ちにして、交替の際解由を取ること能はざるもの多く、爲めに屢解由に關する規定を發布せられたる程には、紀氏が容易に之れを取りたるは、任中不正の所行なく引繼ぎの際毫も滯りなかりしを知るべきなり。

○住む館より出でゝ　とは任中居りし館を出でたるなり、年來快からず思へる任果て事終へて、立ち出づる心の中いかに嬉しかりけん。

○舟に乘るべき處　後段に廿七日大津より浦戸を指して漕ぎ出づとあるに依れば、其の大津のことなるべし。和名抄に「土佐國長岡郡大角於保都」とあり其處なるべし。

○彼れ此れ知る知らぬことは人多くして其の多き人々の中には、知れる人々は更なり、知らざる人々さへ送りしをいふなり、知る、知らぬの下各人々の字を省けるあり。
○年頃　とは任中四五年の間をいふなり。
○善く見えつる云々　年來寵遇したる人々なり。
○兎角しつゝ　とは乘船の用意などし且つ贈り物其の他種々雜多の事柄を一と束ねにしたるなり。
○罵る　を後世は罵詈にのみ用ゐれど、斯かる場合には兎角物言ひ立つる心なり。
○此の段、任中公私に心を用ゐ廉潔仁愛の結果、公には解由も滯りなく取り、私には人々別れを惜みて送り來り、父母に別るゝが如くせし樣を思はせたるなり。



# 地質學の話（承前）

在大學　早苗生

前號に御話し致しました事柄で、地球の內部は至極暑いと云ふ事は既に定まつた事實、又た爭そはれぬ事である、だが爰に一歩を進めて其の內部は如何なる狀態である乎、液體乎、否た固體乎と云ふ議論は區々で一定せないのだが、今之れを御話すれば概して次の三說である。
第一說——地球は厚い地皮で掩はれ、其の內部は熱い液體であつて、火山又たは地震は此の液體と氣脈を通じて地上に表はれる。との說即ち舊地質學者の間に唱導せられた說なのである、
第二說——は全くこれと反對してをる、今萬一舊地質學者の堅く信賴してをつた樣に地球は僅二三里の厚い地皮で掩はれてをる液體の玉であると

すれば、極く少さな川は日月の引力に抵抗する事が出來ないで、丁度海の水が日月の引力に感じて水面山の如く高く、又た低く、………一高一低……すると同樣に、又た地皮も時に膨大となり、時に縮小して、其の形を變ぜざるを得ずである、だが地表の斯樣な變化のない以上は地球は實際水晶玉か又たは鐵の玉と同じ樣な固體では無い歟、とは第二說の要點で。

第三說――は前の二說を折衷し、翫味してつくつた一の考說である。

之の說によると地球は其の全體から論ずれば固體であるけれども地皮の下層にはもとある液體があつて此の液體の存在で火山地震等の現象を表はすものであるとしてをる、而して地球の固體である理由を一言すれば。

地心は其の上方にある厚い地層の爲めに強く壓しつけられて、此の強ひ壓力のあるが爲めに固體となつて液體の狀態でをることが出來ない、又た地球は元と瓦斯體である霞雲星から次第に冷却して、そして熱を空中に放つて其の被面が凝結して堅い地皮をしてをるのだから、此の地皮と地心との間には一種の圏帶がなくてはならない、これは上方に在る地皮が薄いから壓力が少なく、其れ故眞の固體となる事が出來ないで稍々液體の狀をしてをる、地中の鎔池とは取りも直さずこれを云ふのである、以上は第三說の要點であつて當時學者輩の多く耳を傾ける說はこれ。

地球內部の狀態に就ては以上の三說があるけれど、兎に角地球の熱は火熱の源であると云ふ事は決して〲疑ふべきことでない、此の火熱の作用は三つの狀態と成つて地表に現はれる、即ち火山、地震、及び地殼の變動はそれ〲のものなり。

## 學藝

である。

### 火山

或は烟、又たは灰の種々を噴き出す火山！、火山は一の趣味を醸して我々の詩嚢を肥す材料で、春の月の朧に若葉を射……、青光を宿してをる木越にこの火山を見、秋の頃、紅葉霜に飽く廣き野を隔て丶此の火山に接すると幽邈、豪宕、深慮、寧靜の念を惹き起こし、迸つては詩となり、歌となり、凝つては邦家の柱石たる志慮を鍛ひ養ふことが出來る、

子に傳ふ笛の秘曲や梅の月　子規

老ひ朽ちて梅や主人の貧に伍す　青々

其の香しき香、ゆかしき花形、殊にしほらしき白梅の花を見ては貞節の重んずべきを知り

馬車の上に垂る丶ホテルの櫻哉　子規

海樓の櫻散る日や汐曇　碧梧桐



華美なる花辨、艶麗なる蕋！其の美つくしき櫻花を見ては奢侈の久しく樂むべからざるを悟りて蓄財の思をねり。

盆栽の海棠散るや琴の上　秋竹

海棠を見ては美感に心を和らげ

躑躅白き小庭も見えて加茂の家　碧梧桐

を見ては世の美想を知り、否た又た

人賤しく蘭の價を論じけり　子規

芭蕉破れて王維が庭の蘭の花　露石

淵明は只菊作る奴かな　把栗

一輪の菊の露ある机かな　秋竹

菊の香しき、蘭の貴きを見ては品性、殊とに女子としての高雅なる品性を養ひ。

其の火山の豪健なる形を見、若くは胸に此の思を醸いては、引き連れて勇豪健快の念を養成せぬといけぬ、取り分け日本の婦女は内氣の性質である

から、常に毎に勇ましき思を養ひ置く必要がある。

今茲に此の靈秀なる火山に就いて學術的研究を施す、又た快ならずやである?!。

火山とは山の頂上から黑烟又は火を吐く山だとの說明を下だす者があるけれども、少しく火山の實相を探究すれば、此の說明は不穩當であると云ふ事が明白となる。

火山は唯だに火と烟とを吐き出すもので無くて時時水蒸氣を發し又たは熱い岩汁、或は岩塊、灰などを吐き出し、又たは飛散せしむる、して又た火山は、必ずしも山のみに限るもので無く、時としては海中若くは平原にもあつて、今我々の目擊する處の火山は甞て地中から噴き出したものを地上に積み重ね、又たは積み重ねつゝある火山働力の結果であるから、火山は地中から地上に通ずる口なので、時々熱く、或は其れに因つて溶解して居る物體を地面へ吐き出す所の穴と云ふて不道理、不穩當でない、而して其の地中から地上に通して、時々熱い物體を吐き出す穴を火口と曰い、漏斗狀をして地面に表はれてをるのが常である。

火山の種類、火山の大さ、火山の數、火山の配置、火山爆烈の現狀、噴出物の量、噴出物の性質、火山生成の順序、火山の造搆、火山發動の源因などの說明は追々に致します。

（完）



婦女子よ、衰へ易き容色を補はんが爲め、精神を磨け。死に至るまで永く存するは精神のみ。

チヒタス

# 和畫通信講義

山崎彩峨

墨畫にては、淡墨にて、花莖等を沒骨に畫き、葉は、淡墨を含めし筆先に、濃墨を附して畫き、乾きて後ち、濃墨にて葉脈を入るゝなり。

彩色なれば、胡粉を含めし筆先に、淡紅色を附して、花瓣を畫き、黄がち青色にて、花臺莖等を附し、葉は、草に藍のみか、





または、少しばかり黄色を和したる綠色を含めし筆先に、藍を附して畫く。(寫生ならば、胭脂に、少しく藍を和したるものにて、花瓣に線を入るべし)。葉脈は、藍か藍墨にて入るゝなり。

# 家庭

## 慈母と愛兒（承前）

山形縣女子師範學校長　津田元德

### ●生兒の變態

支那の神農氏は、牛首人面にして、頭に角ありきと傳へ、我朝の猿田彥神は、鼻高くていとも怪しき顏ありしとか。此等は古代の事信ずべからざる如しといへども、亦普通に多く見るべき變態、左に列記するが如きものなきに非ず。

此等は上來陳述せし諸條項を確守し、注意に注意を重ねて尙避くべからざるものもあるが如し、蓋し、子宮及體格の構造、遺傳其他測るべからざる生理的原因より生ずるものあればなり。然れども其多くは、胎敎の効力によりて之を除くを得べし。

されば、平常此等避くべき原因は大に戒愼し、不幸にして避くべからざる變態に際會せし產婦は、決して、落膽失望爲に不慮の疾病等を生ぜざるこそ肝要なれ。不注意にして生ぜし變態は、愧づべきの至りなれど、生理上避くべからざる原因より生ぜしものは、恐るべきも將た愧づべきもなかるべし。

彼の生れながらに虫齒あるをば、鬼子と稱して驚き氣絕し、雙生兒あるは畸形兒の爲に、驚愕の余、命をおとす例など多きは、此理をわきまへざるのいたす所なれば、以下列擧せる普通變態につき、之を避くべきものと然らざるものとなど、豫め知り置く事肝要なるべし。

**假死**——生兒は、分娩するや否、高く産聲を揚げるを常とするに反し、呼吸休止して恰も死したるが如き狀をいふ。老練なる産婆は、適意の手當をなし、之を回復せしむる事容易なれど、否らざる時は、眞正の死に至らしむる事あり、故に産婆にのみ委せず、急速に産科醫を招き、且其間急救の法を講せざるべからず、蓋し此症の生ずる原因は、

(一)臍帶頸に纏ひ居たりし爲、又は早く臍帶を結びたる爲、母體の血液流通の道絶えたるより生ずるもの

(二)粘液口中に入り、咽喉を塞ぎ、爲に呼吸を塞ぎたるより生ずるもの

(三)生來虛弱より生ずるもの

(四)難産の爲、一定の手術を施し娩出せしめたるもの

(五)氣候温度の變化より生ずるもの

等に過ぎざるが如し、從つて此等の場合に於ては、左の諸法を繼續して試み、應急の手當を爲さゞるべからず。

(甲)急速に口中の粘液を去り、(吸ひ出すも可なり) 直に指を咽喉に入れ、嘔吐を催すべし、(或は鳥の羽を喉頭に入れ、鼻中に氣付を入るゝも可なり)

(乙)或は手を以て全身を普く摩擦し、胸部に暖めたる手巾を貼り、口鼻より強く空氣を吹き入るべし。

(丙)輕く胸を壓する事低く高く恰も呼吸運動に擬し、心下部に冷水又は酒「アルコール」を注ぐべし。

(丁)以上にて尚功を奏せざる時は、酒又は「アルコール」を加へたる微温湯に浴せしむべ

し、而して温き布片につゝみ、全身を摩擦するも可なり。

畸形●●——畸形とは、羊膜の癒着より生ずる手指顏面等の奇形、顱頂骨、其他骨格の缺損、四肢及諸機關の不完全及癒着、双生兒の抱合變態等、其千種萬狀一樣ならず、特に外部に現れたる畸形のみあらず、內部の諸臟器(肝、腎、膵、脾、等)より、內外の生殖器、皮膚、粘膜、骨格、血管、腦、神經等を蠶食せる病毒も亦此中に入るべし。

此等畸形の原因左の如し、吾人の注意謹愼の如何により其大部分は除き得べきが如し、須らく熟讀せざるべからず。

(一)內部の原因●●●●●

(甲)生殖細胞自己の中に起りしものにて、最も著るきは、遺傳とす、則ち四肢の不具、毛髮の過少、神經系病、三ッ口等の類、父祖より傳はりしもの。

(乙)病毒遺傳より生ずる體質、及び諸臟器の奇形にして、主として結核、癩病特に梅毒より生ず、就中梅毒の如きは、死生兒の三分の二を占め臍脉管の閉塞を起し、或は胎盤に梅毒症を起し、遂に、肺、膵、肝、脾の諸臟器より、生殖器、皮膚、粘膜、骨格、血管、神經等に障害を及ぼすものとす。最も恐れ謹まざるべからず。

(二)外部の原因●●●●

(丙)懷姙中子宮の振蕩壓迫等により、胎兒は位置を變じ、或は其位地を狹めらるゝより生じ、爲に或は傷害を生じて出血し、其流産するか、或は非常なる障害を生じて奇形となる、之れ胎敎の効力中母體の顚躓なる題目にて詳論せし所以なり。

(丁)卵膜、羊膜、子宮壁、及び胎盤等の病により胎兒の代謝機能を營むに必要なる酸素及び滋養分の不足を來し、爲に種々の變化を生じ、特に羊膜の病變より、四肢顔面等の癒着等頗ぶる變形を生ずるものとす。

(戊)母體傳染病毒を帶び、或は熱病等にかゝり、或は其他の原因にて凡て血液不純を來し胎兒の發育を妨げ、且種々の病變を生ぜしむるものにして、之れ亦胎教の効力中、血液の變化を戒めたる所以なり。(未完)

# 家庭俳句(二)

内田茂文

◎來る人を皆客にして新茶かな　梅の家

人を待遇すと云ふ事は交際の一ツとして家庭の一要件であります、來客に珍らしき物を勸めて自他ともに娯しむは如何に喜ばしい事で有りませう、新茶と云ふものは誰でも先がけて賞翫したがるものであるから獨りのみ擅にせず來訪した人には「新茶は如何です、召上りませんか」と他と樂みを倶にする博愛的の句です

◎植木屋は手の届きけり冬構へ　鳳齋

秋も何時しか長けて冬近くなり、襖、障子は張り繕はるゝなど經師屋の多忙き世の中となるに就て、植木屋も亦同じく忙しいのであるが、是は大低中流以上の家庭であつて、庭園へ敷葉を爲すとか、庭樹へ霜蔽をするとか、冬となるに魁けてチャンと用意を爲し貫く光景、如何にも行き届いた、家庭の整然たる所を窺はるゝのです

◎氣の合ふた側に並ふや夷講　我逹

毎年十月の二十日は夷講と言つて商家では此日は特に休業して商業の祝ひをする事は諸君が御存じであるから事々しく言ふ必要はありません、デ此夷講に就ては俳人其角が「俎板に小判並べて夷講」と云ふ名高い句が有る如く、此日は充分に資本を要て祝ひを爲し料理なども費用を惜まず贅澤にして、出入の者は勿論、親戚知己等を招待して饗應を爲す事で、客も主人も愉快に醉ふのである、全體、客として饗應さるゝ宴席では知り合た氣の合た人と並びて飲食するのが何よりの愉快です、殊に夷講の席では一段と之を感じるのである

◎親の氣に入る人呼で新酒かな　　志竹

前の新茶の句と一寸似寄た句ですが、是はまた親子が和熟せる家庭をも窺はるゝものであつて、子として親の喜びを自己の喜びとする孝子の情よりして親の氣の合た人を招きて新酒の饗應を爲し、團欒して倶に愉快の酒に醉ひ樂しむと云ふ句です

◎親舟の臺所覗く千鳥かな　　いよ女

船の住居と云ふものは陸上の生活よりは一種變つたものであるが、此句は別段船住居家庭を咏み顯はしたと云ふ程でもないが、刎ね上げた笘の明間から臺所の勝手向きが見ゆる光景であつて、船だけに夫を千鳥に覗かるゝと風流に言た所が俳句の味ひなのです

◎棚尻や霰吹き込む鼠穴　　一窓

この句、誦み來ると同時に如何に破れ荒みし貧家の光景をも察せらるゝでせう、押入、戸棚の隅などの破れ毀ちたるを修繕し得ずして、鼠の出這入するに委せた穴から、霰吹き込み、寒風肌膚を透す底の慘狀、目も當られぬのです、併

し此句は裏面に意味なく、餘情なく、恰も寫生的俳句と謂ふべきものです

◎藏建てる力や無くて菊畑　　失名

財産豊かならねば藏を建つるほどの資力の無き代りに、空地を利用して菊を作り、淸貧に處して風流を樂しむ境遇の心安さは、彼の貯え込んだ金の爲め危險を恐れて夜も碌々眠られぬ側の人間に比べて、遙に安心立命の地を得たものでせう

◎十夜から柚も坊主となりにけり　　錦龍

十夜念佛、十夜講など丶言つて、十月の十日の夜各寺院に執行さる丶のです、十夜詣と唱へて是に參會するものは大抵老人と極つて居る、デ、此十夜の時は寺院にて講中若くは壇家の參詣人を饗應する事があるが、其饗應の料理は無論精進物で、豆腐の味噌汁、大根に油揚のお平と云ふ寸法で、是に大抵は時候物の柚を添ゆるのである、句は即ち是を咏だもので、柚が剝かれて坊主になると滑稽的に、然して佛事に寓して罪障消滅的に面白く咏だものです

◎寄算や本町筋の小夜時雨　　古之

是は商業昌なる本町筋の商家の家庭の商業に從事する雇人の狀を咏だものです、時雨降る日は宵から店を閉めて、其日の帳面勘定に番頭手代、丁稚、小僧等打ち寄りて十露盤に餘念なき商店の夜景宛ながら見るが如くです

◎骨折りし末面白し菊の今日　　起石

菊作りの句では有名な「今日に成つて菊作ろうと思ひけり」と云ふ二水の吟があるが、此句は前吟には遠く及ばぬけれど、矢張菊作りを咏だものです、菊は作り育つる際は非常に苦心を要し、大きく謂へば經營慘憺、普通りの骨折でな

いけれど、作り上げて花咲く頃となれば其甲斐あつて觀菊の客を招待して、賞めらるゝ場合には日頃の苦心は取消さるゝ程に嬉しく、觀る客も亦「お大抵じや御座んすまい、克く御丹精が届いてお見事な事」など賞むるを聞ては、主人は又翌年も作る氣に成るのです

◎柴の戸や柚味噌の香り茶の香り　石桂

煩はしき浮世を避けて柴の戸の閑居に澄し込む隱者でも有りませう、茶三昧　柚味噌など煮て三度の食事も手づから試み、氣隨に好な事をして樂む風流な境遇は、其戸を漏るゝ茶の香りにても知らるゝのです

賢婦は夫をして威あらしめ、又能く夫をして賢ならしむ。　司馬温公

# 挿花の話（承前）

小畑いく子

## 秋草（つゞき）

萩は秋草の中にても最やさしき花でありまして、その僅の露にもなよ〳〵とたはむ姿の愛らしさ、總ての秋の花を代表して居ると申してもさしつかへぬ程であります、そこで桔梗、女郎花などの如く只、すなほに立ちたるのみではなく少しなびく心を持たせねばなりませぬ、そこで「高ながし」「中ながし」などにもなります、只此花につきましてむつかしきは水揚であります

萩の水揚はぬる湯を一面に注ぎ切口をうちくだきて鹽をすりこみて燒く、また酢にて煮熱湯に移し、冷えたる後冷水に移し置くもよろし

紫苑　其形は花と葉が別々に出るものですから

これには葉の遣ひ方があります、其葉遣ひも流派によりてはいろ〳〵と申しますが　二枚或は三枚づゝ組合はして其中より花の出るやうに致すのであります、例令へば花三本用ひますには「一」の葉三枚「二」「三」は二枚づゝといふやうに致しますが、もし際がありて見苦しければ葉を餘分に加へてもよろし、また花五本或は七本の時は各「一」に三枚其他は皆三枚づゝがよろし　然し多くなるに隨て葉も餘り多くなりて却て錯雜に見

紫苑三本



ながら數が苦しくなりますから、そういふ場合には葉の數を減じてもよろし、其邊の事は猶委しく申したいのでありますが到底限りある紙上には盡しかねますから、只機に應じて少しづゝの變化を要します、またこれが少し注意して置かねばなりませぬのは葉の矯め方であります、紫苑は最葉が必要でありますが總て葉を矯めるといふ事は中々むづかしきものであります、殊に此葉を表面より裏面或は裏面より表面に少しにても矯めんとする時は、

忽ち折れます、然し側面より推す時は少しづゝは矯めきゝます、またこれは「低ながし」には出來ます

　水揚につきての注意は花よりも葉であります、葉は水の最も下りやすきものでありますから、花と同じく根本一寸ばかりを熱湯に凡そ十分程浸し置きて後冷水に移します、湯に永く置き過ぎますと葉は却て疲れます

　日々草　これは前に述べました諸種のとは全く異りたる性質を以て居りまして、まことによく矯めきゝます、また充分矯めて挿す方がよろしいのでありますから、復雜な花をなす事が出來ます、然し余り小さき花でありますから、二種挿の根の方或は二重切、三重切などの花器には最適當して居ります、いづれ組挿の事は後に述べるつもりであります

以上述べましたのは秋草の中に於ても最、むづかしき、單純な直なものばかりでありました、いかにも單純なのは氣品が高くて宜しいが變化に乏しい、殊に初學のうちにはなるべく複雜なのでよくよく習熟する方が、大に進歩も早きやうです、しかし余りに復雜な方に傾きますと、惡くすると人工に過ぎて大に花の常態を失ふやうになりますから、常に相顧ていづれにも偏せぬやうの注意が肝要であります

花の形につきましては前よりも度々申した通り、三の數、五の數、七の數より成り立ちましたものでありますが、就中其「一」「二」「三」は最重要な枝ですから　これを復雜にするには「一」「二」「三」の各株に於てまた少さく一二三の形を備へるやうに致したい、例令ば「一」の尖端にても即ち「一の分れ」の處にて其形を作り「二」「三」も同く各分岐しては

一二三の形を備へしむるがよろしい、併しそうのみして行きますと「一」「二」「三」の株がそれ〲分離する恐れがありますから、この連絡として其一株〲の間を即ち「奥」「心」「副」或は「二の奥」「三の前」等にて程よく補足して始めて復雑にして完全な形が出來るのであります、其水際から各株の分岐する處まで即ち俗に根といふ分部には少しの隙もなきやう、只一把と見えるやうに

秋蓍十七本



致さねばなりませぬ、然し秋草の一般は凡そ述べ來りました通りのものでありますが、茲に最複雜なる練習に適する秋草があります、それは秋蓍と朮とであり升

秋蓍　はよく立ちのびて、茂る草でありますが花商などで餘り見せませぬから都の人は或は御存じないかも知れませぬが、此節野や河原または堤などにはよくある草です、秋蓍の種類でありまして、葉は細く小さく茂りまして

殆ど箒草の立ちた樣であります、花も萩に似て小さく色は少し赤みを持ちまして小豆色をして居ります、然し挿花ではまだ花の出ませぬ時の方がよろしい、野に於て見ますよりは床に上げて大に見優のする草であります、殊に爲もよくきゝまして「おがし」ものゝいづれにもなりますが、性質上まづ「低おがし」までのものでありませう、かやうな草でありますから初學の稽古用には最適當のものであります、またふるき書物などにも出てありますから、往時から挿け來りたものでありませう、然るに今日花商などに見ませぬのは或は水の下り易くて保ち難い憂がある爲ではあるまひかと思はれます、試に野外散歩のかへるさなどに採り來らるゝもおもしろからうと思ひます、水揚も別にむづかしい事はありませぬ、只熱湯にて凡根本一寸五六分を十餘分間も煮て後冷水に移し置くのであります

挿方は今述べました複雜な挿方の方法によらるゝがよろしい、この秋蓍でよく熟練致しますれば、菊に至て大に容易であります

## 四季家庭料理

大西よし子

（第貳）

### 材料

一 青箭魚（骨のなき處三寸ほど）
一 松茸（大貳本）
一 栗（三合）
一 淺草海苔（壹枚）
一 山葵（少許）
一 鯖（四五寸位のもの壹尾）
一 生蕎麥（もり壹）
一 甘藷（大壹本）
一 柚子（壹顆）

# 献立

一口取　青箭魚の照燒、栗きんとん、蕎麥海苔卷
一小皿　松茸の土瓶蒸、柚
一茶碗　鯖の骰子切、松茸、酢おとし

## 料理法

先づ青箭魚を一寸醬油にて洗ひたる後、鉄串に刺し、別に醬油と味淋と等分の「シタジ」を製し置き、強き遠火に炙りながら三四回「シタジ」を掛くれば照燒は出來揚る、さて生栗の皮と澁とを奇麗に剝き適宜の鍋(鐵鍋は禁物)に投じ、たツぷりに微温湯を入れたる後、一摘の燒明礬を混じ(栗の色を濃厚ならしむる爲めなり)凡そ十分程經て鍋をおろし、五分間もムラシ置きたる後、其湯を捨て更に前同様の微温湯を投じて之を煮、栗のよく煮へ且摘みても壞れざる度合に於て、鍋をおろし笊に揚げ置く、先是、別に甘薯の皮を去りたるものを壹分位の厚さに切り、水に十五分間も浸し置き(アクを去る爲めなり)て前記栗を煮おはりたる鍋に入れ、前同様に燒明礬を投じたる微温湯にて和かくなるまで煮、すぐに「裏ごし」に移して漉し置く、更に鍋に前記の栗と水(一合位)と砂糖(極上ものを大匙に五杯程)と鹽(ホンの一摘み)とを入れ蓋を爲さずに適當の火度にて十五分間も煮たる處へ、前記の「漉したる甘薯」を鍋の縁の方より徐々に入れ、焦げぬ様に鍋を廻はしながら煮れば、直に固まる、是れにて「きんとん」は出來上る、別に海苔を二つに切り炙り置き、生蕎麥を煮汁(醬油加減のあるもの)にて一寸洗ひ揃へて海苔の上に並べ、山葵(おろしたる後一寸醬油を混ぜたるもの)を加へ卷ずしの樣に卷き、三に切り置く、以上照燒、きんとん、蕎麥卷を適宜皿に

燒る是れにて口取は揃ふなり。

松茸を爪にて適宜に割きて、土瓶に入れたる上へ酒（小匙に一杯）醤油（小匙に半分）砂糖（ホンの少許）を投じ通常の火度にて五分間も掛け置けば煮へ立つを以てすぐおろし、別に柚子の絞汁を小皿に拵へ置き、土瓶中の松茸も汁も皆其中に投じ、其上へ花かつを、一寸かく、是れにて小皿は出來揚るなり。

鯖を三枚におろして骰子形に切り、鹽をあて十分間程經て一寸熱湯を潜らせ（色の變る程度迄）て一旦笊に揚げたる後、茶碗に入れ置く、別に松茸を一分位の厚さに切り一寸鹽水にて洗ひおく、更に煮汁（適宜鰹節を煮て後滓を捨て去りしもの）を煮立て鹽にて加減を爲し、前記の松茸を投じたる後、一碗分に對し三滴位の醤油と小匙に四分一位の酢とを混じ、之を投入するや否や、直に鍋を揚げ、前記鯖を入れある茶碗に盛り上ぐる也。

# 裁縫實修

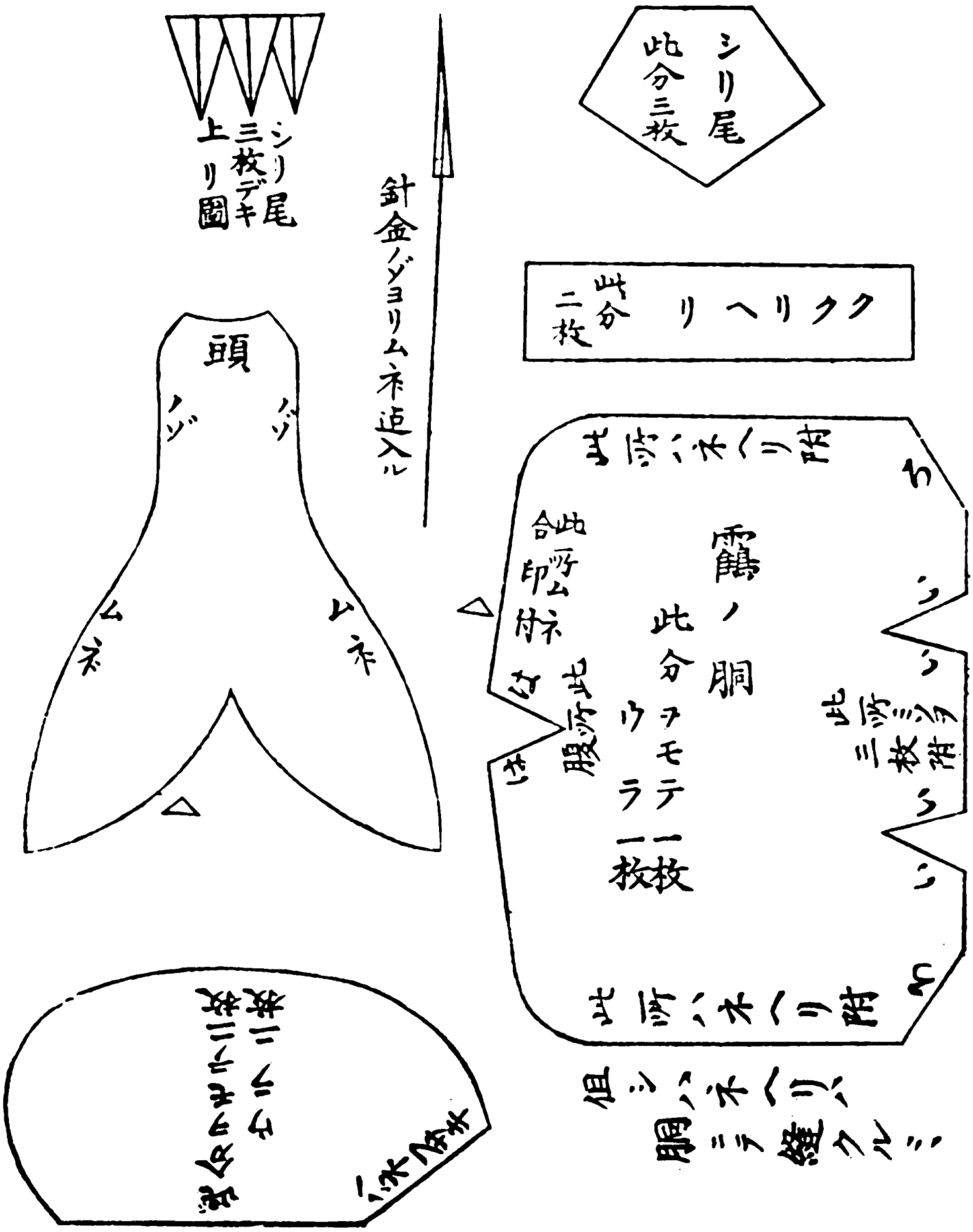
東京野口裁縫専門女學校長　野口兼吉

## 鶴の袋縫方順序

先切は白縮緬にて裁ち、しり尾三枚は、黒き切にて裁ち、次に針金を二寸八分にきり、一寸の所より紙をまき、圖の如く口さきを糊にてはり、墨にて塗り、玉子の白身をつけて光澤を出し、次に喉と胸を縫い、糸をつめて綿を入れ、針金をまげ、出來上りの圖の如くなし、次に羽の裏と表を合せて縫い、次にしり尾を縫い、出來上りの圖の如く三枚重ねておき、次にいの印といの印とを合せて縫い、次にしり尾をつけ、次にろの印と、ろの印とを合せて縫い、次にはらの處の、はの印とはの印とを合せて縫い、次に圖の如く羽とへりをつけ、胸の處の△と△の印を合せて縫い、次にへりの中へ太白の糸を入れてくゝります、鶴の目は墨にて書き、頭を赤く染て、喉を黒くなすなり。

# 鶴裁方之圖




シリ尾三枚デキ上リ圖
針金ノゾヨリムネ迄入ル
シリ尾 此分三枚
クヽリヘリ 此分二枚
頭
ノゾ
ノゾ
ムネ
ムネ
鶴ノ胴
此分ヲモテ一枚 ウラ一枚




# 婚姻論

法學士 天野弘一

私は此夏栃木縣の鹽原温泉に開かれましたる夏季講習會に於て民法中親族法の講演を致すことを囑託せられまして一週間程彼の地に於て淺薄なる卑見を述べて參りました。實は、私は親族法の講釋は初めての事であるし、殊には本會の會員は主に教育家諸君でありまして概ね皆法律の專門的智識を有して居られない方々でありますから私は非常に苦心を致しましてどうしたら斯る短日の内に親族法に關する大體の觀念が與へられるであらうか、如何にせば深遠なる法理がたやすく呑み込めるであらうかといふことを、研究致しました。即ち講義の體裁及び說明の仕方に就ては大に心膽を勞したのであります。凡そ專門の事柄は誰に聽かせても能くわかるやうに話をする位困難なことはありません。極めて親切に丁寧に、出來るだけ平易に通俗に、碎いて碎き拔いて說明をしなければ到底素人に解かるものではない。それを無理に解からせやうとすると果ではいゝ心持に居眠をさせる位が積の山である。僥倖にも本會に於ける私の講演は非常に會員諸君に滿足を與へまして實に私は此上もなく愉快に存じました。所で此度は其中で特に婚姻に關する部分だけを引き拔いて本誌に掲載することにいたしました。何をいふにも筆に物を言はせることでありますから活きた講釋とはちがひましてわれ

ながらかゆき所に手の届かぬ心地のする事も御座りませう。又いひたき事も故らにさしひかへる場合もありませう。一體私はしやべらせるのなら二時間でも三時間でも多々益々辯じますが扨て筆を執るといふ段になると誠におつくうでいつも思ふ半分位しか書けません。然し今度は大に勉強をいたしまして成る可く諸君に滿足を與へるやうに勉めるで御座りませう。

抑も私が今回本誌をかりて淺學をも顧みず特に婚姻論といふ題目に就て卑見を發表するに至りましたのは、一体世人が婚姻に關して甚だしき迷惑を有して居るからでありまして及ばずながら吾輩は法律家として徹頭徹尾此迷想を打ち破らんとするに出でたものであります。先きに本誌上「婚姻に關する不當の用語」と題して述べたるが如き即ち其一端である。

## 緒論

扨て婚姻論と申しましても左程汎く婚姻に關する御話を致すのでは御座りませぬ。唯だ法律の上から觀たる婚姻論で例ば吾々はいつになつたら法律上立派に妻と呼び夫と呼ぶ身の上になるのであらうか。扨ては夫婦の間柄といふものは法律上どうなけりやならぬものか等の御話を致すのであります。

扨て私は婚姻の御話を致すに先立ちまして少しばかり緒論として御話いたして置きたい事柄が御座ります。それは他でもない、家といふ事で御座ります。此家といふ事がよく御わかりになつて居らぬといふと、婚姻に關する御話も亦よく御わかりにならぬであらうと考へます。

就きましては先づ家といふ事に就て、少しく御話いたしませうが、それには最初に家といふ言葉の

意味を簡短に申上げねばなりませぬ。それから次に家といふものは昔からどういふ風に變つて來たかといふと即ち家の沿革に就て御話いたしまして最後に家を支配する者は何人であるか、又其人はどの位の力を以て家を支配するであらうか、といふことを説明いたしたいと考へます。（つゞく）

## 女子服飾の沿革（十六回）

上地信成

●服料● 此時代は前後にない華奢風流の行はれた時代でありますから、衣服の材料も實に立派なものを用ひたのであります、其種類を一々申せば隨分澤山ありますが、其中にも尤も貴ばれたものは綾であります、其初め綾は五位以上の人の用ゐたもので、六位以下の人は着用することが出來なかつたのですが、段々風紀が亂れて、かやうな規則も遂に有名無實なものとなりましたから、一條天皇の時代は六位以下の者も着用する樣になりましたこれに熟線綾、長連綾、二足綾、花文綾、平綾等の種類があります、何れも其文によりて名づけたものであります、次に行はれましたのは絹で其種類も澤山ありますが、これは大抵今に其名ものこつて居ますから、既に御承知でせう、布は此時代多く賤民の間に行はれて居ました、併し衣服外には一般に用ひて居たのであります、以上の三種は夏冬通じて上下の間に用ひられたものですが此他に晴れ着とか、平生着とか夏とか冬とかによりて、紗、穀、縑、絁、練、或は錦、段子、等いろ／＼ありますが、先づこれは略するとして次に服色の事を申しませう。

●服色 此時代も前期から以て、禁色の制が行はれ

て、濃き紫色、緋色、は許可を得なければ着用する事が出來なかつたですが、末になりましては又此制も廢れて、遂には服色を以て上下の區別を別つことが出來ぬ樣になりました。そこで諸家に紋章と云ふが出來ました、(此事は末に記すべし)先づ此時代の服色を大別しますれば、襲色、染色、織色、の三種となります、第一の襲色に就ては前號に、一覽表を掲げておきましたから、大略は御承知でせうが、これは表の色と裏の色と配合して出來た處の名目で、例へば濃き蘇芳色の衣に、白色の衣を重ると櫻色となり、又紫の上に紅の衣を重ぬれば紅梅色となる、かく衣と衣とを重ねて出來た色を襲色と云ひます、第二の染色は白地の布帛を種々の色に染たのを云ひ、第三の織色と申すは緯と經と色の違つた糸を以て織り出した色を云ふのであります、例へば藤色と云へば、染色では藤の花の色を云ひ、織色では經が青、緯が黄の糸を以て織り出した色を云ひ、襲色では表薄紫に、裏青色の衣を重ねて生じた處の色を云ふのであります、毎度申す如く、此時代は非常に華美を競ふた時代でありますから殊に襲ね色には注意して、種々の變つた色も出來、又四時折々に依て其色をも定め、春は紅梅、白梅、柳、櫻、の色、夏は卯花、つゝじ、秋は萩、女郎花、黄菊、白菊、紅葉冬は枯色、松などの色が專ら流行して居ました、

●染料　は大抵今と同じ樣ですが、尤も廣く用ひましたのは櫨、蘇芳、紫草、藍、苅安、紅花、などで、夫れに灰とか酢とかを加へて染めたものであります、今參考の爲に撰塵裝束抄と云ふ本から一つ二つを記るしておきませう

黄櫨(天子衣、櫨十四斤、蘇芳十一斤、)　深紫(一位衣、紫草三十斤、)

深緋(四位衣、茜大十斤、紫三十斤)　深蘇芳(蘇芳大一斤、酢八合、灰三斗)

韓紅（紅花大十斤、酢一斗）　退紅（紅花小八兩、酢一合、帛一疋）
深緑（藍十圍、苅安、大三斤、灰二斗）　深縹（八位衣、藍十圍）
淺黄（苅安大三斤、八兩灰一斗二升）

先づかやうな工合に調合して、染めたのであります。尚此他に文字摺と云つて、色々の花を平石の上にならべ、其上に布なり絹なりを置きて、上より壓して、いろ〳〵な模様に造つたのも流行した百人一首に忍ぶもじずり誰ゆえにとあるもじずりは即ちこれを云つたものであります。

●●頭髮　此時代は前期の樣に結髮の制度は出ませんでしたから、一般に垂髮が流行して居ました、併かも此時代は一寸でも長く、地に曳く樣な髮の人は、美人であるなど〵、評判したものですから、髮の短かいのを第一の耻として、何れもカモジを入れて胡魔化して居たのであります。社會が既に此の如き風を歡迎する樣になりましたで、殊に外見をつくらふ事のみ考へて居た處の、女房達は、誰も〳〵競ひて之を伸ばす事にのみつとめて、居たらしいのである、故に女官達の中には隨分長いのも有つたことは、宇津保物語藏開の卷御產の條に「女御君かんのおとゞ、かいつけつゝけづり給ふ、いと多く美くしげにて八尺ばかりあり云々」又住吉物語、嵯峨野遊の條に「髮はうちきの裾にひとしかりけり」と見へ、榮花物語、初花卷にも「こまやかにめでたくて御たけに二尺ばかりあまらせ給へり」とある、此他源氏物語、枕草子、宇治拾遺物語などには、かやうな例、いくつも見えて居る此他の物語文にも、必ず美人をかきました處には髮の毛の長いことが第一番にほめてある、これは中古の物語をお讀みになつた方は御承知でせう、實に今から思へば全く嘘の樣であります。




扨て垂髪と申すは、髪を下に垂らして居るのであるが、これに二つの種類がある、一は大垂髪と云つて、禮服着用の時に結ひ、一は普通の垂髪である、上の圖に就て御覽になれば、わかりますから別に説明はいたしません、大垂髪と云ふのは身分のある人に限りますが、垂髪と云ふのは上下共にいたして居りました。

## 繪畫（下）

文學士　宮崎鳥府

後柏原天皇以後に至りては、王室は更なり將軍の勢威もとみに衰へ、權臣跋扈各々干戈を交へ、發しては應仁の大亂となり、群雄割據となり、都大路は日々戰場の衢と變じ、朝には吶喊の聲、夕には劔戟の音絶ゆるひまなく、力あれば榮え、力あ

きは衰ふ武人政治もかくして全く腕力を主とする時代とはなりぬ。爰に於てか王室の式微は全く其極に達し、從て朝廷と休戚を同じくしたりし公卿縉紳亦悲愴慘憺たる境遇に陷り、嘗て望月の欠けたる事もなしと詠じたりし藤氏の全盛は遙かなる過去の物語となり、龍頭鷁首の船にて、花に舞ひ月に謠ひ、迦陵頻迦の囀りに天女が袖ひるがへすが如く、活動せる雛人形なりと謳はれて百敷の大宮人も、今や古びたる内裏雛の如くなり、赫灼たる當年の威儀、燦爛たる容飾は悲しき憂鬱なる境遇と變じ、遂には諸國に流寓して武家の食客たるに至れり、

從來の俗、文學美術の盛衰は公卿縉紳と運命を共にしたり、然るに其源泉たる公卿縉紳にして然りいかでか文學美術の進歩發達するの理あらんや、されば一時東山時代に於て異彩を放たんとせし繪畫も、此大打擊にあひて、他の文藝と共に漸く退歩し、復振ふ能はざりしが、天正年間織田信長出づるに及びて、刈藻の如く亂れに亂れし天下、漸く平安に歸し、秀吉に至りて全く平定せられたりき。

これより先き狩野松榮が子永德、信長に仕へて近侍となり、法眼に叙せられ、次て秀吉聚樂殿を修するに及び、永德をして金壁を畫かしめ、次て桃山御殿なるに及び、永德又命を奉じて百双屛風を畫きたり、其子光信、孝信、及び門人山樂、亦繪畫を以て秀吉に仕へ、協力、斯道の獎勵を計りたりしかば、數年ならずして、狩野一派は漸く復興せられたりき。

殊に山樂は其技、巧妙にして、元和の頃天王寺再建に及び、命を奉じて、聖德太子の緣起を堂壁に畫きてよりは、其名遠近に傳はり、名手の譽れ喧

しかりと云ふ。次て徳川氏起り、幕府を江戸に開くに及びて、亦繪畫を重んじ、先づ寛文年間江戸城本丸の屏風、襖、等を調製するに當り、住吉狩野兩家に命じて、其技を盡さしめ、次て兩家を擧げて、幕府の繪師となす、此兩家は我邦、畫界の泰斗にして、一は法印に、一は法眼の官に叙せられ、世の待遇も惡しからざりき。

殊に狩野守信は主として雪舟を學び、傍ら諸派を合一して、其蘊奥を極め、兄弟中を凌駕して、優に我邦畫家の泰斗を以て仰がる、後探幽と號し、宮内法眼と稱す、守信は其初十三才の時駿府に於て、家康の知遇を受け、其命により畫事をつとめてより、或時は天皇の勅を奉じて上皇の御像を畫き、或時は將軍に附隨して、至る處に筆を振ひ其榮を極めたり、爰に於て吉信以來、衰微したりし狩野家を、再び元の勢力に歸し、住吉一派を凌駕して、遙に日本畫界の全權を掌握するに至れり弟安信又法眼に叙せられ、(中橋狩野と稱す)禁中紫宸殿の聖賢畫像の襖の畫幷に御間の畫或は徳川城内、本丸西丸の繪を書し、甥の常信(古川と稱す)又家聲を發揮し、其裔今に畫事を業とせり。

此當時の土佐家は、寛文年中本阿彌光悅出で、一時其技を競ひたりしも、其後は、狩野一派に抗すべき程の名手なく、微々として漸く其家學を保つのみなりき。

＊　＊　＊　＊　＊

是當時、守信の門に鶴澤探山あり、名は守見又良信と稱す、其子探鯨(名は守見)其子探索、其子探泉等相次で、鶴澤一派を興し、其裔守保今に其家學を傳へて畫工なり、又京都の人石田幽汀の門に圓山應擧あり、後元の錢舜擧の風を慕ひ、其妙を極め、常に將軍或は宸極の末光を汚し奉ること

を得たり、嘗て近江國別所村圓満院に七難のを圖畫きたりしに光格天皇深く之に愛惜給ひ、寛政年中宣命ありて、外出を禁せられたり、故に名けて出門禁止畫と稱す、世にこの畫風を呼て圓山派とも、四條派とも稱したりき。

石田幽汀—圓山應擧—┬—月溪—
　　　　　　　　　├—應瑞—
　　　　　　　　　└—景文—西村芳園—

其風殆ど漢畫に近く、技術より見るも、漢畫を基礎として、專ら寫眞につとめたりき、されば、此風大に時好に適して、一時狩野家に對抗するに至れり、爰に於て京都の畫風は全く一變したりき。門人月溪及び弟景文又これをよくして、一派の宗となり、西村芳園は景文の門にありて、花鳥を畫くに妙を得たり、就中、狙仙、英一峯の輩は其妙技應擧につげり。

又同時に佐伯岩駒と云ふあり、應擧と共に有名の畫工にして門弟岸岱、德良も、亦名を得たりき、又同じ時渡邊秀碩の門に熊斐なるものあり、漢畫の法を傳へ、當時狩野一世を風靡し、畫家の面目を一新せしむるに至れり。

此時に當りて又尾形光琳あり、京都呉服商尾形宗謙の子にして、俗稱を厂金屋藤十郎と稱す、初め狩野常信に學び、後本阿彌光悦の門に入り、自ら工夫して遂に光琳一派を創始したりき。案ずるに光琳が、意匠は、畫蒔繪共に新意を用ひ、其畫く處のもの又悉く金泥を交へて、彩色頗る艶美なり弟乾山又此畫をよくしたり。次て酒井抱一、光琳の意匠を集めて新光琳派を開きたり。抱一は酒井雅樂頭忠以の弟にして、忠因と稱したりしが、性多病なるを以て出家して西本

願寺の養子となれり。後東都に來りて、狩野高信に畫法を學び、壯年京都に上りし時、土佐光貞の弟子となり、又圓山應瑞の門に入りて寫眞を研究し、後光琳の畫風を慕ひ、遂に妙手となれり、嘗て光琳百圖及び尾形流印譜をあらはし世に其名を弘めたり。

次で寶曆明和の頃より、漢學者祗園南海、柳里恭等漢土南宗の文人畫を唱へ、池大雅これを受けて畫き初めたりしかば、これより南畫又大に行はれ門人五岳春嶽、相次で斯畫を奬勵したりき。尚此他、天明に宋紫石、蘭齋等沈南蘋の流を受けて一派を立て、寬政に谷文晁出で、門弟文一、文二、相で一派を開き、文化には狩野一派の他、英一蝶、長谷川雪旦、鈴木南嶺等輩出し、各々一流を開きたりしかば其流派は年々に多きを加へ、結果は、遂に今日の隆盛を見るに至れり。

## 山家の日記

笠木しづ子

◎今年いみじき脚氣病におそはれて、いとゞ苦しければ、山家に引きこもり、保養したらむには、こよなうよかるべしと、藥師のすゝむるに、さらばとて、九月十七日午前九時半、書物をつめこみしカバン、着更を入れし風呂敷包を、小脇にかいこみ、洋傘にすがりて、四谷ステーションより、八王子行きの汽車に、病軀を驅り入れぬ。

◎新宿驛を經、中野を過ぎてより、綠翠滴る青葉、南瓜の蔓、長くまつはる賤が草屋根、さては高低斷續、開きたる固まりたる、森林など、風情やう〳〵現はる。

◎國分寺驛より、立川にいたるほど、女郎花いと多かる野べをすぐ、偶感あり。

荒て行く湯げの車の道のべに
やさしく咲ける女郎花かな
女郎花色香をきそひ咲きぬれど
訪ふ人あらでたゞ秋のかせ

◎立川驛にて、青梅線にと乘り更ふ、圓太郎馬車に乘りし心地にて、其速力遲く、箱の狹く、むさ苦しく、動搖と響との甚だしきに、胸苦しくなり腸をゆすらるゝおもひして、堪ゆべくもあらねば、窓押し開いて、四方の景色のみ、眺めやらる。南の方には八王子附近の連山、雲を吐き、霞を呑み、秋の空を彩りて、泰然と列り聳ゆ。

◎福生停車場にて下車し、其が前の一小茶店に憩ふ。怪しげなる床机に腰を下して、茶一つと乞へば、塗の剝げたる古盆に、黴くさき菓子と、煤けたる茶器とを載せて、ハイと突きつけらる、見てさへ腹一杯の心地して、やう／＼喉をうるほしぬ。

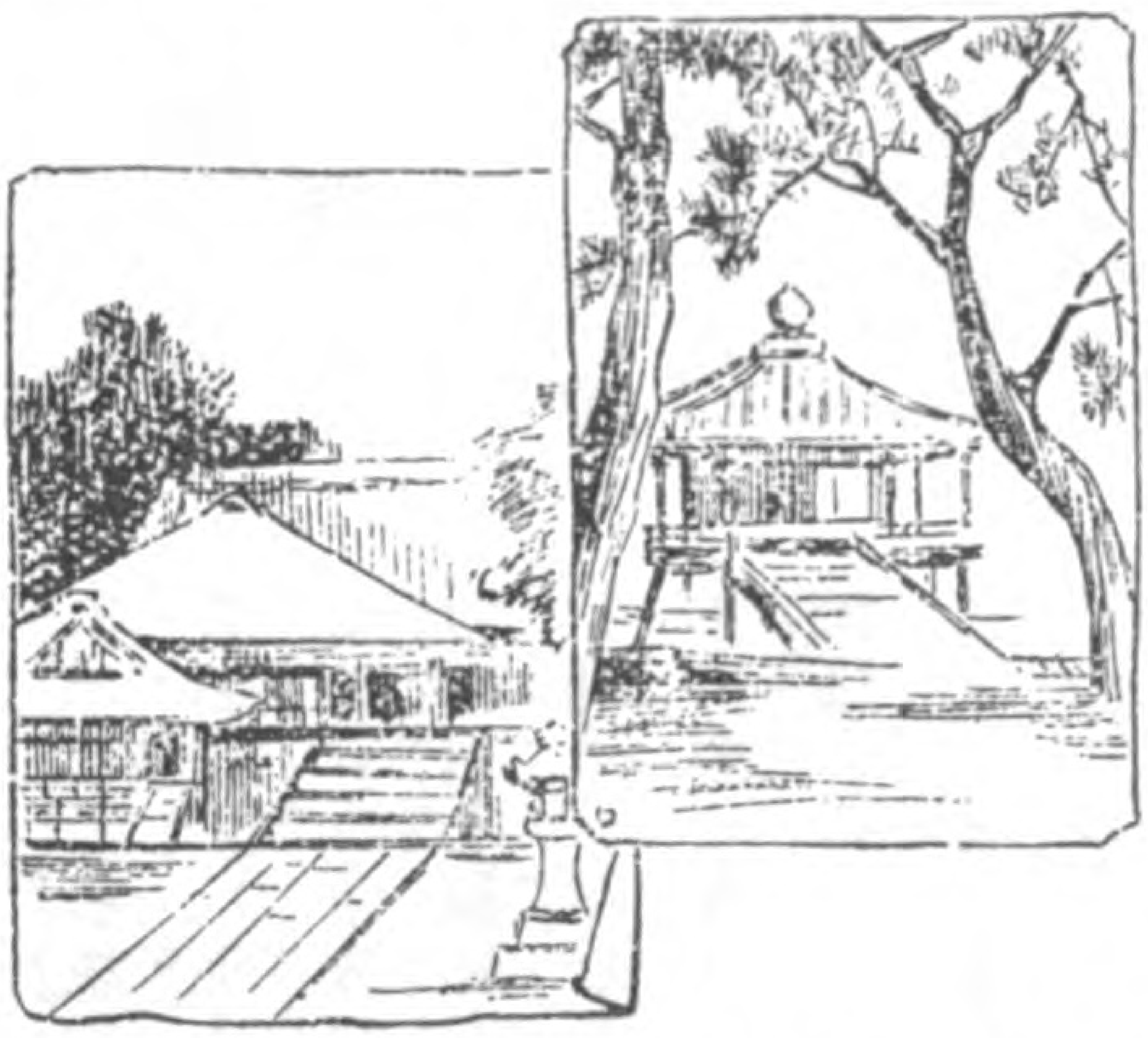
◎福生より西、六七町にて、多摩川を渡る、名高き流れなれど、此のわたり、風景あまりをかしからず、怪巒奇峰、あたりにあらぬ故にや、只だ怪しげなる板橋の、このごろの水の爲めに、半落ちたる樣の、何となく風情ありげなる有るのみ。

◎右に曲り左に折れ、竹籔をめぐり、雜木林をぬけ、岩石狼籍たる山坂を上り、蔓草にかくるゝ路を降り、傾むきし土橋を渡り、あばらやの軒端をかすめ、幾度か投げ出されむとして、冷汗を流し幾度かさしかゝる路邊の樹枝に、顏を衝かれむとして、寒心しつゝ、古ぼけし車にゆられて、菅生村へとたどりゆく。

◎盆大の石狼籍として、凸凹いみじき雜木山の坂を、今にも覆らむとする車台に、しかととりつき、夢心地に降りつけば、とある溪川のほとりに

出づ。眺むれば、遙か上なる竹籔のかげより、澄みわたる玉をつらねて、涓々と白砂にむつれ、岩に戯れ、妙なる聲に、高く低く歌ひ出で、見やる後の蛇籠に突きわたり、右の森のかたへと流れゆく、其の景いとゞいみじきに、野橋の袂榎のかげに、まだうらわかき賤の女の、赤襷を甲斐〴〵しくかけ、脛もあらはに、物など洗ひゐる様げにいひいでむ言のはもなし。

◎小暗き木立の繁み幾個かをぬけ軒かたむきて怪しげなる水茶店の前なんどを通りて、行きゆけば、溪開いて山遠く、嵐影傾むきて、野稻、芋の葉の波、のどかにゆらぎ、草生ふる賤が屋根、三々五五、彼方こなたの森かげに、靜かにあらはれぬ。



こゝぞ我がこゝろざす村といへば、うれしく、尋ぬる家は何處ぞと車夫に問へば、見上る峰の一本松の木末のあたり、小さく舞ふ鳶の、その下つ方トタン張とも見ゆる屋根をぞ指さす。

◎四とせ越し逢ひ見しことなれば互に物珍らしく、別後の挨拶せしより後は、何より物がたり出でむやうもなく、唯ホク〴〵とうちよろこぶぞわりなき主人は我が故里人にて、久しく東都にありしが、今をさる四年以前、此の山中に分けいりて、小學校に教鞭をとられいとゞ長閑に世をすぐされしが、幸ひ住居も校舍のはしなれば、此の頃にては、養鷄せむとて、朝夕に雛兒をはぐゝむことの忙がはしきよし。嗚呼

袴を着ては、先生と群兒に仰がれ、袴を脱しては一個の村夫子となる、其の境涯また浦山し。婦の君は、今年花開くころより、いまはしき病におそはれ、たちゐもままならぬ身となりたるに、山家のならひ、よきくすしも、たよるよすがもあらねばとて、故里にいたり、藥滋をつくせし甲斐ありて、この二三日前やう／＼たち歸りはべりしとて未だ行李もとかで、室のかたすみに置かれあり。くさ／＼のものがたりするほども、かたみかはりに、病は恐しけれど、こゝにきたりては、こゝろおきなく靜かに保養せられよと、なぐさめくるゝことの、さてもありがたさよ。

とかくするほどに、暮色靄然、溪間より起り、炊烟をこめ、伏家をのみ、次第／＼に此の家をさして迫り來る。さらば我がやどらん家にと起てば、袖を控ゐて主人諸共、いなとよ、今よひは何もなくとも、賤が山家の、いやしき料理、こゝろたのしく、かたみにあぢはひ、越しかた行く末の、物がたりやせむずらん、さりとは、すげなうも、おもひすてらるゝことよと、強て止めらるゝに、さのみはとて、終におもひとまる。

暗燈のもと、晩餐を喫しをはれば、主人は箸を持て食卓をたゝき、切りに養鷄の趣味多くして、利のある所以、はぐゝみの要など、ほこりがにかたらる、それより教育の方法、人生の行路難、山家のすまゐ、東京のありさま、さてはうきよばなしなど、津々として盡くることなきに、おもはず夜を更しぬれば、今はとて、つかれし脚を起し、明日をちぎりて立ちいでぬ。折から端山の松をはなれて、十六夜の月、澄みのぼり、庭前樹影婆娑として、草むらのうち、露をかつぎて、虫聲いとど咽ぶ。

## 漫錄

◎學校の坂を降りついて左の道端、八つ釣瓶仰向き、軒低う伏し、燈火おぼろに洩れて、ラムネの空瓶、煤けし菓子箱、さては種々の商ひ物措かれたる店頭に案内せられぬ。今しも烟に巻かれて、顔を皺がめ、榾さしくべ居たる、白髮の老爺を始め、鼎坐の人々あわたゞしく居ずまひを直して、各挨拶するにおのれも、今より賴む宿のものぞとおもへば、いと丁嚀にこそ會釋しけれ。澁茶一吹はし終れば、嘸ぞ晝の旅路に、勞れつらむに、夜もいたくふけぬれば、いざとて、すゝむるに、あないせられて奧の臥床にいりぬ。戶ばそを洩る丶月かげに、機織虫の鳴く音をあはれみつゝ、枕引きよすとおもへば、早や夢魂は飛で何れの山か、何れの溪か。



◎曉嵐冷霧を亂して、そよ〳〵吹き落つる枕に、見果てぬ夢を殘して、手拭片手、楊子啣え、淙々涓々たる屋側の溪流に、手水せむとて立ち出づ。水は淸澄透徹、小石を越え白砂にすべり苔をなめ、山魚を追ひ、小笹をくゞり、岩根をめぐり、狹霧の衣を引きかつぎて、潺湲の聲に、四邊の木立の夢を破りつゝ、下へ〳〵と流れ落つ。見てさへ眼の打醒むる心地するに袖ひぢて、掬一掬すれば、指頭に花と咲き玉と飛び散る、口に含めば、異芳香ばしく、甘露喉を衝いて、俗腸爲に洗ひ淸められ神氣爽快、萬念俱空、轉た萬年の齡を延べむおもひせらる、衣を寬げ、胸を開き深呼吸に、いざこの溪間の神靈を呑まむと、口を開いて天を仰げば身をそいで、突兀聳ゆる斷崖の頂、朝日松を染

めて、昇りわづらふ淡紅色の曉雲、巖角に迷ひ、葛蔓をつたふ露のさまいとゞ長し。

◎淋しさに、宿をたち出で、屋後の旦ある原頭に、暮れゆく山家のあはれを見むとて、そゞろあるきす、腰折あり。

夕鴉消えゆく山のふもとより
　　心ぼそくもたつけむりかな

◎遠近のたつきもしらぬ、山里の、夜半のねさめばかり、さびしく、かなしくあはれなるものはなし、まして雨の音など、きゝたらむには、いかばかりぞや。

山里の夜半のねさめのさびしきは
　　尾のへにすさぶ村雨の音

◎前山後嶺、湧きたつ雲のけしきの、いみじうをかしきに、おぼえず重き脚を引きずりつゝ、苔の衣を、半日峯の嵐に吹きまかせぬ。こゝろゆくことかぎりなし。

宿りけむ昔のあとやたづぬらむ
　　峰よりみねにうつる白雲

# 結婚に對するトルストイ翁の意見（承前）

法科大學　佐藤天風

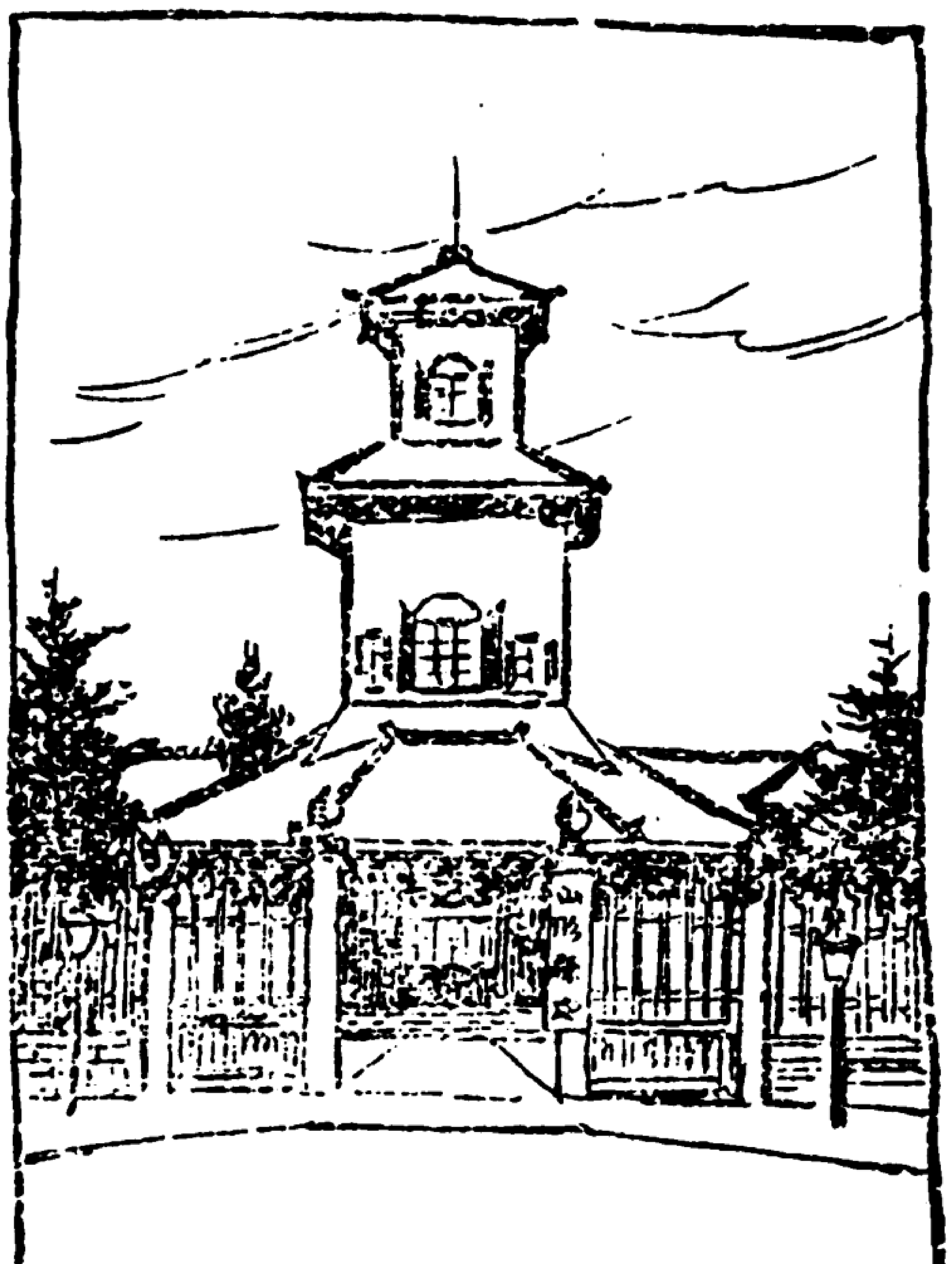
## （四）反對諸説

トルストイ翁の結婚に對する意見は、實に上述の如きものなりき、彼の説の背後には、兩性に於ける生理學上の相違、及び精神上の差異あるを重視せざるのみならず、生理的關係が、如何に多大に精神的關係に及ぼすかを顧慮せざりき、勿論彼は彼自らも、如何に、性慾の忍び難きかを認識して小兒或は老衰せる者の以外の人に於て、性慾と鬪

ふより、より難戰苦鬪あるものはあらずと云ひたれども、彼が高遠幽渺なる理想は、かゝる現象を以て、もとより立論の障害となすことなく、一躍に天に飛登して、此に向上的排結婚の旌旗を翻したり。

果然疑問の矢は四方に起りたり、或者は彼に書を寄せて曰く、男性に於て發達せる氣象は、多くの場合に於て女性に欠くる所たり、而して女性に於て發達せる氣象も、同じく男性に欠けたるを免れず、故に人類が實に超越して、其性格を進化せしむるが爲めには、少くとも兩性間に於ける密接の交際なかるべからず、之を以て相互の欠點を補充し、此に醇然たる進化の絕頂に向て進む、是れ現在の人類に於て、最も必要なる最も有益なる事に非ずや、而して之れが橋梁たるものは實に結婚ならざるべからずと、是れ又一の有力なる反對說にして、此說の裡面には、プラトーが曾て唱道せし理想と、殆んど相一致せる觀念存在するを認む、プラトー其『理想的國家』の條下に論じて曰く、人はスパルタ的の資性を以て、アゼンス的の敎育を受くるものならざるべからず、質朴の美性を銷磨せずして、優雅の態を備へ、柔弱の弊を滅却して文敎を學び得べきもの、是れ我所謂理想的國家に於てのみと、嗚呼是れ豈に敎育の一大方針とすべきものにして、如斯大根據によるの反對說は、亦誠に再誦すべき價値ありといはざるべからざるなり、然れどトルストイ翁の答ふる所は、實に明白簡單にして、宛も青刄を振ふ猛將の、一刀兩斷の如し、曰く、然り、人生の進化は、其如くなるべし、然れども男女の間に於て、兄弟的博愛の精神は、果して生理的接合を排して成立し得べからざるものか、若し成立し得ずとすれば、吾人人

類の大理想は、如何にして之れを實現し得べき、天上の平和郷は、何れの時、野獸的本能の汚濁を去りて、此地上に建設せらるべき、只だ此一大渦仰向上の心念、潑々としてあらゆる苦闘を耐へ得るのとき、始めて吾人の心靈を開いて神の子たるを得べしと、彼の解答は、如斯簡單明白なるものなりき、然れども現今の時代は、正に一大教訓に、大に聞く所なかるべからざるの時にあらずや。



而して他の說は、又彼の說に反對して曰く、翁の說は、最も宏麗精美の理想なり、然れども翻て人類幾多の社會を觀察し來れば、獨身清淨の生活を保ち得るもの、果して幾人か數へ得べき、故に若し之れを人類の全體より打算し來れば、斷じて之れ不可能に屬するの事たりと云はざるべからず、而して不可能に屬するもの之れ果して理想と名くるを得べきか、之れを以てか、翁の說や空想也、夢想也、妄想也、而して眞の有價値の說となすべからざるなりと、然れども翁は最も明了に之れに答へて曰く、基督の教は常に絕對の理想を示して、之れに向て精進せしむ、然れども之れ絕對のものたるを以て、之れに到達するは得べからず、忠たれ孝たれとの小理想を揭げて、之れを得て以て滿足し了するは、吾人の理想にあらずして、吾人の理想や更に幽遠なり

漫錄

然れども飜つて之れを考ふれば、實に人生の價値存在する所以は之れが爲めにして、人生の光明始めて此に意味ある生命の泉を示す、故に吾人は常に苦戰難闘の巷にあるものにして、其中に大勇猛の精力を振ふものこそ、最も尊ぶべき一大偉人といふべし、而して獨身清淨の生活は、實に之れが一大條件なりと、視よ彼が不撓の熱誠は、殆んど凌天の威力を以て、天上の星座を動かすの觀あるを。

而して他の説の、人類は繁殖の道を講じて、千歲の時を經て、漸く進化するものなり、故に性慾は愛とす、生兒の媒介をなすものなりと唱ふるが如き、或は、若し此に人、世の幸福を全ふする爲めの規則を與ふれば、人は快樂を欲するが故に、必然に服從を欲す、而して異性相愛は、自然の規則に服從して、人類の幸福を增進するものなりと云ふが如き、ある一派等の唱ふる諸説は、彼が牢乎たる立論に、些の影響を及ぼす事なく、殆んど彼が竊笑にも價せざりき、何となれば彼は功利主義、性慾主義、或は快樂主義を以て、人生の道義に對する一の誘惑的覆面な　と思惟し之等一切を捨てゝ、更に幽冥の蒼穹に於て、廣大清冷の大理想宮に憧憬したればなり。

（未完）

## 白粉の話

ＭＭ生

白粉は日本で古へからつかつたもので、雄略記七年に吉備大臣田狹、侍二於殿前一、盛稱二稚媛於朋友一日、天下ノ麗人、莫レ如二吾婦一云々鉛花弗御澤無加云云とあるからして見ても大低はしれます多分三

と交通の際は此の地から輸入したものでありませぬ。

この他和名抄とか榮花物語とか色々の本に白粉のことが書いてありますが昔も今と同じく多くは顔料としたもの丶樣であります。

古く白粉はハラヤと云いまして白粉箱の中に玉虫と一緒に入れてもつと人に愛でいつくしまる丶と云い傳へまして媚藥の一に數へたもので又眞珠に白粉をまぜて入れおくと眞珠が分け身し殖えると云ふことを信じたそうであります。

けれども今日では心理學や動物學からそんなことはない事は明になりました日本にはまだそんな迷信が澤山ありますが御互に學問の力で廣く世の人の迷信をはらはねばなりませぬ。



白粉の製へ方は色々ありますが先づその二三をあげませぬ。

(一)水銀より製するもの、

俗に輕粉と云ふ水銀と鹽素を化合した學問上の名前は第一鹽化水銀と云ふのを燒いて水でねつたのでハラヤとも伊勢白粉とも云います今でも伊勢の國飯南郡中萬村の射和にふるくから白粉を作る家がありますが併し輕粉は日光に當ると水銀がはなれて有毒でありますが　今日ではこの仕方でこしらへるのは極まれであります。

第二鉛より製するもの

京都地方では多く此の仕方でやつてゐますが極大體を云いますと床の上に五六寸の厚に木炭をしきまして其の上に槲皮の屑を三尺ばかりに積んで又その上にルツボ形の直徑四寸深さ八寸位

の土器にうすい醋酸(2又は3%)を底の方に少し入れてその上に鉛の板の二尺ばかりのを時計のぜんまいの樣にぐる／＼まいたのを此の醋酸に浸さぬ樣に壺の中に入れたのを澤山ならべてその上に目わらの格子をおいてその上又こんな工合にし古壺を幾つもならべてそのまゝすてゝおきますと下の方の木炭や槲皮の屑から炭酸瓦斯がでゝきまして醋酸と鉛とに出合つて白い粉なが出合ますこれが鉛白と云ふ白粉の元料になるのであります。

鉛からは又硫酸と化合した硫酸鉛からも製へます併し鉛白にくらべては少し黄味をおびてゐますけれども又一徳には硫化水素に出合つても犯されて硫化鉛の樣な黒いものを作りませぬから白粉やけをすることが少なく且つ前のほどに有毒でありませぬ。

第三亞鉛より製するもの、

亞鉛から出來たには支那白とか亞鉛華とか云ふのがありますがこれは亞鉛をやいたり又は亞鉛の化合物を強い火で熱してとります支那白は硫黄との化合物も白色でありますゆへ硫化水素に出合つても黒色のもの出來ず從つて白粉やけをすることはありませぬ。

白粉の元料は普通上にのべた樣なものでありますがこれには色々なまぜものがありまして石膏、炭酸石灰、陶土澱粉の樣なものでありますが此の中陶土は油と一緒になつたときには透明なものを作りますゆへ白くぬる役に立ちませぬ炭酸石灰は生石灰になりますゆへ顏料にしては顏があれてきます石膏は日光や外氣に合つてもよく耐へます上に中性のものでありますゆへ實は少うあります。

白粉のつかへ方は色々ありますが普通顏料としま

すその他收斂性がありますゆへねつて膏藥にして皮膚炎の藥にします又燒きもの丶琺瑯藥やペンキなどに用ゐられます。

或地方の諺に「白粉を始めてつかつたり蛸を始めて食つたものは大膽なものであつた」と云ふ意味の言い傳がありますがこれは白粉の有害な事をとくから知つてゐたものでありまして白粉は色々なことにつかはれる代り又色々害がありますその二三をあげてみますと。

湯あがりに白粉を體にぬると折角體の中から水分と一緒に不潔なものが出でよふとしてゐる毛孔をとめますので血液を不潔にして頭痛持となります從つて顏色が青くなり食物がす丶まず身體がよはつて來ますその上體の中にすいとりまして種々の害をします藝者や俳優などの樣に白粉を澤山つかふ人が若死をしたり急に腰が立たぬ樣になつたり聾となつたりするのは一は白粉の害だと云いますす人の皮膚からは硫黄分が出ますので鉛と化合して硫化鉛と云ふ黑いものが出來ます白粉を澤山つかふ人は白粉やけをして素顏のときに前よりも黑くなります一時のみえをはるが爲に一代の醜い人となりますのは大きな損で又髮膚を毀けるは孝の始めでもありますまい。

白粉に中毒したときには湯に入つてからオロシ大根をのんで發汗をさして汗と共に鉛を出すのはよいとか云ひます又鉛白で出來たのには稀硫酸をのむのがよいとか云ひますがこんな姑息な手段をとらずにすぐと良醫について治療をするのが一番であります。

一番よいのはこんな有毒なものを始めからつかはぬのにこしたことはありませぬ今日の有樣で交際の一要品として止むを得ずつかふ場合にはよく水

かしてわくをさつて後につかふ様にすれば幾分か害をすくなくするとか云ひます。




# 垣間見

井上雲嶺

（第一回）

今年の春のことである。

よき貸家もがなと、日頃知人の誰彼に頼んで置いた我は、或日の朝その通知に接して、行つて見ると至極適當な家なので、固より新世帶の荷物とても少く、その日の中に引移つて了つた。



さて引越と云ふものは面倒な奴で、何もない様でも、荷物の整頓やら、棚の吊りつけやら、何や箇やで一日二日は空に經つて、大方は整頓した三日目の朝、氣も漸く沈着いて、悠然と茶を喫みながら庭を眺めると、先づ我が意を得たは見事にさびた赤松、千歳の風雨に曝されたらむが如き枝ぶり面白く、空に伸び地に匍匐ひて宛然妖怪の今にも躍り出さんかと疑はるゝばかりの奇形、苔蒸したる石燈籠を隔てゝこれと相對するは二三株の梅樹、これまた一目して古木たるをそが鎧の如き幹膚に發られ、蕾はまだ堅げれど、こゝ一日の暖に會はゞ南枝先づ笑ひ出さん風情仲々に頼もしく、疎開なる生籬を透して、片側道の前方は一面の水田、今は問ふ人もなき田面の、氷こそ張りつめたれ、軈ては宿さん、眞如の影潔き田每の月、或は小田の蛙と歌はれけむ小畜の聲、さては瑞穗の國

の貴なる黄金の波、何れか面白からぬはなき數々の偲ばれて、牛込の場末とは云へ、まだ東京の中なるに、宛然田舍住にてもせしかの心地、繁華を誇る都會も隣りは田舍なりけるよと、我は今更の如き感に打たるゝのであつた。

一日と過ぎ二日と消ち、日毎に眺むる庭の面は次第に眼に慣れては來るが、また一種の得も言はれぬ興味が日增に加はつて、恰好の家を得たるに心嬉しきこの頃の我は、朝餉を終りて後、庭に下りて箒を手にするを一つの日課と定めた。

不思議と云ふ程でもないが、一つ氣になることが出來た。丁度我が、庭を掃いて居る時刻である毎日或は一日隔位、庭の生籬に添ふて徃來を步きながら、我が家の中を垣間見る若い女性がある、初めの中は左のみ心にもかけなかつたのであるが、日を經るに從つて何となく異しい素振も見えて、時には立止つて中を窺ふこともある、我は餘りの腹立しさに、一度は言ひ懲してやらむかとまで思つたが、と云つて衣服も容貌も醜からず、髮の結ひやう衣服の着こなし、何うしても中流以上の細君らしいので、まさかに詰問するも心ならず我はたゞ判斷に苦むのみであつた。

（第二回）

わたましゝてから二十日ばかり經つて、長閑に晴れたある日の朝、心地爽快に朝餉を終つて、平日の如く庭へ下りたが、餘り見事な天氣で、終日家で暮らすも惜い樣な氣がするので、龜井戸あたりは最早いゝかも知れないとぶらりと、家を出た。

俗人の集つた東京での花見、何うせ俗地とは知れど、臥龍とまで銘打たれた梅園、少しは雅致もあらむかと思つたはまだ買被り、酒樽こそ轉げも

せぬが、二时半の高襟や、吾妻コートに夜會髷の横行には、風流も雅致も耐つたものにあらず、我は雜踏に慣れぬ爲め頭さへ痛み出したので、歸路は上野へ回はつて繪畫展覽會をとの計畫も滅茶々々、匆々にして家路へと向つた。

丁度砲兵工廠の前へ來たときである、後から肩を叩くものがあるので、驚いて振向くと、絶えて久しき友の小山武之介。久濶の情は互の胸に溢れて、暫時は出すべき辭も知らなかつたのであるが、同じ方向を取つて居たので、先づ連立つて歩みを續けた。

彼は幼時よりの我が友で、中學時代までは學校を同くし、學級を同くし、殊に家を隣合はして居た爲めに、隔意なき親友であつたが、其後彼は更に高等學校を經て大學に進み、我は家君に隨ふて、一度關西に浮び、再び來つて文學に志したので、互に學に勉むる身は寸暇を剩さず、一度道を殊にしては相會ふの機會稀に、心ならざる疎遠は引いて今日に及んである。

彼の住居は同じく牛込で、我が家にも遠からざる由。懷舊の談話は誰彼の消息に渉つて、何時しか江戸川端も過ぎて、東五軒町へと來た、すると彼は停立つて左側の二階家を指して「此家です、まだ早いから寄つて行きませんか、何もありますまいが再會の祝盃を擧げますから。」と云ふのである、歸るも別に用のない我、何條友の厚意を捨つべき、導かるゝまゝに南向の二階へ通つた。

主客の坐定まつて、汗ばんだ額など拭ふ中、足ざはり靜かに梯子段を上つて來る音がするので我は多分細君ならむと心構えした、手にした茶盆を傍に置いて髮の毛艶々した、肩つきの柔しい、頸足の美しい女性が、我が前に柔順に低頭した。

友は果して細君なる由を紹介した。初對面の挨拶の濟んだ彼は、少しく退つて茶を點じ始めた。如何にも女性らしい女性、細君らしい細君、扨ても幸福なる我が友かなと、我は羨望の念を以て、ふと細君の顏を見たが、この時の驚きよ、我は危く叫ばんとした、併し、同じく我を見た彼の喫驚は一倍であつたのであらう、心の驚愕は更に指頭に傳はつて、注ぎかけた吸子は手を滑つて、茶碗と共に眞二つ。それかあらぬか、彼の顏は紅を流したる如く、纔に發したる語もいと術なげに「飛だ過失を…………」と伏向いたまゝ茶盆をもつて下へと立つた。彼は日頃我が家へ垣間見る女性である。

天性温和なる友は、細君にも柔しいのであらう深く我に粗忽を謝したるのみにて、怒りの色は見えなかつた。併し吸子も茶碗も壞れた外には、何等の意味をも認めなかつたのであらう。我は今の擧動に依つて、この女性の我が家を窺ふて、夫にも明すことも出來ない、或る秘密をもつて居るのであらうと推斷した。

時間のとれるは騷ぐ心を鎭める爲めではあるまいか。暫くして細君は再たび茶器を運んだ。最早顏の紅色も薄らいで、いと心靜かに茶を進めた。

我の心は亂れざるを得ない、この女性に關する疑問は胸中に徃復して、友との談話も上の空である。が、斯る疑問は容易に解決し得たものではない、加之、今の我は友の厚き歡待を受けつゝあるのである。と思ひ到つたので、湧き來る疑問を強ゐて廢しつゝ、友の談話に和すべく努めた。

時に連れて運び出さるゝ佳肴、興に乘じて交はす酒盃、我は終に陶然として醉ふた。辭し歸つたのは彼此六時であつたらう。

（第三回）

彼も立派なる法學士小山武之介の妻である、身分に於ては更に疑ふべき所はない、また昨日見た所では、十分なる婦德を備へて居るに違ひない、決して縱に垣間見などをする樣な卑劣な女ではない、然らば何故に我家を窺ふのであらうか。これには何か深い秘密があるに疑ない。

測らざる友に邂逅した翌日、殆ど終日、友の妻なる怪しき女性に就いて、種々解決を試みたが、一も得る所はなかつた。

一日を隔てゝ友は我が寓を訪ふた。積る話も山の如く、仲々一日二日で竭ることではない、彼は十分の歡を盡して夜に入つて辭し去つた。

幼時から性質を知り合つた友ほど語り易いものはない。殊に彼の性質は一方に偏して居る爲め、多く友人知己を持たないのと、互の住家の近いのとで、交情は日に親密を加へて、まだ一月と經たない中に、五六年前の親友に返つて了つた。加之彼は法律家ではあるが文學の趣味も十分に解して居るので、時には夜を徹して語ることもあつた。

舊交を温めてから彼此二ヶ月にもなつたらう。この間我は彼の妻に就いて絕えず頭を痛めて、今は單に怪しの女性としてのみならず、親友の一身に繫る大秘密大疑問として、熱心に判斷を求めた併し依然として端緒をも見出すことは出來ない。屢々彼の家を訪ふので、始終細君の擧動に注目して、隨分玄微なる點にまで心を用ゐて探索したが彼は常に温和なる細君、貞淑なる女性、とより外何物をも發見し得なかつた。また、友の家庭の藹然たるは全く彼細君の力であることも十分に認めらるゝので、毛頭疑を挾むべき餘地はないのである。固より餘人に口外すべきことでなく、友に

ひうかと話せない事柄なので、我は獨り頭を惱ますばかりである、假令友に話した所で、彼は寧ろ我を疑ふであらう。彼等夫婦の間には神聖の愛情が往來して、念頭微塵の隔意を容さないのである。

我は大に惑はざるを得ない。これに關する憑據としては、我が友と邂逅した翌日から、彼の怪しき女性が我が家の側方を通らずなりしこと丶、友の談話に依りて、彼は我が家の先住者であつたことを知つたとの二つである。我はこの二つに依つて樣々の臆測を試みたが、これだけの材料では如何に排列して見ても、秘密の蓋を開く鍵は組立てられない。まだこの外に注目すべき點もないではない、友が我に先住者たりしを語りしときと、その後屢々我が家に就いて語り出るときには、傍に坐する細君の顏色が毎に少しく動く樣にも見られるそれとても我が心の迷ひだと云へばそれまで丶、強ゐて明言することは出來ない。もう一つは、我と友との親密の度が加はるに從つて、性來口數の少ひ細君も、この頃では冗談の一つも言ふ樣になつたのであるが、友の坐を立つたとき、または友の不在を訪ふたときなど、單に二人對坐するときの彼の態度は、非常に端正嚴格であるの一事である。これに依つて無理に、牽強附會の臆斷を下して見ると、彼は我の口から秘密に就いて言ひ出でらる丶を恐る丶か、若くは一歩進んで、我が既に彼の秘密を知つたものとして、その秘密を發くの機會なからしめんとする爲めではないかとも思はる丶、併しこれとてもたゞ臆斷に過ぎないので人の妻として他人に對する態度の、端正嚴格なることは固より當然である。たゞ非常と云ふ形容詞を受けるだけが不審であるが、それとても天性だ

と云へばそれまでゝ、深くを知らぬ我にはこの上の抗辯は出來ないのである。

中頃には向島の櫻もと云ふ月の初旬、我は少しく家事に忙いので、心ならずも無沙汰をして、友の方からも少し足が遠退いた樣であるが、多分役所が忙しいのであらうと思つて、別に氣にもかけなかつた。

餘りの無沙汰になるから、今日是非訪問しやうと思ひ立つた朝、驚くべき手紙が來た、友の細君は流行性感冒に罹つたとのことである。この頃の感冒は大變に性が惡くつて、大槪は死ぬと云ふことを二三日前耳にしたので、我の驚愕は一倍であつた。朝飯も匆々に、五軒町へと車を飛ばした。

(つゞく)



# おあさ

天聲

(我)

風は枝を鳴らさず、雨も土塊を毀ることかはと三百年の夜半の夢、覺め行く嘉永の初めの年、浦賀沖邊に星の光の旗幟きらめきて來る亞米利加軍艦、日の本の天たゞは晴れがたく、勤王攘夷佐幕開港、腥さき風西より吹きて、可厭な血の雨地に降らんずる時の勢ひ、常陸國水戸は烈公齊昭の城下殊には人心鼎の沸くが如く騷ぎたちぬ。

茲に水戸の街は身代素からず、太物呉服商して菱屋勘兵衛といへるが今は寄食の身の上、五百石の武家に生れながら、母には去年の春、散りゆく花の行方悲しき死別れ、父は譜代の食祿を塵介に捨てゝの江戸に旅行、此家に預けられたるは十三

の秋、絹布を木綿に着かへ、お孃さまを町家娘となつて、膝襜がけに蝶々髷、我まゝを遠慮に消して萬事控目の昨日今日、過ぎ行きて十四の春を迎へたり。

父の依囑なればか、朝は某寺に通ひて女大學に平假名つきのお手本、寺子屋の仲間入、腕白者と一列、歸りては菱屋の女房をおばさまと尊敬て、裁縫の手指南受くる動作も温和に、夜となりては机に倚りて文繙くことを怠らず、室はさすがに一室ものにて、去る冬の胼の痕、まだ消えやらぬ婢女の手に、左右の世話受くるものから、行儀作法を心得し侍女とは違ひて、褥とり奨るゝにも、蒲團はたりと敷きて、其上を輕石の樣な踵に音ざらつかせ、夜着を空よりはふりゆく無作法さなど疇昔には比べがたき不自由の、馴れては軈てまめ〳〵しう我から働くが常となりしも、親懷しき心は刹那も忘れず、如何なればぞ大切な御身分無きものにして、行方定めぬ旅の空には出でさせたまひたる、國の爲、君の爲とは仰せられしが、母樣に別れて程もあらぬに、此上またも父さまに、若しもの事あらばなんとすべき、思へば此身もお伴すべかりしを、口惜きことなり、文してと思へど、何處におはすべき消息は少しもなし、心ならぬ事よと袖の涙の露宿りがちに、思ひの夢路は西の彼方に通ふこと多し。

勘兵衛夫婦、父の依囑し程なれば、篤實ならぬにはあらねど、根を洗へば出入の商人、骨肉の親しみあるにあらねば、兎角は賴み少なきやうに覺えて、心細さは朝な夕なの風の音にも其れと知られて儚かりしを父に受けたる膽氣に剛くし、母に受けたる敎訓辿りて、さるほどにさしも春深く、雪消の水に花の影、彌生の月を暦にくりぬ。

昨宵より四隣賑はしく、女小兒の容貌、何處ともなくにこ〳〵と笑むやうなるは、上巳の節句來りしなりけり、菱屋も今日は習慣ばかりの雛飾、座敷にならべたれど、小娘のゐるにあらねば、家の德は質素が第一、まづ〳〵と主人の勘兵衛、禿頭撫で〻算盤をぱちり〳〵。

三月三日は女子のもの、我身六つ七つの頃に江戸より人形買うて美しき衣服着せて、乳母侍女を相手に此日を晴に通じ、さては母樣の琴彈かれて樂まる〻をあどけなく眺めしが、去年の今日は母樣との死別に悲しう過し、今年の今日は父樣と離れ〳〵の今の身の上、世間の浮くに、はかなさの一層まして獨り沈みしが、夕飯濟む頃勘兵衛女房の入り來て、先刻隣家から、おつれさまもあれば、お淺さまにも今宵は是非お入來をと申してまゐりました、お慰みになること、おいでなされてはとの勸めに、獨り愁う、くづほれしとて詮なきわざあり、町家の雛祭見んも興あるべしと少し浮立ち、誘はる〻ま〻其が家にと導かれぬ。

菱餅五色に列べ供へて、室に三四人の女子、緋鹿子を蝶髷にかけ、簪の花は瓶にさしたる櫻とまがひ、一張羅の美しき晴衣を蠟燭の火影に誇らしうも觀せたれど、いづれも品格なきは笑止なり、お淺やさしく座に通りて威儀正しながら席に就きしが、さすがは武士の娘、過鋭ゐる眦に黑き消しき眼、指で突いた程の靨を雙の頰に湛へたるなどいふばかりなく愛くるしきに、眦に愛でくつがへりつ〻歡び迎へぬ、軈て白酒、鮨の重詰、主婦の來て接待ほど、興も次第に添ひ、笑ひさゞめく聲も增し行く、樂しきまとひに、憂かりし胸も、暫時を此處に晴らせし心地、其夜は何時になく、夜具引かつぎての夢嬉しくも安かりき。（つゞく）



# 文林

女學校　　東久世通禧

ますらをのさまな習ひそ女郎花
同しまなひのにはにたつとも

菊盃枝　　佐々木高行

おく露も香にむせひつゝしら菊の
枝もたわゝにいまさかりなり

自轉車　　松浦詮

水鳥のあしにひまなきこゝちして
わかきもはやく廻るをくるま

短艇競漕　　宗重望

さきになりあとになりつゝ漕競ふ
舟はいつれのいろかかつらむ

新井白石　　宮地厳夫

折々にをりたくしはを見てそしる
かきあつめたるこゝろ盡しを

河霧　　北郷久政

蘆のはなちらすあき風ふきたえて
ゆふきりなひく宇治の川つら

暮山月　　芝葛鎮

村からすこゑをさまりし高ねより
しつかにいつる月のかけかな

晴夜虫　　植松有經

月かけのはれわたる夜はなく虫の
こゑにもさはるものなかり鳧

鷄　　千葉胤明

親鳥と見まかふはかりなりし子も
また時つくるこゑそをさなき

## 文林

苔路露　遠山英一

とことはにまつの雫やかゝるらむ
蛩もぬれたりにはのこけちは

松平樂翁　蜂須賀随子

世にこえし君かいさをは今もなほ
とゝめてけりなしら川のせき

遠樹紅　前田朗子

常磐木のましるもことに面しろし
のすゑに見ゆる森のもみちは

雁來　柳原愛子

から衣またうつ音もきかなくに
雁ははやくもわたり來にけり

岸菊　南郷柳子

手折なはそてやぬれむと大ゐかは
きしのしらきくよそに社みれ

湖上雲　田中流子

みつうみの沖におりゐるしら雲の
葉こしにかゝるからさきの松

ねさめに虫をきく　佐藤艶子

秋の野にあそひし夢はさめたれと
さらにさやけき虫のこゑかな

千代野尼　坂田泰子

水の面にやとらぬ月はやかてその
きみかこゝろにうつろひに劔

山中菊　小川直子

嬉しくもきくこそ匂へあきの香を
たつねあひつる山のなかみち

聞虫　服部磯子

此夕へ子らかはなちしまつむしの
ふけゆくにはにこゑの聞ゆる

櫻紅葉　河村重子

秋きりのつゝむさくらの紅葉は

はなにもまさる匂ひなりけり。

## 蕎麥の花

讃岐 小西甚之助

黄雲漲る春の菜の花、緑波漾ふ夏の青田、何れか田野の美觀ならざる。今日此の頃の蕎麥の花、また捨てがたき田園の眺なりけり。咲きてこそ滿つれ、四方の畠唯白妙に目もたゆきばかりなるに、うす霧はるゝ十日の夕月、花は月光を浴びて愈清げく、月は花色を享けて益白し。花底に結ぶ露の玉、うち振る蟲の鈴にや觸れけむ、響も妙に琅々、鏘々、花の深雪にうづみても秋の歌聲は凍らざりけり。折しも横ぎる雁の一つら、影は長き廣き匂へる素纖に落ちて、月が寫せる文字の跡、いとさやかに讀まれたりぬ。

## 野寺の墓（つゞく）

グレー原詩
橘村意譯

八

高ぶり心われたのみ
侘びしき人を見る勿れ
輕しむ眼下にみつ
村に榮えを殘したる
その勞働をくだすなよ
天自ら賦與したれ
この心こそめでたけれ

九

その名その富身に餘り
掌よりぞこぼれつゝ
かしづく人や手弱女や
黄金白金藏むるも

## 文林

一たび露とちりぬれば
嗚呼春の夜の夢の跡
石のしるしのあるばかり

十

念に紀すいしぶみの
影また地に落もせぬ
德のかゞやき祖のひかり
かくそふ雲のいろもなし
壯嚴の殿壇の火や
讃美の歌の高くとも
黄泉路や人のきくべけん

十一

魂かへす燒香の
煙も見えぬ面影を
像に刻みて幾とせを
遺すもあはれ何のかひ

卿讃むる歌たゞゆなる
言葉も文もいまさらに
黄泉路や人のきくべけん

十二

あゝこの苔の下深く
眠るは露の人の身か
天なる光ひそめ得て
代に照りかへすうた人や
國、政務執る腕や
人の心の春の蝶
樂彈でひく拇指なども

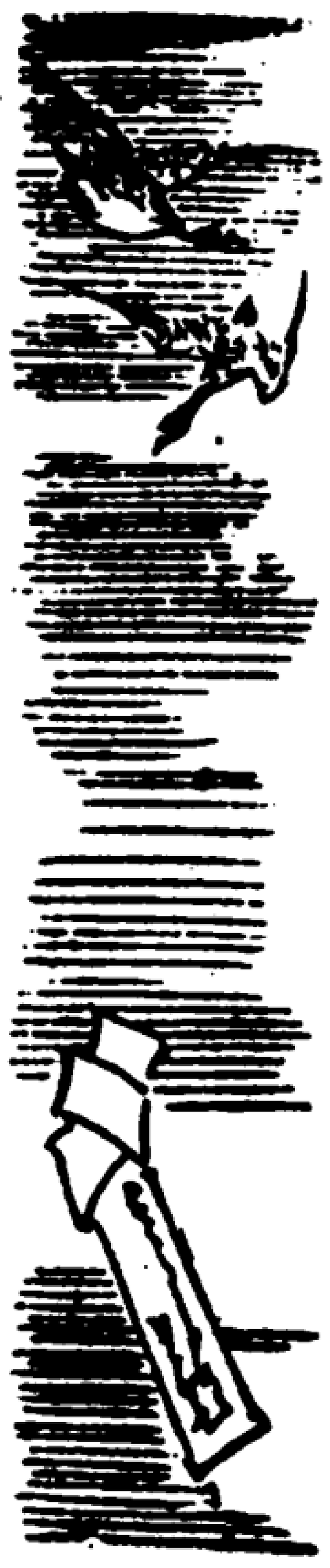
十三

みがゝぬ珠のくもりつゝ
光なくして了りたり
光はあれど山かげに
埋れしまゝに過したり

春風ふかば鳥なきて
流れいづべき山水も
氷の河にとぢられつ

十四

海深ければみなそこの
貝にまじわる璵見えず
眞珠の光かくろへる
山深ければ草叢の
草に知られぬ春の綾
花のいろ香やいかならん
暗の錦の墓なけれ



《をはり》





# 教の庭

## 十月廿日兼題

## 友

### 天

三河國寶飯郡下地町　永井さい子

月にとひゆきにとはれてことの葉の
　はなめてはやすともそたのしき

評曰く、作者のみやび心のほどもしられて我もかゝる友得まほしきこゝちそする

### 地

東京市四谷本村三下田内　篠田圓子

まこゝろをむすびかはしゝ友かきの
　へたてぬなかそたのしかりける

評曰く、調とりかざらずして眞情深し

歌の庭

人　三河豊橋町　服部萬子

しるしらぬかたみにこゝろ打とけて
かたろふものはことのはのとも

評曰く、たくみならねど實情よくよみ得られたり

## 甲之部

東京　北島功子

つのくにの難波のうらのよしあしも
ひとはともにそよるへかりける

栃木　青木多ま子

こゝろしてえらはさらめやおのか身の
よきもあしきもともにこそあれ

埼玉　前野ふさ子

ともかきのへたてぬなかは月ゆきに
こと葉の花もそへて見るかな

東京　北岡ふみ子

住の江のうらへたてなきともかきと



うきわすれ貝ひらふたのしさ

東京　北岡美代子

あしきにはうつろひやすき人こゝろ
こゝろすへきはともにそありける

筑後　宮崎しけ子

うれしきをかたらふ人はおほけれと
うきをとひくるともそすくなき

大阪　大阪谷新子

言の葉のともゝとひきてたのしさに
ふくるもしらしつきのうたけは

三河　三宅中枝子

ふみまなぶともは難波のよしあしの
ふしもへたてすかたりあひつゝ

青森　柿崎秀子

琴の緒をたちてしぬひしいにしへの
ひともありしをいまのともはや

ときはなる松にたくひてうれしきは
いまもかはらぬともの言のは
和歌山 瀬戸榮子

おく深きふみのはやしにわけいりて
こゝろのともにあふそうれしき
岐阜 吉村せい子

老てこそなさけはまされかはかりは
とも〳〵したしとおもはさりしを
松山 上原のふ子

## 乙之部

ことの葉のしけれる道をもろともに
わけてふみゝんともそたのしき
埼玉 前野壽賀子

いしもちてうちあらそへと集ひくる
とものこゝろはしろくろもなし
熊本 志萬圓子

おひ繁るなにはいりえのよしあしも
ましはるとものこゝろにそよる
熊本 坂本竹子

よしとほめあしゝと諫めたのみてし
よになきともそこひしかりける
筑後 武田龜子

よきにつけあしきにつけて戀しきは
同しこゝろのともにそありける
筑後 鏡山増代子

みるからにうれしきものはふる里の
したしきとものみつくきのあと
大阪 大塚小県子

うきふしも嬉しきふしもとも〳〵に
かたらひかはすともそしたしき
大阪 大阪谷信子

みやま邊の秋はいかにとおとつれし
友のこゝろのふかくもあるかな
大阪 伊勢村花子

中かきはへたてなからにへたてぬは
こゝろをあかす友にそありける
肥後 德永萬壽子

海やまをへたてしなかもへたてなき
とものまことそうれしかりける
肥後 德永純子

あさゆふにとひつとはれつ友かきの
へたてなきこそうれしかりけれ
長崎 内藤美與子

よしあしを語りかはしてなかゝきの
へたてぬともそたからなりける
和泉 福原菫子

としをへてつみにし庭のをしへくさ
かれぬやとものまこと成るらむ
東京 片山あや子

打ち向ふかゝみにしらぬこゝろさへ
うつりあふこそたのしかりけれ
東京 片山なみ子

なり〳〵はむかしかたりに打とけて
こゝろへたてぬともそうれしき
東京 内田きみ子

ますかゝみ寫すこゝろもへたてなき
まなひのともそわきてこひしき
東京 吾妻ちか子

秋ふけてつきなき夜半もおもふとち
むかしかたれはたのしかりけり
東京 川村松子

筒井つゝふりわけかみのむかしより
かはらぬとものこゝろゆかしき
肥後 佐々有鄰子

奥ふかきまなひのみちをおこたらす
肥後 田代綾子

## 歌の庭

たとゐもとものちからなりけり

人びとのふみゆくみちをひとすぢに
ともをならみてゆめなたがへそ　伊豫　竹村竹風子

よしあしを共にかたりてたのしきは
同しみちゆくともにそありける　廣島　衣笠澄子

むらきものこゝろへたてぬ友かきは
おいぬるのちもむつみあひつゝ　茨城　荒野たに子

としをへて我ふるさとにたちかへり
むかしのともにあふそうれしき　茨城　内田また子

光りあるたまにもましてうれしきは
こゝろきよけき友にそありける　東京　椎野ぬき子

よきはほめあしきはいさめ中かきの
へたてぬともそ世のたからなる　東京　椎野秀子

月はなのそのをり〳〵におもふとち
かたりあふこそたのしかりけれ　札幌　山田靜子

おもふことつゝますかたる友とちは
はらからよりもしたしかりけり　山口　村上操子

うなゐ髪たれしむかしのともかきは
いましもこゝろのへたてさりけり　大阪　桝田奎子

おもふとち語らひをれはいつしかも
つきのかたふくよはとなりけり　神奈川　田邊房子

友といふとものなかにもことのはの
みちのともこそしたしかりけれ　香川　鎌田光嘉子

たのしさもうさもへたてぬとも垣の
そのまこゝろそうれしかりける　三河　本多きま子

月はなにしたしきともはゆきのこと
とけてもそてをぬらさゝりけり　三河　河合謙子

月はなにうかれあそひてたのしきも
したしきとものあれはなりけり　伊豫　小田操子

### 丙之部

なにとなく樂しきふしもあらはれて
まことのみちにしけるともくさ　東京　牛山業子

すみすてゝよをおく山にいりしみも
めくみをかけしともはなつかし　伊豫　川黒季子

うきこともうれしき事もへたてなき
こゝろつくしのともそたのしき　肥後　德永廣子

雲のあしたほたるのゆふへ友なくは
よのうきふしをたれにかたらん　肥後　德永眞澄子

うきこともともにかたりし秋のよの
つきみるたひにともそこひしき　肥後　德永多瑠子

しき島のやまとのみちをふむひとは
己がしたしきともにそありける　肥後　佐藤直子

まこゝろをかたみにつくす友なれは
わかまつひとやわれをまつらん　肥後　澤田春子

春あきのはなもゝみちもおもふとち
めつるこゝろはかはらさりけり　京都　坪田りき

くさまくらたひ路も友とうちつれて
こゝろのおくをかたるたのしさ　京都　坪田りき

をこたらぬ人をならひてましはれよ
身をあやまつもともにこそよれ　山口　田村多豆子

たひちかく友をおくりてたゝひとり
さまよふはまへいそちとりなく　長門　岩田章子

力らともたのめるひとはなけれとも
うかれてあそふともはありけり　伊勢　池田椿子

なにごともかはりゆく世に今もなほ
まことながへぬともそうれしき　東京　近澤和子

いと〻しくおもひいて〻は忍ふるは
ふりわけがみの友にそありける　東京　椎野鋭子

しら糸もそむれはそまる世のならひ
た〻しきとしもそたのみなりける　東京　椎野清子

こ〻ろしてあしき友とはわかれなん
みつもうつはによれる世なれは　東京　椎野蘭子

よのうさをかたりあひつ〻友かきの
へたてぬなかそうれしかりける　肥後　千知波橘子

たらちねの親につ〻めるひめことも
ともにはかたるなりもありけり　大阪　大塚直子

へたてなきわが身の友そ世のなかの
たからにまさるたからなりける　大阪　伊勢村春子

ふるさとを遠くはなれし身にはなほ
したしきともそもつへかりける　東京　三好珍子

しらいとのちくさにそまる色みれは
ともはえらひてもつへかりけり　肥後　德永雪枝子

いくとせかまなひの庭にしたしみし
とものまことそたのもしけなる　肥後　坂井みは子

つゆちりもへたてぬ友のこ〻ろこそ
たまにもまさるたからなりけれ　東京　永井さき子

こまなくていさみにゆかん思ふとち
はなさきにほふみよしの〻やま　肥後　坂本みよ

さゝのこゑまつのあらしを友として
むすふいほりはすみよかりけり　肥後　坂本美智子

大かたはむかしをかたるひともなし
おいてはとものすくなかりける　埼玉　横田秋子

たらちねの親子の道はへたてあれと
へたてなき身はともがきにして　埼玉　横田音羽子

やま住のわれをわすれぬきみなれは
よろつよまてのともとたのまむ　岐阜　佐藤蒼生子

麻のなかにをふるよもぎの己つから
なほきはとものちからなりけり　肥後　吉富彦子

うきことも嬉しきこともうちとけて
なか〻きゆはぬともそこのとも　肥後　佐々小琴子

花のあした月のゆふへもへたてなき
ともありてこそたのしかりけれ　肥後　田代鶴子

春のはなあきのもみちもともなくは
めてはやすへきすへもしらじな　長野　松澤まつ子

今さらにうらむもあやなましはりし
ともよからはと身をくやみつ〻　長門　杉　道子

まなひやに通ふわらはのさけがみの
とけてもかたるともそたのもし　大阪　中舘やう子

よきあしきかたみにまをを盡してそ
とものましはりまとかなりける　尾張　鈴木雅子

世界は大學校なり
圖書は良師友なり
（ミュルレル）



教の庭

# 月下の讀書

天

長崎市新町十三番地 八尾いへ子

東の山の端たかく、ゐ待の月の影しろうさしいでてやり水にきら／＼と移りてながるゝを見れば、心にかゝるくまもなく、此うまし夜をいかにせんと唐人の舟を浮べたるなどおもひ、飛ぶ雁の數さへ見ゆる夜すがら、たゞにわかしなんは口惜しと、なにくれの文ともとうでゝ見もてゆきゆけは、兄なる人のうけ玉はりたる御軍のしば／＼利あらぬをなげきて、三郎の君、兵をいで、みちのくに下り玉へるに、豊原の某未だ若くして、兵のうちにあなるを、足柄山を越ゆる夜、召してたての上に敷皮しきて、汝は軍に從ふ者にあらず。われに得まほしと思ふものありて來りたんめりとて、笙の笛取り出てゝ、大食調となんいへる秋の調をのこりなう授け給ひ、われは軍に從ふ身なれば、いきて都にかへるべしともおもへねば、かくはものしつるなり。汝は此道に從ひて祖業を守るべしとてかへし給へるを、よみつゞくれば、こはをしへたるも習ひたるも、此あたりに打見る、不二のねの、雪よりも氣高く淸らなるをおもへば、わらはも文よむ道を勤めてあはれ日本女の名をいかゞさじとはげみかつ勇みてよみはつる頃は、夜も更て月は西の山のはにかたぶき、機織虫の聲さへ數少なうきこえぬれば靜にしとみさしおろしにけり。

評、足柄山上の笛の音喨々として、月に冴え渡るが如き思ありて、ゆかし。

地

長門阿武郡椿郷東分村 杉道子

峰をはなれし雲のゆくりなく消えうせて、靜かに眠る大空にいつか月船は淸く浮ひ出てつ、氷の如

く、鏡の如き光は、露冷けき窓の下、我が繙ける書をはしなくも照らしぬ。げにや今宵の月に、あるは高殿の欄により十三の糸の上にましろき指をはしらせて、月かげにやさしき聲音を洩らしつらむ姫御前もありなん、扨ては涙の袖を座敷きて、愁をかこつ人もあるべし。實に世の人々はおのがじ、月にあくがれいらむを、我はゆくりなくも今宵古き聖賢の書をたしなめるにぞ。なむとあう月の光も尊く仰がれて、己が心もいと清くなむ覺ゆるぞうれしき。

あはれやげに、人の命に限りあれ、されどみ空に澄む月影には限りあくて、明鏡の如き光は今も昔も變りなく人の世にてりかゞやきぬれば、ひが人は己が心の罪を靈光に照らされて畏懼の念や起しつらめ、聖人とや云はるゝ尊き人は己が誠の心を清き影に映して、正しき道の語らひの友とはなしけむなど、思ひつゞくる我が胸には、いつか鮮やかなる一條の光射て、すぎにし迷ひの夢はさめつらむ心地ぞせし。

それよ、我はまことに、身の不遇をうらみ、はた世をこよなうつれなしと我が胸のあくがるゝまで思ひなやめつゝありし身よ。

悟ればげにうたてや月の下。讀み下す文字はいよよ鮮明になりゆきて、貴き人の俤そゞろにあらはれ、我が迷ひの雲は、はしなくもしりぞき、清き月の鏡にうつる思ひになやみし、我が心を正しき道に導き給ふらむごと、文のふしぐ身に沁みて全く迷夢のさめ果てし我は、纖翳なきみ空にのぼりし心地ぞなむしていみじき。

評、調はぬ節なきにあらねど、全体の趣巧あはれに、やさしく出來たり。

## 人

長野縣北佐久郡南御牧村　松澤まつ子

友松虫の聲は、いとさゝ渡りてきこゆれど、訪ひ

來る友もなく、つれ〴〵なるまゝに、月やいかにと、書たづさえて、はしちかう、立ち出てつゝ見渡せば、月の山の端、ほのめき出てゝ、もみじすればにや、いよ〳〵澄みまさりて、七草どもゝややうつろいかゝりし庭面は庭、盛りにもまして、いと美しう見え渡りて、己れ獨り顔の柿の實の赤うなりたるが、月にかゞやきたるも、いみじうをかしくおぼゆるよ。斯るをかしき景色見るにつけ、思い出でらるゝは、去年の八月二十一日に、山ほとゝぎすの一聲を、しるべに亡き數に入り給へし祖母樣にわれ、あはれ。祖母樣は、長く病の床に居給へしかば、つれ〴〵におぼして、枕邊に侍べる人々に書讀まして聞き給ふを、此上なき樂みとして居給へりき。ことに夜は、訪ひ來ん人もなければ、とく書をと、の給ふまゝに、己と、すて子の君、くに子の君など、三人の孫等が今日しも届きたる雜誌など、いち早くも、讀みて聞上れば、祖母の君は、女の物學びの日に月に、進み行くを、いみじう感じ給ゐて、「あはれ、御身等も、世のいとなみの、いとまには、つとめて、學びの道たどれよ」 いとねもごろに、さとし給ゐ、夜や更けぬらん、そうじ明けよと、の給ひて、月のいたくかたむきぬるにさらば、いねよと、の給うが例なりき。あはれ〳〵月は其折りの月なれど、祖母樣早や。

只耳に殘るは、情けある御言葉なり。いで怠りでやはとて、せわしく書とり上げて讀みもて行くに、にはかに、書の上おぼろになりければ、涙にくもりしにやと、目打ちはらへば、あらず〳〵世の諺にもれで、むら雲に、さゑぎられしなりき。いと心惡くて、とく其惡魔はらいてよなど念する程に、下界は、再びてらされつ。いと嬉しくて、よ

みさしの書、くり返して讀みもて行くに、いつしか心も、澄みまさりて、一心に書の林に分け入りつゝ。「文よめば大和もろこしむかし今よろづの事を知るぞ嬉しき」と本居宣長翁の讀まれしも、げにことはりとこそ、おもほえて、いでこれよりは、此書の如き益ある書を友として、四ッの時其折々にしたがひて、さやかにてらす月影に、わがれる人々の、もすそのわたりまでもふみ見ばやと、心づきたるも、月下に書讀みし、たまものならんか。月は、いたくかたむきて、中庭の松が枝に、面白くかゝれり。折しも一聲高くなきて、東の空なつかしの祖母樣のねむります方へと渡り行くかりがねも何となう心ありげなりや。

評、過にし昔を偲ふ心、あはれにやさしう聞へて、眞情の流露せるを覺ゆ。

長門　岩田章子

月々に、月見る月はと云ひけん月も、げに此月の月なれや。なべて、秋は月の世なりけり。須磨より明石の浦づたひ、繪島が磯の月。さては、舊き都をなつかしみ、獨、黄菊紫蘭の露に袖そぼちたる、徳大寺殿の心匠やさしきかな。から詩人がすさびし、獨出門前望野田、月明蕎麥花如雪とや、邪なきに見し、白樂天が配所の月や如何なりし。ひいてぞ想ふ、恩賜の御衣に輝きし九陽の月、美人を、天の一方に望むとか、こちし赤壁の月。哀れ、不斷の光なしとも、亡國の恨に啼く鵑鳩の飛ぶ影淋しき波間のやれ寺にやいかならむ。南風は競はで空しう三吉野の奥、高嶺の嵐に夜の衣打ち返せし枕邊に、幾夜か常夜の燈を揭げしよ。あゝ、石山の秋、紫式部となん云へる絕世の才女が硯に匂ひしそれは、ルーエン河畔、金髪紅顔跡もなき巾幗ジャンヌが白骨の露宿りぬらん。思ふ、上下幾萬劫、有爲轉變の世に、月のみ獨り盈ちては虧け虧けては盈ち、永き歷史をば同じやうに照しつゝ、無言の誡もて澁む。かゝるもろ／＼の感慨に打たれて、西の窓に向ひ吟詠めば、月はやう／＼西山に傾きそめぬ。双岡の法師ならねど、などて圓どかなるをのみ見なんや、片破れの落ち行くそれに昔を忍ぶ、その哀れ又云ひ知らず。折しも、梟一聲啼いて月無し、暫し殘んの光うつらふが如く見ねし空に、しぐれ雲むらと湧き、邊りぬばたまの闇となりぬ。怪しや、何物かなめきて、妾を捕ふるが如き心しつ

評、語句生硬の嫌あれど、意匠巧みに出來て面白き節多し。

伊豫　珠川朋子

藤原隆經の歌のごとく、げに草の上の露なかりせばいかにして、今宵の月をよると見ましや。限もなきまで照り渡り、窓の前なる尾花が袖も其を打ち招き顔に、なく虫の音も心地よげに聞こゆるは皆われをそゝのかすなるらん、いざとよ、われは書見んと燈もつけで、文机により、ひもとけば、いよ／＼光りもさしそふめり。むかしたふとき人、さかしき人達も、おなじ此月を見て、めでは

やし給ひしならんを、とおもへば其人々に逢ひぬる心地して、いよ／＼あきらめがたかりし稚の心も、やすけかりけり。つれにいぎたなき我が身さへ、今宵は月にさへかはり、心もすむをこれよりの後のよな／＼にしたくもかな、とおもへば、よみをはりてもいとゞ目もあはず。夜はやう／＼ふけゆきて月も山の端にかたぶきけるをりしも、母上のいねよとものし給ふに、打ちおどろき、枕につきぬ、うち眠る夢路は、なほ月と書とをたどりゆきてぞ、はれざるらめ。

評、奇趣とてはなけれど、簡潔にしてよし。（以下原稿到着順）

大阪　桝田益子

柴の戸たゝく水鶏の外は、誰おとづるゝ物もなき、伏庵も、月の光のやぶし分ければ、窓のすき漏る、さやけき影の嬉しさよ。夜も長月のなが／＼しとも、我世の更け行くを覺ねまに、いそしまばやと書共とうでゝ、そこはかとなく讀みもて行まゝに、いよよ桂の光りは澄みまさりて、さながら晝の如く、燈火もかたはら木のやうなり。心のあれは、いや進みに進みて、卷の數々繰り返し見つゝ、今昔の事共つら／＼思ひめぐらせば、かの石山に其世の月を友に、言玉の光り輝やかせし、紫の君の故こと。唐の邵康節となんいひける人の、山がたづける、なり所のあはれさも、今宵の光りに、いとゞ其上の偲ばるゝよ。はた、江湖といへりし人は、夜な／＼此の光りに、こゝたくの書を紐とき、影やゝ傾きぬれば、屋に昇りていそしみぬとぞ。今は大御代の光り、月にさしそひあまれく、行き渡りて、都は更なり、鄙の末野も、限なければ、雲鬟のあらぬ物思ひもなく、おのがじゝ心のまゝにいそしみなば、濱邊に生ふる玉藻も刈るべく、和田の底ひ、鮑白玉もかつくべく、其まばゆき光り、みるめうるはしき玉をあさらんには、輿やに引かん望月の、心の駒に鞭打て、はげまざらめやは。つもればと人のと、いひけん老も、いとゞ遙けく、あはれと詠め來し、月影の幾世もあらねば、雲井行、月のみ舟の中空にたゞよはず、心のま舵しゞぬきて、あからしま風、ふき荒るゝ共、漕ぎ渡りて大海原に、いでなん事を諫め顔にも、書の表を照らしぬる、月の光りのいと嬉しくて、中／＼に問はぬにまさる、樂しさにこそと、入るさの影のいと惜しまれて、山の端にげてといふ、言の葉さへ思ひいでられてなむ。

繰りかへし、みるふみのみか、むらくもの
こゝろのやみも、照らす月かな。

長崎　内藤美與子

暗部の山も、越ゆるばかり、月のあかゝりければ、何くれの物語ども、とう出つ。光はひろに、まかへども、流石にたど／＼しうて、あかぬ心地なんしける。實に年毎に開けて、學の業も進み行く、かたじけなき大御世は、古人の夢にも見ざりつる、さま／＼の燈火も見出され、なれては、油もてともす火は、暗しとかこたるゝも、今の人の心のおごりにや。昔唐土人は、月をともし火にかへ、ふみ讀しとなん。こはいとかたきわざにぞありける、かばかりさやけきも、分け迷ふ鳥の跡、雲かゝる夜は、何とかしけんと、思ふもをかし。何事も足はぬことなき御代に逢奉るは、如何なるゑにしにかありけんと、打喜ばれつゝ、見もて行く文は、大宮の御垣は、くづれて南殿は、わらはの遊び所と、讀みさして悲しく、其夜の月の光も、かくばかり明からんには、悔しきいきどほりを、傳へざらましを、杯くりかへし、月やはものをと、打誦して、手折らん桂もありや、なしやと、長き夜さへいと更けて、虫の音も我おこたりや、かこつらんと聞くもいと詑し。

山形　楢岡ひで

いと／＼暑き夏の日もやう／＼西の山の端に隠れ夕べを告ぐる鐘

のまに〳〵薄暗き燈火の元にて例の如く文机に寄りかゝりて、古今和歌集を讀みてありけるが、ふと心づきてまどの障子を明くれば、いつ昇りけむ、十五夜の月は恰も大盆の如く、丸く我顏を照しぬ。

いかで〳〵斯の如き明光を捨てゝ、かの薄暗き燈火の元にて、文讀まむは詮なし、早く其書を持ち來らんと文机をゑんの端に置きて、月の光にひらき見れば、其明なること晝にも劣らず。すゞし氣なる風にふかれつゝ、暫く一心に讀書してけるが、思はず知らず夜をふかしけるに、思ひつきて時計を見れば、早や十二時となりにける。

さても涼しきすが〳〵しき月かな、あゝ斯の如き月は、今日を限らぬことながら、徒に過ぎ行く景色のいと惜しく、せめては及ばぬ筆もて記し見むと、書きつられたるになん。

中村ちさと

天を仰ぎ見れば、月中天にのぼり、鏡の如き光ります〳〵清くさへ渡りたる風情、何にたとへんものなし。此長夜を空しく過ごさんも口惜しければ、獨り擔端にて何くれとなく、書ども讀み行くに、心も打ち沈みて、讀みし條はときかれしうたがひも、おのづからにとけ行くなど、ゑもいはれぬうれしうなん、古へのかしこき學得たる狩野圓書の如き、三年の苦學を一夜の月光にあらはせしとか、實にかゝる夜にてもありしかと、其節の有樣も浮びて、何となく心もいさみ、猶文讀む程に何やらうす暗くなりぬ。あなと眺むれば、以前の月かすかに墨雲におほはれしかば、今はとて寢屋に入りぬ。

黑田すま子

月かげいとゞすみわたり、夜いとふけゆくに、おとづるゝ友もなし、つれ〳〵のあまり、平素怠りがちなる文机の塵うちはらひ、文取り出で、月の光にて、そこゝとよみはじむるうち、心もおのづとしづまり、夜のふくるも知らで、文の林をたどり入るに、かの名高き紫式部が、石山寺にものせしくだりとなりぬ。あはれゆかしき君がわざなりなど思ひ出で、おのがおこなひの事ども胸に浮び、げに恥しき事なり。此の開けゆく大御代に生れながら、わらはのみ獨りおくるゝとは、まことに恥しき到りなりなど思ひつゞけ居るうちに、夜もおひ〳〵更けにしかば、いざやと文を收めて、伏戸に入りぬ。されどさま〴〵の事ども忍ばれて、ねられぬまゝに、またもとの處にゆきて、窓おしあけ見れば、月かげいよ〳〵さはゆきてすさまじき程なり、あゝかの石山寺を照らせしもこの月なれや。

村川ゆう子

見上ぐる方の空涼しく、星の光やう〳〵に明かうなり、池にはかはずの鳴き聲の喚しく、妾はひとり机に寄りかゝり、私見なしつるに、外は恰も白晝の如く、何しか峯に上りし月影は、樹間をもれ窓にさし入り、かきねに咲き亂れたる朝顏は、白露を含みて一しほ麗しさを添へたり。暫し景色に見とれ居たりしが、ふと思ひつき、又書見せしに、此書の中にていたく妾の心に感ぜしを、此夜景色のために、一層感じを深くせり。知らず〳〵凡そなかば程も讀み盡し居たり。今まで池の面は鏡の如く、月はあり〳〵とうつりしを、上より梨の實一つ落ち來りて、漣のため月はかき消す如くなりぬ。あら惜しやとしばし茫然として居りしが、俄に書の面は薄暗くなりしかば、こはいかにと仰ぎ見れば、惜しいかな、月は雲間に隱れたり。やがて切りに眠りを催し、書を枕にし居たるに、又月は雲間を出でゝきら〳〵と光りながら、妾の眠りをさまさすが如し。げにや月下の讀書は、心を感動せしむるものにこそ。

# 秋の庭

德水廣子

夜ごとの月にさそはれつゝあれば、われもおもひいでゝ、虫の音ともろともに、まちかねし月にてらして、修身書のありけるを擧たてゝよみぬ。さやかなる月に浮雲のかゝりけるを、今しばしと思ふまもなくさしいでし月かげのあきらけきみことの、こよなくて。うき心なよそに、ひたすら讀書に心うつせしまゝに、はや半すぎてふと心づきぬ。只一人てらされしこゝちして。いとおもわゆくおぼねて、おろかなる身のかゝる術に心とめければ、月も殊なしてめでたくきよけくてらしたまふならんと、日ごろのふるまひのはづかしくて、身を修めし人の幸福はいかばかりならんと、深くかんじて、月をふしながみぬ。

佐々有鄰子

今日は秋もなかばとなりぬ。夕ぐれちかくなりければ、窓の小竹葉におく露も、庭の小草の葉末にすだく虫のねも、とり〳〵あはれなるころは、心もいとゞしみ〴〵となりはべりて、文の林に、わけいる可く。むのづから。その道にぞすゝみけるものから机の島のちりうちはらひ、硯の海の汀かきはらひ、紙魚のすみかの文草ひき出づるころ、小窓のすげきをもりくる月限なくてらし待りぬ。殘暑のなやみもいつしかゝきやりすてられぬれば、和漢賢哲を、月の鏡にてらしみるも、君の惠の露ふかき大御代の恋にこそ。

西施蒙二不潔一則人皆掩レ鼻而過レ之。

孟子



# 社告

●來月以後の兼題左の如し

| | 歌 | 文 |
|---|---|---|
| 十一月 五日… | 谷落葉 | 紅葉のたよりを故郷につげやる文 |
| 十一月 廿日… | 水鳥 | 殘菊 |
| 十二月 五日… | 竹間霰 | 入營する新兵の母に送る文 |
| 十二月 廿日… | 雪中興 | 煤取 |

〆切期限は、總て發兌期日十一日前、即、五日分は前の月の廿四日、廿日分はその月の九日とす。

## ◎投稿心得

○兼題歌文は、女子は、何人にても隨意投稿することを得。

○投稿用紙は半紙(歌は半截文は全紙二折の事)。

○歌は題毎に用紙を別にし、一題には、一人一首、

若しくは二首を限りとす。上の句の中に、二音の漢字を一字入れ、其他は、悉く平假名若しくは、一音の漢字にて認むべし。

○文は、毎行字數を一定し、且、句讀點を施すべし。

○歌文とも、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離して、分明に認め、住所姓名は、題目の下に明記すべし。

○投稿宛名は、國光社女鑑編輯部とすべし。

○總て書式に、違ひたるもの、及び、期日に後るるものは沒書とす。

○投稿題文中、天地人を撰び、天には女鑑三部、地に同二部、人に同一部を贈呈す。




## ○御救恤

去月二十八日非常暴風雨にて被害尠からざる趣憫然に思召され　聖上　皇后兩陛下より左の各縣へ御救恤として金圓御下賜の御沙汰あらせられし由にて宮内省より各縣へ傳達せりといふ

| | |
|---|---|
| 一金一萬七千圓 | 茨城縣へ |
| 一金一萬四千圓 | 栃木縣へ |
| 一金六千八百圓 | 千葉縣へ |
| 一金六千圓 | 福島縣へ |
| 一金四千二百圓 | 山形縣へ |
| 一金千二百圓 | 神奈川縣へ |
| 一金八百圓 | 埼玉縣へ |
| 一金五百圓 | 宮城縣へ |
| 一金三百五十圓 | 群馬縣へ |

○淳宮殿下の御箸初式　淳宮雍仁親王殿下には十六日午前十時青山御所御出門川村伯邸に御移轉相成りたるが猶來二十三日午前九時を以て御箸初式を行はせられ御近侍の方々に御祝酒を賜はる筈なりと

○故北白川宮殿下御銅像　小石川砲兵工廠に於て鑄造中の處既に全く落成を告げしにより、去五

日午前六時同廠より竹橋内北通用御門前なる近衛第一聯隊門前の建造地に運搬せしに豫て故殿下の麾下に在りたる將校兵士は勿論現近衛師團長を始め各中隊より十人宛合計三百八十餘人、工兵三十人、騎兵三十人、松平家務監督、田中家令等隨從して移し奉り來る二十八日の御忌日迄に建造を了る都合なりといふ

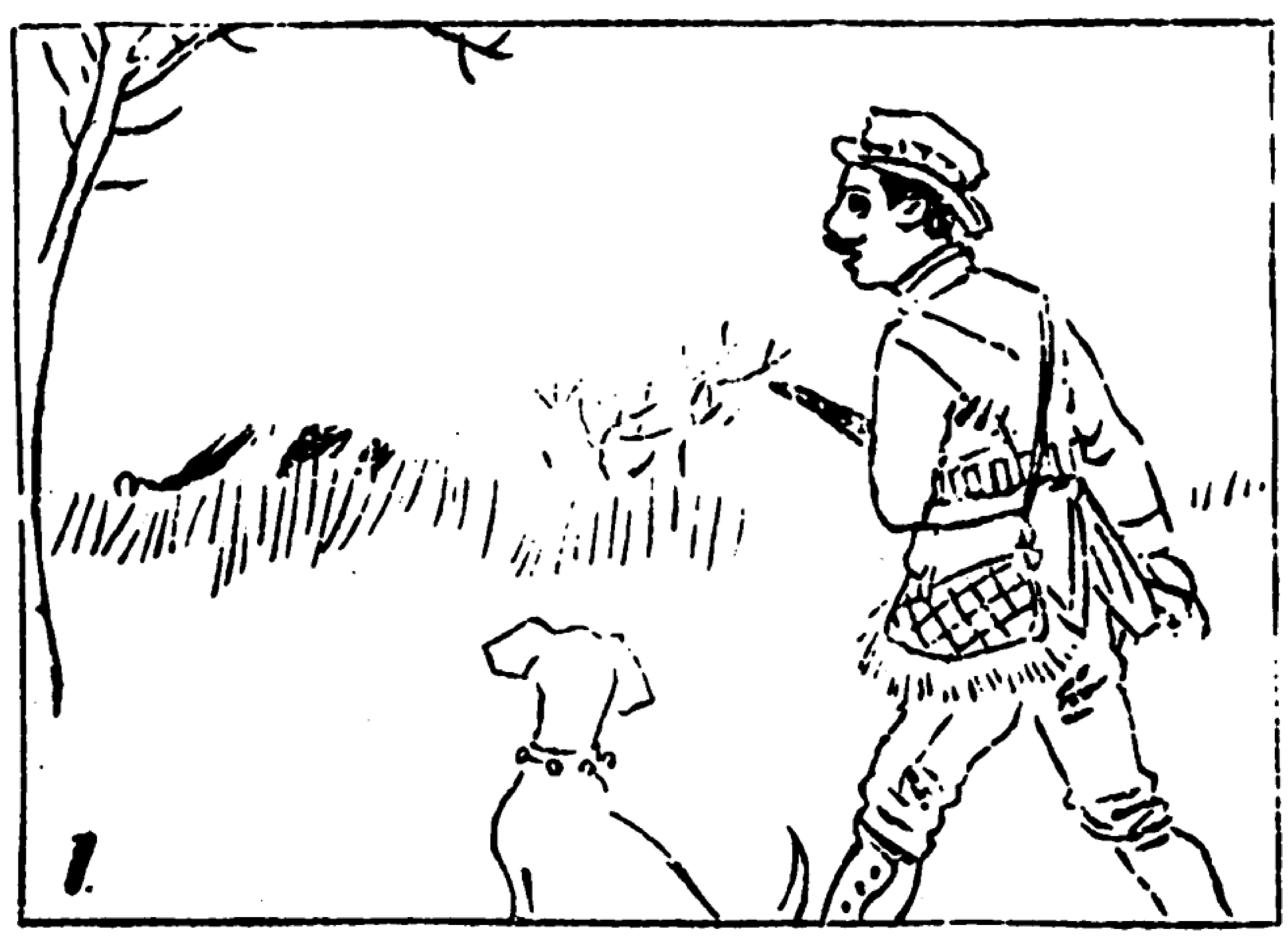
○賀陽宮妃好子殿下　には今般日本赤十字社篤志看護婦名譽會員を御承諾あらせられたりと

○小松大宮殿下の御深慮　彼の鳥島噴火の大慘事は實に我國に於ける未曾有の天變地異にて幾多の生靈は猛烈なる火焔の爲め生きながら焦熱地獄の底に葬れて其の亡骸の影だに探むるに由なく變災後同島に赴きし不幸ある慘死を遂げし人々の親戚故舊等も其死體を發掘するの見込さへなくて空しく涙を飲みつゝ立戻りし程なるが同島の租借者玉置半右衛門氏は是等羅災者の靈を慰めんとて青山の墓地に紀念碑を建設する由なるが同氏は碑銘の揮毫を彰仁親王殿下に請ひ奉らむと其の旨殿下に願ひ出でたるに豫て同島の慘事に同情の涙を濺がせ給ひし殿下は快く揮毫の願意を聞屆けさせ給ひしが初め玉置氏の願ひ出でし「鳥島羅災哀悼紀念碑」の九文字を見給ひて直ちに別當花房義質氏をお側近く召され此の九文字の中哀悼の二字は省きし方可ならむ彼の變災に犧牲となりし人々を哀悼するは何人も同じ事ながら只徒らに悲み悔まむには今後新たに圖南の志を懷く人々の勇氣を挫く事ともなりやせむ左にはあらずやとの仰せに花房別當は畏みて殿下の思召の程を玉置氏に傳へられ偖こそ單に「鳥島羅災紀念碑」の七大字の御染筆を賜はりしなるが今に始めぬ殿下が男々しき御深慮の程こそ有難き極みにて我國の健兒等の一日も圖

南の計畫を忽かせにせで殿下の御心に添ひ奉るべきなれ

○鳥島罹災遺族救助金　鳥島罹災人民の遺族に對し　兩陛下より御下賜の御恵恤金一千圓一般慈善家より義捐金八千八百八十七圓三十五錢は其々配付規程に依り其遺族へ配附せらるゝ筈にて東京府は去六日横濱出帆の滊船兵庫丸に屬官を搭乘せしめ島地へ赴かしめたるが配付を受くべき遺族の戸數は四十七戸にて千圓に對し最多額四十圓最少額五圓の割合なり

○漢文教授法　奎運の發達に伴ひて直接著しき打擊を蒙りたるは最近の漢文學其の一にして漢字全廢の聲する教育大家の口より



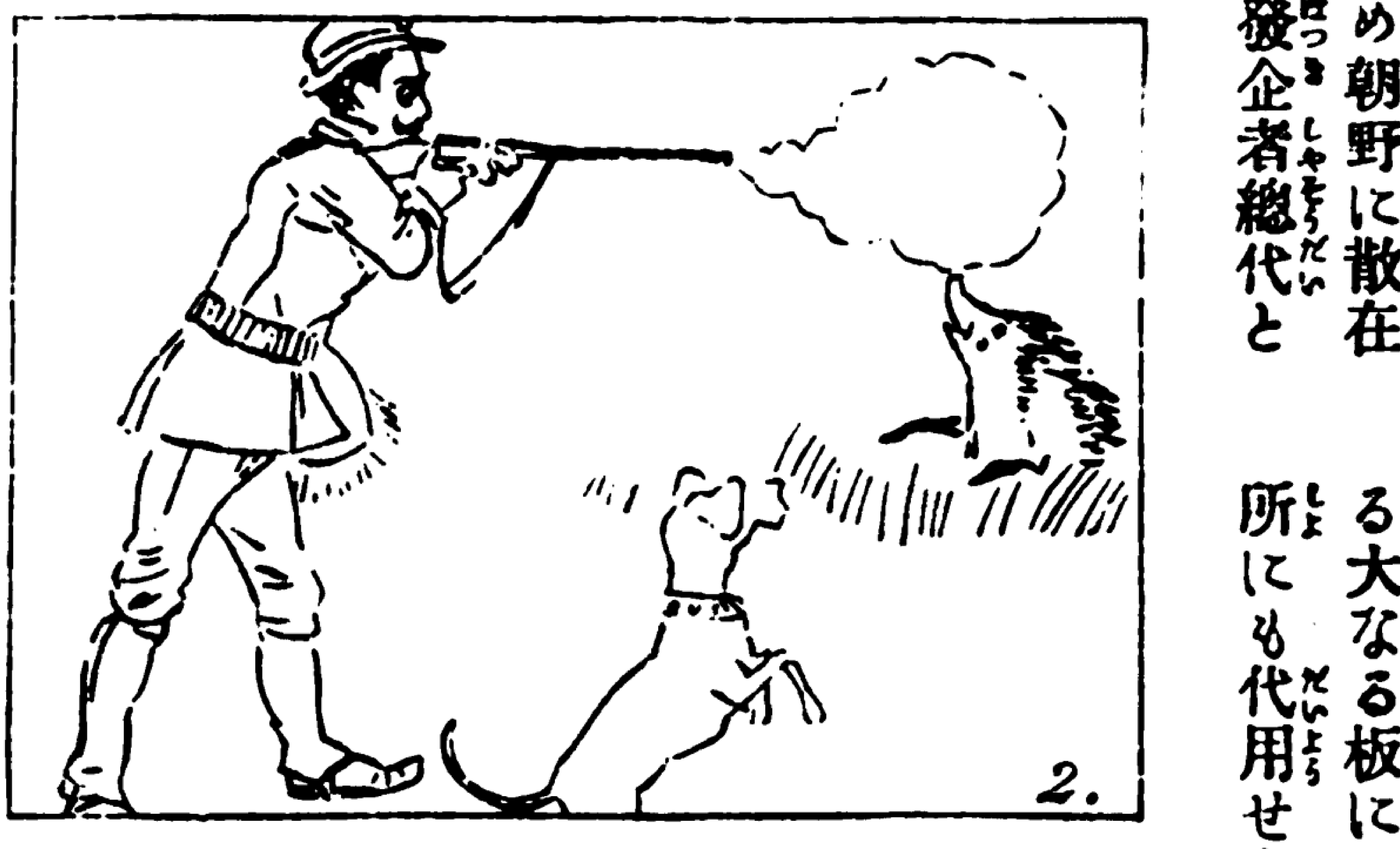
迸出する有樣にして既に斯道に在るものは勿論斯道に志すものゝ均しく之れが防禦を努むるは亦た已むを得ざる自然の數なるが右は果して漢字、漢文が人文の發達を阻碍するものなりや否やは猶ほ未決の問題なれば彼の外國語の研究と同じく其の適當なる教授法を發見して世界に於ける最大最古なる國家の歷史及び思想の研究を忘るる勿からしめんてどの議帝國教育會々員中の有力者より建議せられ同會にても早晩之に關する調査を爲すに至るべしといふ

○後藤氏在職廿五年祝賀會　東京高等師範學校教授後藤牧太氏の在職二十五年祝賀式は過日小石川大學植物園に於て擧行せられた

り此日の賛成出席者は菊池文相を始め朝野に散在せる敎育家數百名にして伊澤修二氏發企者總代として式辭を述べ夫れより菊池文相辻帝國敎育會長其の他諸氏の祝辭、後藤氏の挨拶ありて同五時より祝宴を開きたり該祝賀式は眞に敎育家各團體より成れるものなると且つ後藤氏を祝するものなれば名刺帖を後藤氏に呈せると氏の肖像を高等師範學校に献納せるに止まり最と質素厳粛なる祝賀式なりし由

○耐火兼防水性の板を發明す

英國の一商會は此程ウラリートと稱する耐火兼防水性の板を發明したる由なり此物はアスベストス(石綿)に他の物質を混じて造りたる大なる板にして總て木の板を用ふる如何なる場所にも代用せられ得べく瓦の代用として妙なり又熱及び寒氣を吸收せず價極めて廉なるを以て今後家屋の重要なる建築材料として盛んに使用せらるゝに至るべしと云ふ



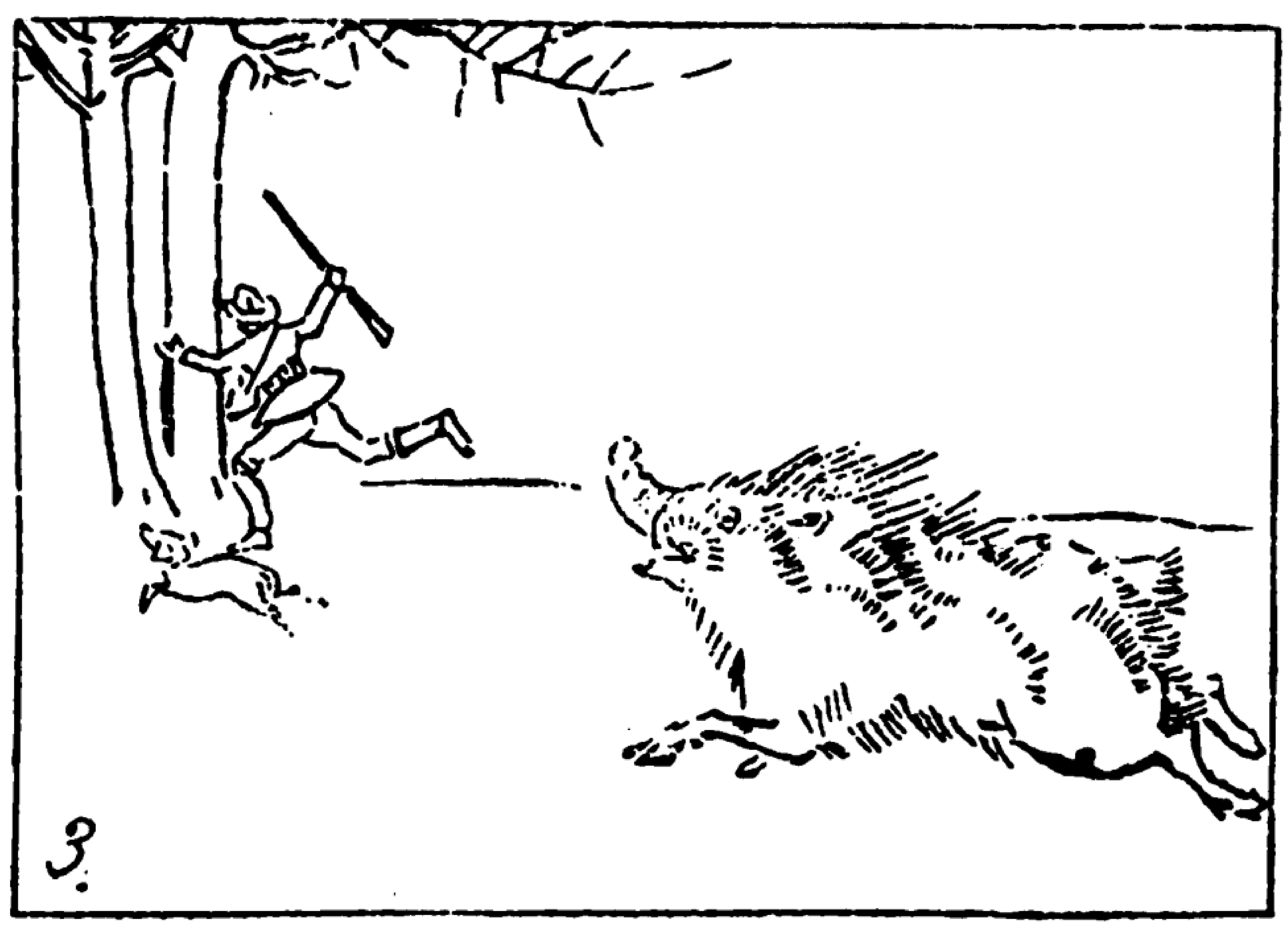

○無線電信の新成功　マルコン

氏の無線電信は是まで海上を隔てたる遠距離に在りては單に相圖を爲すを得るに止まりしも去九月中氏の伊國政府より乘組を命ぜられたる軍艦に搭じ地中海の伊國海岸に碇泊中伊國西班牙其他の國王大臣に宛て丶一片の電文を發信したるに右各國王大臣等より電文の正確に通じたる旨の答電を得し由右は佛國及西班牙を通過し又アル

プス山を越え地中海を横斷し九百哩乃至一千一百哩の距離に通信するを得たる新實驗なれば一千五百哩以上の遠距離を隔てゝ無線電信を發受するを得るや否やの問題は全く解決を得たるを以て歐米兩大陸間の通信は遠からずして實行せらるべしとマルコン氏自ら談れりといふ

○ヒュース孃の歸國　久しく我國教育制度視察として來朝中なりし英人ヒュース孃は愈々來十六日出發淸國に立寄り歸英する筈なりと

○三輪田女學校の開校式　麴町區四番町に新築されたる同校は豫記の如く去る四日を以て新築落成式及び開校式を擧行したり當日來賓の重なるは大隈伯、松平伯、千家東京府知事、岡部子、坪井博士、成瀨女子大學校長、森村日本銀行理事、大倉喜八郎の諸氏及び佐野伯夫人、松平子夫人、水野子夫人、松前子夫人、安井、濱尾、鳩山、山脇、淺田、後閑、棚橋、坂田の各夫人等朝野知名の女子教育に關係ある人々二百餘名なりし敎頭三輪田文學士の報告、校長三輪田眞佐子刀自の式辭了り左の祝詞朗讀ありて稀有の盛式なりしといふ



女子ハ家政ヲ整理シ、其夫ヲシテ毫モ内顧ノ憂ナカラシムルト共ニ、其子女ヲ輔育薫陶スルノ重任ヲ擔フモノナリ。故ニ女子ガ少時ニ於ケル智德ノ修養如何ハ、啻ニ家庭ノ良否ニ關係ヲ及ボスノミナラズ、延テ國民ノ習俗ニ影響スルモノト謂ハザルベカラズ、女子敎育ノ要豈多言ヲ竢タンヤ。

吾邦近年敎育ノ進歩ニ伴ヒ、女子ノ敎育モ亦漸次振興ノ緒ニ就

キタリト雖、事尙創始ニ屬スルヲ以テ愼重ノ留意ヲ要スルコト甚多シ、是レ現今女子敎育ニ一身ヲ委ヌルモノヽ責任極メテ重且大ナル所以ナリ。願フニ一般女子敎育ノ成果トシテ期望スベキハ、英華煥發ノ才媛ヲ出スニアラズシテ寧ロ貞淑溫厚ノ良妻賢母ヲ作ルニアリ。三輪田氏ハ夙ニ女流ヲ以テ多年敎育ニ從事セラレ、其蘊蓄經驗スル所ニヨリテ、今ヤ新ニ一校ヲ經營シ、玆ニ開校ノ典ヲ擧グルニ至レリ。國家ノ爲メ深ク慶賀スベキナリ。自今其管理薰陶兩ツナガラ宜シキヲ得、女子敎育ノ本旨ヲ貫徹シ、以テ益々校運ノ隆昌ヲ致サンヿ余ノ希望シテ止マザル所ナリ、聊一言ヲ陳テ祝意ヲ表ス。

明治三十五年十月四日

文部大臣理學博士男爵　菊池大麓

三輪田女史多年身ヲ敎育ニ委シテ令聞頗ル高シ道同感ズル所アリ自ラ女學校設立ノ企劃ヲナシ私資家財ヲ擧ゲテ之ヲ其ノ資ニ投ジ遂ニ校舍建築ノ業ヲ大成シテ玆ニ開校ノ典ヲ擧ルニ至ル新道ノ爲メ洵ニ賀セザルヲ得ザルナリ。

近時々運ノ趨勢ハ女子敎育ノ勃興ヲ促シ女子ノ學ニ志ス者日ニ多キヲ加ヘ女子ノ爲メニ設クル所ノ學校モ亦月ニ其ノ數ヲ增スニ至ル洵ニ國家ノ慶事ト謂フベシ然レドモ女子ノ品性陶冶ハ識者ノ夙ニ難ズル所ニシテ學校經營者ノ最モ焦慮スベキ所ナリトス顧ソニ女子敎育ノ要ハ徒ニ學識藝能ヲ授クルヲ以テ足レリトセズ女子ヲシテ高



潔ナル心術ト鞏固ナル德操トヲ具ヘシムルヲ以テ其ノ本旨トセザル可ラズ本校ノ起ルヤ蓋シ此ノ本旨ヲ貫徹セントスルニ在ルヤ知ルベキノミ世ノ望ヲ本校ニ屬スルノ厚キ豈夫レ偶然ナランヤ

今ヤ女史ノ高風ヲ慕ヒ遠邇來リ學ブ者其ノ門ニ滿テリ望ムラクハ諸子能ク本校ノ趣旨ヲ体シテ智識ト德操トヲ磨キ以テ本校ノ特質ヲ發揮セン事ヲ式ニ莅ミ一言ヲ述ベテ祝詞トス

明治三十五年十月四日

東京府知事正三位勳三等男爵　千家尊福

三輪田女學校ノ新築落成セルヲ以テ開校ノ式ヲ擧行セラル顧フニ近年文運大ニ開ケ男女ノ就業スル者日ヲ逐フテ多ク到ル處校舍ノ狹隘ナルヲ以テ入學ヲ拒絕スルノ已ムコトヲ得ザルニ至レリ大小各種ノ學校皆然ラザルナシ殊ニ女子ノ學校比較的少數ニシテ其ノ高等ナルモノハ最少シトス有志者之ヲ默視スルニ忍ビズ私立ノ學校ヲ設ケテ之ヲ補ハン事ヲ謀ル其ノ數已ニ數十ノ多キニ及ベリ而シテ此ノ學校モ亦其ノ一ニ居ル此レ固ニ生徒及父兄ノ滿足スル所ナルベクシテ余輩女子敎育ニ從事スルモノヽ深ク欣喜スル所ナリ此等ノ學校ハ皆普通學科ノ稍高等ナルモノヲ授クルニ於テハ大抵同一ナルベシト雖モ設立者ノ見ル所ニ依リ其奬勵セントスル主要ノ點ニ至リテハ多少ノ差異ナキ事能ハズ此レ

各學校ノ特色ヲ具フル所以ナルベシ三輪田女學校設立ノ旨趣ハ前ニ表示シタル趣意書ニ詳ナルヲ以テ爰ニ反覆スルヲ要セザルベシト雖モ余ガ一言セント欲スル者ハ此學校ノ特色トシテ生徒ノ品性ヲ薫陶スル爲メ尤利アルベキコト是ナリ蓋シ校主タル三輪田先生ハ子トシテ其ノ親ニ事ヘ妻トシテ其ノ夫ヲ助ケ母トシテ其子ヲ育スル一モ女子ノ標準ニ非ザルハナシ啻ニ其ノ學問ノ豊富ナル其ノ教授ノ親切ナルノミニ非ズ生徒諸氏ハ遠ク古人又ハ外國ノ人ニ就キテ其標準トスベキ人ヲ求ムルヲ要セズシテ目前ノ校主ヲ標準トスルコトヲ得ベシ此即チ三輪田女學校ノ特色ニシテ生徒ノ品性ヲ薫陶スルニ利アル所以ナルベシ之ヲ祝辭トス

明治三十五年十月四日　細川潤次郎

### ○ペストの看護婦

世間の仕事を見るに表面に現はれたるものは世にも人にも知られて其功績を示すを得れども其裏面にありて働くものは表面にあるものよりも其勢多くして然かも其の功現はれざるは遺憾と云ふべし今回横濱に發生せるペストに就て當局者等が日夜奔走の勢は市民の諒する所なれども親しく危險なる患者に當りて之れが治療看護に從事せる醫師看護婦の苦心勞苦に至りては恐らくは之れを知らざるもの多からむ今萬治病院に於て患者取扱の情況を聞くに其中にて最も感ずべきは看護婦の勞苦なり萬治病院にてはペスト患者を容るゝため狹けれども一棟の收容室あり今日は患者一人に就て一室を與へ居れるが患者の看護に從事せるものは青木ちよ内藤いと淺香すい三看護婦にして今日に至る迄患者室に詰切りたる儘一歩も外に出でず熱心に看護に從事し居れり、今回のペスト患者は激性のものにして病院に收容後八時間若くは十時間



にして死去せしほどなれば其の苦惱の甚だしき時には突然起き上りて器物を擲付け枕を裂き衣物を破りて甚だしきは看護婦に攫みかかりて顔手などを掻き中には看護婦の面上に痰を吐き掛けるものさへあり現に内藤看護婦の如きは患者のため顔を引掻れて其がため三日間隔離室にて消毒を受けたりと云ふペストと聞いてさへも慄ひ上る女性の身もて如何に職務とは云へ患者の身體に接近し體温呼吸等を計り起居一切の世話をなすのみならず燥急なる患者の爲種々の亂暴を忍ぶは最と感ずべき事といふべし

○英國貴族夫人には平民の娘多し　第二十世紀



時勢の潮流とも言ふべきならむ乎、英國の貴族社會に於ては近來同族同志が結婚せずして、却つて賢母良妻を平民の階級より求むる傾となれり。其著しき一例を擧ぐれば、ハミルトン侯爵夫人は、地方平民の女、ソマセット侯爵夫人は蘇格蘭人、マヅキノン孃と言ひし人、ビユーフォート侯爵夫人は、グルースターシャイヤのハーフォード孃と言ひし人、ベドフォート侯爵夫人は、牧師の娘、ツライプ孃と言ひし人、ポートランド侯爵夫人は、もとのダラス、ロークス孃、ニユーカッスル侯爵夫人は、もとのカンチー孃、ウエストミンスター侯爵夫人は、コーンウオリス、ウエスト孃、マルボロー

侯爵夫人と兩マンチエスター侯爵夫人は、三人共に平民國たるヤンキーの女にして、英國にては、侯爵夫人となるに、最早伯爵家に生れし者にあらずとも可なりと。

○公使夫人男と見誤らる　此程倫敦に於て、外國使臣を招きたる宴會ありしに、駐英清國公使夫人は、男子の控所へ案内せられたる由なり。こは、服裝の男子に似たるより、男子と見誤られたるなりと云ふ。

## ○落葉籠

●汽車や鐵道馬車の中では、なるたけ煙草も飲まないのが、禮義であると聞いて居ましたが、煙草はまだしも、酒に御醉いなされた御方が、熟柹臭い呼吸をなされるのには、何とも閉口の次第であります。これは何とか取締りの道はありますまいか(本鄕駒込とり子)

●私は御敎えに預かりまして、早速常盤御前と、靜御前を讀みましたが、寔に面白う御座いました、一寸御禮を申します(靜岡吉山しづ子)

●新篇ひめかゞみは申分のない家庭の讀物と存じます。だうか二篇、三篇と續いて御出版なされたいものであります(福岡山田よし子)

●女鑑の内に女子に必要なる簡易な英語の會話と、讀本位のものを毎號順を逐うて、御掲載なされたなら、女學生の爲に有益であらうと存じます(松本一女子)

## ○新刊寄贈

| | | |
|---|---|---|
| 體育 | 第百六號 | 日本體育會 |
| 令德 | 第九號 | 令德會本部 |
| 婦人と小供 | 第十號 | フレーベル會 |
| 兒童研究 | 第八號 | 教育研究所 |
| 日本婦人 | 第三十五號 | 帝國婦人協會 |
| 大福帳 | 第十二號 | 丹心館 |

| | | |
|---|---|---|
| 大日本婦人教育雜誌 | 第百四十七號 | 大日本婦人會 |
| 女子之友 | 第百二十三號 | 東洋社 |
| 偕行社記事 | 第二百九十八、九號 | 偕行社 |
| 女學世界 | 第十二、三號 | 博文館 |
| 中央公論 | 第十號 | 反省社 |
| 愛國婦人 | 第十三、四號 | 愛國婦人會 |
| 料理法講義錄 | 第五號 | 大日本割烹學會 |
| 裏錦 | 第百十九號 | 尚絅社 |
| 家庭の友 | 第六、七號 | 時事新報社 |
| 兒童新聞 | 第二十一、二號 | 兒童新聞社 |
| 六合雜誌 | 第二百六十一號 | 日本ゆにてりあん會 |
| をんな | 第九號 | 大日本女學會 |
| 教育公報 | 第二百六十三號 | 帝國教育會 |
| 新聲 | 第三號 | 新聲社 |
| 慶應義塾學報 | 第五十六號 | 慶應義塾 |
| 佛聲 | 第七號 | 佛聲發行所 |
| 家庭 | 第十號 | 家庭發行所 |
| 佛教 | 第九號 | 佛教社 |
| 經濟新報 | 第十四號 | 經濟新報社 |
| 藥石新報 | 第四百四十號 | 藥石新報社 |
| 法學新誌 | 第十一號 | 講法會 |
| 日州教育會雜誌 | 第三十九號 | 日州教育會 |
| 高知教育雜誌 | 第百二十四號 | 高知教育會 |
| 婦女新聞 | 第百二十六號 | 婦女新聞社 |
| 成功 | 第一號 | 成功社 |
| 勞働世界 | 第六年第十八號 | 勞働新聞社 |
| 近畿評論 | 第四十五號 | 近畿評論社 |
| 明治才媛文集 | | 東洋社 |

## 次號豫告

**女鑑第貳百六拾四號**は發行日を特に**天長節**の當日たる十一月**三日**に繰上げ聊か奉祝の微意を表すると共に表紙、口繪、及び紙面、記事等に改良擴張を加へ且つ別に**秋季大附錄**として紙數凡そ**數十頁**を増し左記諸家の寄稿に係る意匠斬新にして趣味豊富なる**小說**を掲ぐべし

**廣津柳浪**
**中村春雨**
**柳川春葉**

右に付本號に限り特に**數千册**を**増刷**致し候に付**廣告希望**の向は來る**二十五日**まで御申込み有之度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

孃さん方がお待ちかねの

# 少女讀本

月の卷が出來ました



堀内新泉著 ◎ 壹册定價拾八錢郵税四錢

## 花の實に對する批評

◎毎日新聞評　堀内新泉子の雅馴の筆に成れる家庭讀本にして、最も面白く、且つ有益の册子なり、目次花の實、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等なり

◎萬朝報評　まじめな所があつて先づ〳〵善い讀本と云はねばならぬ。

◎婦女新聞評　家庭小說を以て一旗幟を立つる堀内新泉子の著にして十三四の少女に讀ましむるため純潔なる短篇小說數種を集めたるものなり面白くをかしくまた哀れに悲しき間に敎訓的意味を含ませて娵たり妻たり母たるもの、心得を說きたれば家庭の讀本として最上のものならん續いて出づべき月の卷雪の卷こそ待遠しけれ

◎教育時論評　家庭向の著書、花の實、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等の諸篇あり、家庭敎育の一助となすべし

◎中央公論評　家庭讀本老人讀本を著はしたる氏は又少女讀本を著はせり、アドヶ無き物語中自然に敎訓を含む家庭の讀物として最も珍重すべし

◎東京日々新聞評　家庭讀本をあらはして以來、常に斯かる著を公にして、世の好評をほしいまゝにせし老人讀本に續いて今又この著をなす、趣味の淺深は暫くこゝに言はず、吾人はたゞその年少女子を害すなきを喜ぶ。

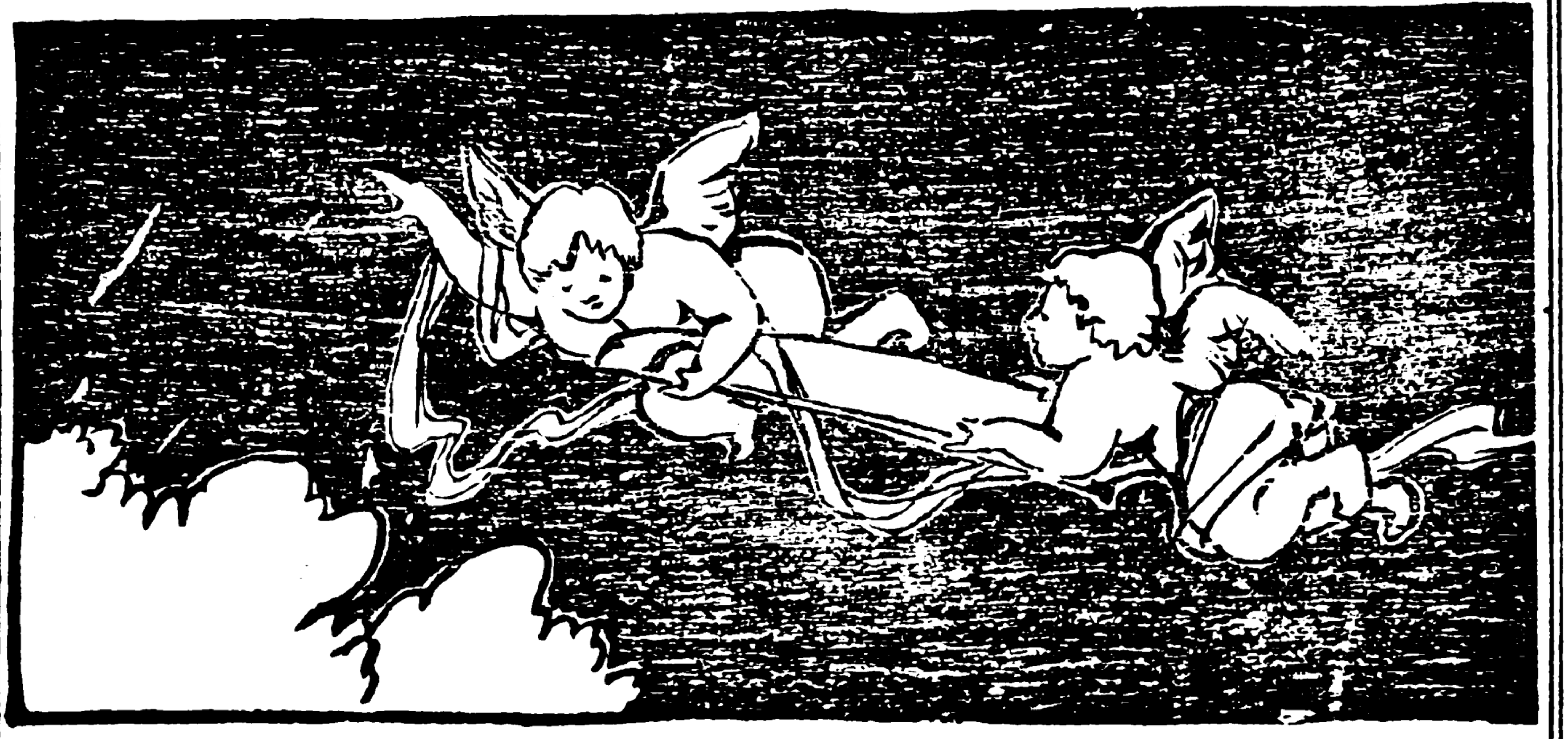
◎國民新聞評　花の實、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等、既に少女らしき名題にして、著者亦た夙に此種の書に經驗あり、且つ成功したるに近し、夏の浴場、避暑の山、少女の調度の中に收めらるゝは、またなく應しかるべし。

◎國文學評　花の實、ゆき姫、野末の露、玉椿、山吹、ぬひはり、の六篇を輯めて、一册としたもの、皆、孰れも、敎訓の意を寓して、最も、少女に適するやうな、誠に邪のない物語である。讀み終つた跡に、淸らかな和氣藹々たる家庭の面影が、髣髴として、目前にあらはれる、やうな心地がする。吾人は、既に、著者の『家庭讀本』を讀みて、その筆の、斯の種の著作に甚だ適するもののあるを見たが、本書を讀みて、なほその然るもののあるを認める。著者の、美はしき性格が、おのづと筆の上に現はれるものであらう。

發行所　東京築地　國光社出版部

◎賣捌　國光書房　北隆館　東京堂　文魁堂

堀内新泉子著



一個の美人身は良家に生れ姿麗はしく才かしこく廣く中外の音樂を研究して其蘊奥を極めしが月下氷人の媒妁にて一個の青年と赤縄を結び、音樂の効により陰鬱柔懦なる良人の心機を一轉して勇進敢爲の、丈夫となし、遂に或る一大事業を成功せしむると云ふ趣向斬新の家庭小説にて、春宵孤閨に泣くの新婦、秋夜明月に歌ふの夫妻、一面出産の歡樂、他面洋行の別離、と悲

# 家庭小説 女樂師 再版

喜忽ち變じ、哀樂俄に移り、讀者をして應接に暇あらざらしむ、而も主要は一家を輯睦して子孫の繁昌を圖るに歸せり、著者が家庭小説に別才あるは、大方諸君の知らせ玉ふ所、一本を座右に置かれなば、特り秋夜の幽寂を慰むるのみならで、家庭教育を裨益すること疑ひなし

壹部定價參拾五錢　郵稅六錢

發行所　東京國光社出版部

御文注の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●新刊廣告●

現今諸名家撰述　國光社出版部編纂　壹部金貳拾五錢　郵税四錢

女子必讀

# 新編ひめかゞみ　全

近世女子教育の年に月に盛んなるに隨ひ、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずとも評すべき閨媛の彬々として世に現はるゝは誠に喜ぶべき事ながら、專ら智育を宗として、重きを德育に置かざる餘弊にや、さばかりの才媛にても其操行如何と顧る時は案外眼に一丁字なき鄙の賤の女にも及ばぬ者多く、其甚しきに至りてはふりがな新聞の三面に、父母良人の名迄汚す者さへ少なからず、斯くては古今東西の書を讀み盡せしとて何かせむ、誠に嘆はしき限りなり、本社茲に慨する事久し、仍て當今諸名家の文章中より近世列女の傳記を抄出し、之を賢良、忠義、孝行、節操、才學の五綱に分ちて編纂刊行することゝなせり、抑方今文明日進の際時勢に伴ふて女子の本分を盡さんと欲せば、操行學藝兩全ならざるべからず、學藝は花にして操行は實なり、花ありて實ありてこそ始めて完全の女子と謂ふことを得べし、世上の才媛淑女諸君本書を熟讀玩味して花實を一身に兼ね備へ玉はんことを祈る、傳文撰述の作家中重なる人々の姓名を左に錄す

細川潤次郎　大町桂月　三輪田眞佐子　鹽井雨江　久米幹文　山川清溪　井上頼文　以下數十家

發行所　東京市京橋區築地二丁目　國光社出版部

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

# 靜御前

國府犀東著

四六三切袖珍各壹冊十三錢郵税二錢

續刊

巴御前

虎御前

佛御前

白拍子龜菊

花より明くる三吉野の萬樹の櫻に、香魂を留め、後人をして長く其の貞操義烈に泣かしめたる靜御前は則ち是れなり。堀河の夜襲何ぞ無殘なる。大物浦の浪風何ぞ暴虐なる。山中の白雪は生別離の哀を埋むること深く、神殿の舞袖は相思戀の怨を寄せて長し。婀娜幽婉にして而かも意氣大丈夫を凌ぐの概ある古美人の面影は犀東氏の筆に依りて、例の美麗なる袖珍書の上に活躍し、讀者をして、身其境に臨み、其人に接し、其聲を聞くの思あらしむ。

近刊

袈裟御前

顏世御前

勾當内侍

辨内侍

既刊◎常磐御前　大町文學士著

國光社出版部發兌

明治三十五年十月廿日發行

# 女鑑

毎月二回五日廿日發行
第貳百六拾參號

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可







貳丁目株式會社國光社